

小説探偵

血染の手巾

神戸又新日報掲載
中村兵衛著

特 11

730

094482-000-0

特 11-730

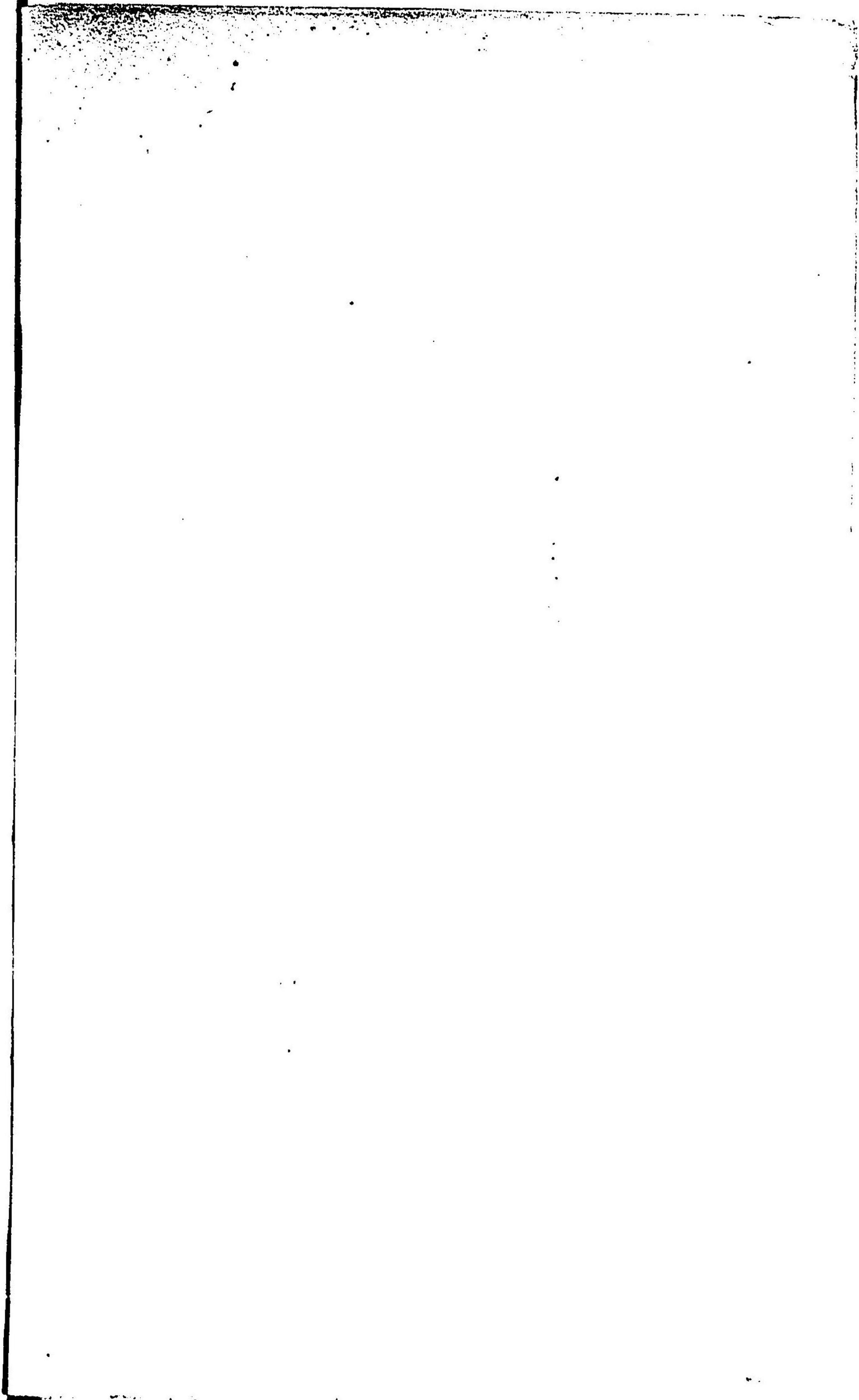
血染の手巾

中村 兵衛 / 著

M42

DBQ-1994





特11
730



染
の
手
巾

明治
42 12 18
白雲



序

探偵小説流行當時、神戸又新日報紙上に連載して望外の好評を博せし血染の手巾は、今樋口隆文館主人の手に據り更に洗ひ清めて美冊子となる、然れども本編は其経緯脚色を主として、一字一句の文飾なく小説としての價值に乏きを耻づ、看官夫れ之を諒せよ。

神戸又新日報編輯局

巳酉初冬

中村兵衛



血染の手巾

神戸又新日報記者

中村兵衛著

時は今より二十餘年の昔、國會開設の二年前ある明治二十一年十二月五日、夜は森々と更けて銀座の大時計も早一時を報せんとする少し前ありき、東京の慣ひとて都人は格別苦にせざれど骨に徹る寒さは誰が身にも變りあければ、巡査も風に面を反向け今や采女ヶ原に來懸りぬ、其頃淋しき箇所といへば先指に折らるゝ日比谷の原に、采女ヶ原の名のみは優しけれど先年仙臺邸の高利貸が虐殺されて以來、辻強盗の追刺ぎに出逢ひしものも屢々にて、警官も夜に入れば必らず偵邏する規定とあり居るにぞ、巡査は精養軒といへる洋食店を左に見て

采女橋を打渡り向は左へ河岸を過ぎ行けば、寒風は益々凜烈にして剃刀にて顔を斬らるゝ如き、西北の筑波風、身を顛はせて吹くやう「ア、寒いア、全体東京といふところは痛い風の吹く土地だ、僕は兵庫縣の有年で生れた者だから斯んを寒さは知らんが……併し職掌も寒い職掌だ、人は炬燵で暖かく寝て居る時分、風に吹かれたり或時は、雨に濡れ雪に惱まされ……然も薄給で……ア、思ふまいく之も國家の爲と思やア、何でも早い通行人も早いから早く受持たけ巡回して交代しよう、早く行くべし」と早足に行き過さんとせしが、立止りて「イヤくさうであい、斯ういふ通行人の早い際には、大に注意すべしだ通る奴が早いから若し通る奴があつたら、夫こそ曲者だぞ待てくさう急いでも行かれぬぞ」と獨語つゝ、歩行みしが風は愈々吹荒びに、外套の頭巾と襟に首を埋めて來かゝる折しも「キヤア」と叫ぶ聲、巡查も驚きて「ハナナ今の聲は何だ……ア、風で分らぬか……」と暫し名みて耳を傾けしが、後は聲なく依然寂寥たる原中、耳に觸るゝは河岸に立つ松に颯々たる響き、岸に颯々と打寄する浪音のみ、目に觸るゝは寒月皎々、白晝かと擬ふ月の牙わて物姿

し、流石に巡查は物馴れたる事として獨り背きつゝ猶身を縮め、息を殺し帯剣も足に觸るゝ音せぬやうと、靴音をも忍びて傍への石置場の月影に隠れ、二歩三歩と足を進ませ、四邊の動靜を考ふるに、又も聞ゆるは「人殺し……助けて」と叫ぶは正に婦人が揚げたる悲鳴の聲「扱こそ、彼の聲はッ」と一散に駆け付けたるは、洋風の軒家にて、采女ヶ原の化物邸とて此界限に風評ある家あれば容赦なく、表門と思へる方に馳せ向ひたり。巡查は拳を上げて表戸を、壊れん許りに打叩き「コラ、門を開けろ、今の聲は門だ開けんか、此扉を開けろ」と繰返して打てど叩けど應答なく、只靜かに夜は益々更るのみ、巡查は熱々考ふるに、今の聲は必定生死の境ともいへる場合あるべし、賊の所爲か喧嘩の果か知らねど、若し躊躇せば人の生命に係る事やも知れず、兎にも角門内迄も入りて處置すべしと心を決したれど如何にせん門は堅く鎖され開くべくもあらず、扉は煉瓦にセメントを塗り固めて、足懸りさへかき高扉あるに、詮方盡きて猶豫ひしが、此時采女橋の袂を西へ曲り來れる消防夫二人あり、刺子の長半纏に同じ頭巾の目のみを出し、左の脇に處

口を抱へて右手にも組と記せし提灯を携へて、夜警のために巡り来るを見し巡査は「消防夫〜」と呼ぶに 甲「へー 巡一寸来い〜」 乙「行くま〜」 甲「ナセだ、巡査が呼んでるんだせ 乙「だから行くあつてねんだ深夜に巡査が呼ぶア碌を用ちやアねわや、火事でもボヤでもねわやうだから行くあ、過日も横町の辰の野郎が、鳥原で巡査に呼れて行つたら首縊りがあつたんでト〜」 一晩、首縊りの番をさせられたつていふせ 甲「でも返辭をして丁つた」と問答する体を見たる巡査は「コラあせ来んのだ、返辭をしあから 乙「へー……仕方かねわ行つて見よう」と兩人はさも不性無性に、巡査の前に来りて一禮し 甲「何か御用でげすか 巡、ウム一寸此門を開けて呉れ 乙「申戯いつちやア可げやせん、中には門か錠がありませう 巡、可い叩き毀せ 甲「へー亂暴ですあ 乙「火事でもあるんですか 巡、火事ぢやあいが、猶豫しては居られん早く毀せッ 甲「面白い、やつしける 乙「中から泥棒が長い刀を引抜いて、出て来たら何うする 甲「捕アねわ、やつしける」と素より血氣の消防夫、面白半分には爲口を振り廻して丁々」と打てば、流石に己が職務とて、出火の場合には大厦高樓、此爲口に支ゆべき

技倆、忽ち門の扉は開きたり、得たりと巡査は門内へ踏込めば、御影の敷石五六間の左右、平庭に作りて正面ある家屋は洋風の二階建て、錠戸より燈の差し居れば、此家の内からんと進み寄り入口の石段を登りて又も扉を叩き「コラ開けんか〜」と暫く叩きつゝさげびたりしも、聞として音あし、巡査は愈上焦立ちて「消防、此戸も打壊せろ 甲「又壊すのか」と獨り語ちつゝ兩人は互に顔を見合せしが、又振上る爲口の一度に當つて扉は美事に打倒れたる途端、室内より開ゆる若き婦人の悲鳴、今にも息の絶わんとする陰き聲に、巡査も思はず一足後に下りしが、消防夫等は石段に平伏りて顔色あし。 巡査は家の中へ進み入らんとして消防夫を顧み 巡「コラ消防夫消防夫 甲「へー命ばかりはお助け…… 巡、何をいふのだ、一寸来い」と呼べども兩人は、怪しげある腰つきして早門外へ遁れんとするに 巡「コラ来んか」と一喝したれど兩人は顔見合せて囁くやう 乙「だから俺の言はねわ事ぢやアねわや、深夜に巡査が呼ぶア碌を用ちやアあからうつて言つたんだ、汝かへいあんで胡麻摺りに行つたから斯んあことにあつたんだ 甲「今の聲ぢやア人殺だあア」 巡査は又も

大喝 巡「コラ来いッ……其年長の奴、一寸来い」誰々一人は巡査の前に来り、
甲「何か御用ですか 巡査の毒だが直ぐに二人で京橋警察署に駆付けて、今此
邸に變事があるから部長に早く出張されるやうにと急報して来い、大石巡査の
命だと、言へ 甲「オヤ、此寒いのに京橋まで行くんですか 巡早く行けッ 甲
「ヤイ鐵公、大變な事にあつたせ京橋の署まで行くんだとよ」一人は小聲にて
乙「ナ、行かなくても宜い逃げろ」巡「コラ怪しからん事を言ふ奴だ、
其方姓名は何といふ 甲「オヤ、手帳へ書留められるんですか 巡名は何とい
ふか 甲「金入 巡姓は 甲「セイは徴兵検査のときに五尺二寸 巡「馬鹿め背の高
さではない 甲「溝口金入 巡住所は 甲「木挽町二丁目十三番地で 巡「宜し早く
行けッ、一人は巡査に姓名を知られしより、今は是非なく迷惑顔して急ぎ京橋
署へ報知したり、大石巡査は家の中に立入りて歸べたるに、階下は洋風の室に
して應接室、客室、食堂等ありて、一室毎に瓦敷の燈は輝けども人の影だにあ
し、されば兇行の場所は二階にやあらんと階子を登り見るに、樓上は和洋折衷
の構造にして四室に分れ、寢室は二室にて寢臺を置き、残る二室は日本風にし

て襖を閉てあるに之を開きて細かく二室とも調べたるも、皆瓦敷の明るみに照
して悉く見透けど、鮮血の痕もあく被害者も居らねば、加害者の潜むべき處
もあし、奇異の思ひに巡査は裏表の窓にまで眼を配りて意を注げども何等の異
状もあく静謐あり、階子段を下りて又も戸外を窺へども、是亦人の居るべきけ
はひもせざれば首を傾けて思案に暮るゝ折から、大勢の人聲して門外に足音激
しきより、巡査も同じく内を走り出れば、京橋警察署長は巡査部長と共に、三
名の巡査を随へ消防夫を案内者として馳付けたる所あれば、大石巡査は一禮を
施すと共に署長は徐ろに口を開き 節「大石全体何うしたのか、賊か謀殺か何だ」
と問はれて大石巡査は其答へに躊躇して 大「ソレが少しも分らんです 節「ナニ
分らん、分らんのにナニ急報した」と詰り懸けたり

大石巡査は署長に向ひて「署長、私は斯様な不思議な事件に出合つた事はありません、現に此家から悲鳴の聲が聞けて居るが、何れの座敷も何事もありません、加害者も被害者も居らず取散らした室もありません、署長では君の間違ひで此家ではあかつたのであらう、大イヤ夫れです、不審に堪へられんのは儘に此家から出た聲なのです、私一人から或は間違ひといふ事もありませんが、既に此消防夫が中の扉を毀した時に共に聞いて居たのです……消防夫彼の悲鳴の聲は知つて居るあア」といふに、二人の消防夫は目を圓くして「甲、エ、知つてるところぢやありません、乙、彼の聲で腰が半抜になつたんです」署長も益々怪訝の念を起して「大石、案内せよ」とあるに又も樓上樓下、細かに調べたるに何の異状もなく、一同は顔と顔を見合せて唯無言に考へ居りしが、大石巡査は「署長、全体此家は妙です、此位の構へをして居るに、雇人さへ居らぬといふは……オ、消防夫……汝は何か此家に附いて聞いた事はありますか、甲、へー何だか存じませんが、此の家ア化物邸だつて言ひます、大ナニ化物邸、何ういふ者が住んで居るか、知つて居るから云へ、乙、へー私達も泡ア食つて面喰つちやなん

で、虚心して居やしたがチヨイと過日聞いたには、別嬪の好い娘があるさうで母親さんと二人切りで奉公人も使つて居ねわさうです、何しろ度胸の宜い女です、此淋しい采女ヶ原の一軒屋へ、タツタ二人であア、甲、何でも此夏まで人が住まねわで、荒れてたもんですから、化物邸々々つていふです」と聞いて大石巡査は、猶も不審を増すのみれば、又立上りて彼方此方の室内を一入細かく詮議に懸り、日本風の一室に入りて、調べしが、巡署長、此戸柵は錠の懸る處もあいに戸が非常に堅いんですが、開けて見ても宜いでせうか、署長、くもあいが、ア不審の箇處は調べて見給へ」と許しを得たれば先づ其押入れを見るに更紗張りにして赤銅の引手を附けたり、巡署長、一寸手を貸して呉れ給へ、馬鹿に堅いんだから」といふより事あれと、待受けたる血氣の巡査三名「宜し、此戸か」と各々手を懸け戸尻と、引手に二人づゝ懸りて「ヤツ」と力を籠めて引開くれば、堅かりしも道理にて無理に押入れたる一個の屍骸、背を戸に撞せられたれば其爲に戸は押れて堅かりしあり、引開くる途端にバツタリ轉げ出したるは鮮血に塗みれし美人の死骸、之ぞ消防夫が申立てたる別嬪の好い

娘とは之あるべしと、一同驚いて其死骸を見るに、戸棚の中も鮮血淋漓、目も當てられぬ有様あり。

轉び落ちしは花の如き婦人の、血に染みし屍あるに、署長も巡査も顔見合せて顔色あし、物馴れたる署長は「オイ山田、汝は直に署へ歸つて裁物所へ急報の手續きをせへ」といふに一人の巡査は「ハイ」と言ひさま、戸外の方佩剣を左手に引上げて靴音高く立去つたり、後に署長は部長并に大石巡査と共に、細かく死骸を検するに、鋭利ある刃物を以て斬つたるあらんか、肩腕、背と乳の下の四個所の中の女の急處といへる乳の下、斑漬きが致命の原因あらん、娘は亂れし髪も高島田に結びたるらしく常盤小紋に霞小紋を二枚重ねたる小袖に銀杏鶴の紋あり、羽織も同じく松葉小紋に同じ紋を付け、黒襦袢に青く雲龍を織出し朱にて稻妻を走らせたる丸帯を結び、其他長襦袢より肌着、さては髪は物に至るまで五分も透かぬ好みは、天晴紳士の令嬢と思はれたり、署長は大石に向ひて「加害者は何處から逃走したのか、君が其悲鳴の聲を聞いてから、室内へ入つたんぢやから分つて居らう、何方から逃げたと思ふか 大イヤ逃げ路は

あいです、此高い石塀の中で一方口の構内、私が飛込んでから、逃げる猶豫はありませんが、私が二階でも調べて居る中、逃れんとすれば、此廣くもあい家ですから足音あり、又何んとか人の氣息がすれば知れるです」署長は猶も眉を擧めて「逃げ口のあい處からは逃げられん、猫や鼠ぢやあし……マア逃げたとしても、此家の主人といふ母親の方は何うしたのか 大私の考へでは、或は其母ある者が此娘を殺して、勝手知つたる我家ですから、何處からか逃げたものかと思ひますが何うでせう 署イヤ現在の母が子を殺すといふ事はない、夫も繼母とかいふからイヤ知らず、今僕が此肖像畫で心付いたが、此右にあるは此娘ぢや、左りにあるは母親に違ひない容貌まで似て居る、實母が實子まで殺すといふやうな事はない 大イヤ随分あります 署あるとは 大若しも精神に異常を呈した如き場合には何うですか、精神の錯亂し易い婦人の事ですから、随分親でも子を殺さんとは申されません 署成程、君のいふ所一理あつて面白い、新進の巡査で斯る點まで心付は大に宜しい……だが未だ考へが足らん、決して之は精神錯亂した、母が殺したのであいといふ事が一見して知れてる 大ハ、

ア何うして知れます 署、此娘の傷口を見ると、加害者は婦人かぞでない、尤も
 注意の深い奴で斯うしたら死ぬかよまでに考へて、乳の下まで刺しあるんぢや
 精神錯亂した者は所謂夢中で無茶苦茶に斬るが常であるに斯く初めから充分の
 力を籠めて斬つて懸つたは、現然見えてあるから、加害者は他に「ある」といへ
 るに大石巡査も署長の卓見に感したる處へ豫審判事と醫師は車を列ねて駆け付
 たり
 判事の出張して調査したる結果、又怪しむべき點の發見せられしは、戸棚の中
 に丸めて片付けありし絨氈を廣げ見るに夥しき血汐の附着したるに、扱は此室
 にて殺害せしも、一時警官等の眼を眩まさんと斯く、巧みて血に塗れし敷物も
 死體も、此戸棚へ隠せしものあらんと、茲に又一つ不審の殿の現れたり、兎に
 角此事件に就いては第一、加害者を探ると同時に、此家の主人の行術をも求む
 べしと、直に非常線を敷きて四方を警戒し、翌朝にありて此死體を一時取片付
 けの爲め、京橋區役所の吏員へ引渡し置き、一方は其親戚を探りしも夫さへ少
 しも知れず、唯其寄留届のみ判明せしが、其頃のこととて今よりは戸籍法も正し

からず、唯兵庫縣神戸區南長狹通二丁目露木げん(長女ちか)のみ知れたれ
 ど夫さへ果して本籍あるや否や判然せず又親戚の有無も分らざれば、假埋葬に
 して、尙此家は其儘に置き置きたり、疑難者は數名ありたれど之と云ふ怪しき
 者なく、皆放免せられしが一度此事件の、東京廿一社の新聞紙上に掲げられて
 より、警視廳を初め府下廿八の警察署三千の巡査三百の刑事は、皆腕を扼して
 何卒此怪しき曲者を捕縛せん、此化物邸の主人の行術を探らんと種々苦心し、
 探偵怠りあかりしも此事件の起りし十二月五日より越へて十一日とあるも、少
 しも其手懸りなく一同調へ倦みて、居りしが彼の大石巡査は十一日の朝に至り
 突然署長より刑事巡査を命ずとの辭令に接したり、大石は心中に署長の好意を
 深く謝し、自分も未だ警察に職を奉ずる事、日も猶淺く經驗もあけれど、今回
 の事件は最初より自分が關係あれば、特に此大石に刑事を命せられたるからん
 ど、大に喜び直ちに露木ちか殺害事件の探偵に着手したり先第一に大石巡査は
 其身の正服を脱ぎ平常着ある薩摩飛白羽織に同じ衣類、紺絞りの兵兒帯を後ろ
 に結び、紺足袋に麻裏草履を穿きて、何思ひけん、彼の化物邸と名付けられし

采女ヶ原の露木の宅へ来りけり、大石は獨り言へるやう、實に此邸ほど不思議な家はない、最初キヤツと云ふ聲が聞けて居ながら、何事もなく、漸くにして死体を發見すれば逃げ口もなきに曲者は逃走して居る、又主人の行術は知れんといふ、ホンに化物邸とは能く言つた……斯んを家には又何か變つた事があるまいものでもない……夫に此家は立派な家財家具も澤山あるから、又何んを奴が出入りせまいもんでもない今夜は此家に一晚寝すの番をやつて見てやらう、第一着は此家から探偵をして見るが捷徑であらう」と邸の構内へ門の破れより忍入りたり。

三

大石刑事は、家は前日に調査したれど庭の結構には目を止めざりしが、今始めて構内を窺ふに小さけれども築山あり泉水あり、雪見燈籠の配置なども宜く

風雅といふ程にはあらぬも先立派なる庭園あり、家は既に封印したる儘なれば入る事も適はざれど構内だけは、充分探査も出来得れば前日の足らざるを補ふ心にて、彼方此方を調べ了りて獨り語「ア、不思議な家だ別に怪しい所もないが全体彼の曲者は、何うして何處から逃げやアがつたのか、又此家の主人は何うしちまつたんだらう……待て……考へて見ると、今度の事件は東京中の老練な刑事が皆腕に捻りを懸けて、調べて居るんだから、我々のやうな無經驗な者には却々一寸に知れる氣支ひはないんだ……併しさういつて落膽して下へば夫限りだが……待てよ、其思案は斯ういふ静か處で獨り私に考へるに限る……假令老練家が何んかに必死の働きをしてやらうとも、僕は僕で熱心と勉強といふ奴で屹度踏まへてやる素より署長も見るところがあつて僕如き者に突然刑事を命ずとの辭令を下げられたんだ、何うかして一刻も早く加害者を押へて、老練探偵の鼻を明かせてやらなくつちやあらい」と一心籠めて思案に暮るゝ石燈籠の月影、腕拱ぬきて千思萬考の末、何か思ひ附きたる事にもありしか小陰を打つて「旨い、同事も下等社會の狀態から窺ふと、犯罪は多く下流から發

見するもんだ……宜しく、僕自身は翌朝からは下等社畜にゐる」とと獨り背く折から、月は雲間に隠れて薄暗く遠く聞ゆる、小犬の吠を慕ふ聲に和して川水の響きに通ずるは本願寺の鐘にやあらん、冬枯れの庭に扉際近く立つ柳はさしたる風もあきに戦きて物凄し、大石巡査も心淋しく思ひしか「もう今の鐘は十二時だも、思ひ出しやア此家は人殺しがあつたんだ、ア、五六日前にあの死骸を見てから、今日までも、何だかいやあ心持ちがして居る、見た當日は辨當の飯も食わなかつた、十七歳の別嬪が血だらけで……ア、寝ずの番はもう止さう、何も別に効はあからう……ア、寒くあつて来た」と慄として身を顫はせつゝ立去らんとする時、柳は益々枝も幹も諸共にユラユラと動き出すに、大石は愈々氣味悪く「コソヤ出るぞ、幽霊だく、梅に雀、竹に雀、柳に幽霊は附きものだナンボ探偵でも幽霊の探偵あんぞは出来んか、此奴ア困つたかア」と疑心暗鬼の裡如何はせんと行みしが、柳は今にも倒れんとするまでに揺り動きて止まらざれば、大石は怖々ながらに其柳の方へ近寄らんとしたるが、最と驚きたる面色にて「ソラ出た」と思はず小聲に叫びたり

柳の枝に片手を懸けて、半身を扉の上に見せしは、頬冠りせし一人の男にて、懸て石扉の上に立上りて四邊を窺ふ体あれば、大石刑事は愈々呆れて幽霊かと思ひしに、意外にも曲者あり斯る奴の出入りするとは知らざりしが我も又好き所に心附きて、此家へ今宵忍び入りしは幸ひありし此上は彼奴を引捕へて一ト詮議せんものと、又も石燈籠の影に身を潜めて窺ふに、曲者は刑事の見るも知らざるものと見えて、懸て懐中より麻裏草履を取出し下に投げて、最と身軽く下に降立ち咳きして、悠然と此方へ進むに大石は此時、雲間を洩出る月に透して見れば、冠りし手拭に面体は知れざれど烏打帽の上に、手拭を冠り身には立む羽織にて尻裏げまでしたるは益物馴れし曲者と思ひながら、最早猶豫すべき時あらねば、袂ある捕縄を取出し繩の端に輪を作つて、先己が手首に通し、曲者の手を取りて、繩を迂らし一端を引く時に自然曲者の手は縛らるやう仕掛け置き、大石は突然飛出しながら大喝一聲「曲者ッ」と叫んで彼の手を取らんとなれば、彼は驚きて逃走するらんと思ふに、彼も又「曲者ッ」と叫びつゝ大石の手を捕へたり己れッ「ナニ、己れッ」と暫しは二人共に体術の覺がある

ものと見ね、上にあり下にあり頻りに争ひ合ふ中に彼の方や勝ちけん大石は下に組敷れて胸元を締附られ身動きもあらず残念と叫びつゝ身を掻くのみ、其中に彼は大石の顔を熱視て「ヤツ大石君ぢやあいか 大、然んも曲者に知つた奴はあゝ、彼は手拭と帽子を取つて、大石を引起し、僕だよ 大、ヤツ水村君か……何んだ探偵同士の鉢合せか……ア、痛い、僕の咽を厭つて程締めて 水君こそ僕の手を緊く縛つたもんだから、肉へ喰込んで痛いの痛くあいの 大、ア、失敬した 水、して君は今夜、此家へ何しに來た 大、僕は不疑の番の試験に來た 水、ウー君は素人探偵にしちや、旨い考へだ 大、イヤ素人と言やア僕は今日光華にあつて……君は數年、老練家だから、何かと教へて貰ひたいと思つて君の家へ行つたら、お不在であつたよ 水、さうかナニ教へるあんで譯にやア行かねわが、僕は五十三にあるまで行つてる仕事だ、又相談相手にあらう 大、イヤ有難い、所が君は此家に何ういふ見込があつて來た 水、此家はもう三晩忍んで見たが何にも變つたことはない 大、ウーン流石は水村君、もう三晩もやつたか 水、ソコで先日兇行のあつた當時、僕は横濱へ行つて居て知らなかつたんだが、其

被害の現場を見たいのだが、何と君殺された場處へ案内して呉れんか 大、宜しだが署長が封印して了つたせ 水、ナニ僕が破つて了ふ」と言切つた 大石刑事も署長の封印を破つてもといへる、水村刑事の決心に感ずると共に自身も同情を表し「宜し、君が然ういふ決心から僕も大にやる被害の現場は僕が巨細に案内しよう、以來は何うか一心同体と思つて何かと共に運動しよう 水、イヤ君は近頃の青年と違つて、誠に頼母しい兎角巡査上りの新米刑事は、経験もあゝい癖に生意氣を言ばかり吐て可けあゝ、自慢ぢやあゝ僕もんざア、親の代から八丁堀の目明しから出て駈出しの盗人や巾着切は知るまいが、少し黒人を強盗でも窃盗でも拘摸でも、僕の面を知らねわ奴はねわんだ、だから又君等とは見る所が違ふ、夫に君が青年の熱心でやれば、僕が數年の老練と共に力を協せて、屹度面白い事にあらうせ 大、イヤ大に然うだ」と言へる中に、水村刑事は早封印をも引破り「サア可し室内へ入らう……だが困つたもア真暗だ、最う瓦斯はメートルは止めたらう、オイ大石君チヨイと燈火を點けて呉れ 大、僕等は燐寸は持つて來あかつた 水、然んも事ぢやア未だ素人だ、サア此箱にある」と

渡せば大石は手を取りて「ヤツ、此鐵葉の箱は……ウム構寸に蠟燭……恐れ入つた注意周到だ……ヤツ此小さい鋸と小刀は何にするんだ 水、それア、屎尻切りの道具だ 大、ウム、ぢやア君は屎尻切を内職にあるか 水、申戯いふも、ア探偵は盗人と同じやうな商賈だ、斯んか時にやア其位の準備はして来なくつちア可いあい 大、聴いたあア……サア燈火が黠いた」と先へ立ちて、彼方此方へ火を照して、此室が應接みらんか此室が居室みらんかと、案内して聽ては階子段を登りて二階の間毎を見せるに、流石に水村老探偵は見るもの聞くもの、細かに注目し落ちたる物の匂を嗅ぎ、又は口に味ひつゝ怪しき顔して彼の被害の現場ありし、日本風の一室の前に突立つたり大石は氣味惡氣に「水村君、此室だ娘のやられたは 水、先入つて見給へ 大、ア、君入れ 水、燈火を持った者が後に居ちやア可かん君から…… 大、それから君が燈火を持って……お年役だ先へ入れ 水、君は怖いんだね 大、ナニ怖い事は無い、水村も笑つて 水、イヤ實は僕も少し心持が悪いんだ、誰だつて一週間と経たない前に、此家に入殺しがあつたと思やア餘り宜い氣分はしないや、そんなら一、二で一緒に勢ひ宜く飛

込まう 大、宜からう」と二人諸共に踏込みて、四邊を窺ふに未だ血痕ある絨氈の其儘に丸めあり、血腥き氣は一室に籠るかと思はれて、何となく暗憚たる室内、先づ第一大石が眼につきしは、彼の娘が死骸の顯れし戸棚あり。

一四

水村刑事は數年の經驗に細かく調査したる家屋の中、先づ被害者露木ちかの死跡が現はれし戸棚の中を覗き込んとする一刹那、中より轟然たる響きが發すると共に水村は硝煙の中に撞とばかりに倒れたり、餘りの不意に大石刑事は「アッ」と驚きて後に二歩三步退きしが、扱て此戸棚の中に曲者の忍び居りて、我々の來りしに逃路をくつて、短銃を發せしからん、憎さも憎しと身構して其身を窺ふに、何者も居る氣色なきに、益々不審と先づ其戸二枚を外して見れど、又ニ物も目に入らず、四方の板羽目を叩くに、右なる一方は怪しき音すれば、

打碎きてもと激しく打叩くに、一尺程の板二枚はクルリと左右へ開きしにぞ、
愈不審と其中へ入らんとせしが、僅か二尺四方の此入口、身を横たへて入るよ
り外に便かし、入らんとすれば又は曲者は發砲するあらん、今是程の事件を發
見しあがら、此儘入る時は我と水村が唯徒らに犬死とありて人に知られず毒丸
に倒るゝのみ、心怯れしにはあらねど、一應此事を署へ急報して後、此中へ入
らば死すとも恨む所はあかるべし、と斯る呻嗟の場合にも靜に心を決して、水
村刑事を抱き起し、大「水村君々々」と呼びしが、水村は氣管を射貫れし急所
の痛手に「ウーン」と四苦八苦の中に、大石の顔を凝視めて何やら物言ひたげ
にすれば、大石は此負傷にては到底命は覺束をしと思へど勇氣をとへんと尙も
大「水村君、氣を確乎に持ち給へ、此位の疵で弱つちや可かんぞ」と言へども
答へなく、唯髪は逆立ち目は血走り舌唇を噛み締めて、顔色は紫色に變じ来る
に大石は耳元に口を寄せ、大「水村君、君に代つて今僕が兇行者は必らず押へる
ぞ、君の敵は僕が打つぞ」といふ聲に、左も嬉しく氣に笑を含みて、其儘ガツ
クリ落命せる容子に、大石は思はず兩眼に滿ちたる涙を拂ふ間も、戸棚の方へ

氣を配りて油断なく、死体は有合はず銃証を以て蔽ひ、ソツト其室を立出で、
家の裏口の締りあるを見定めて入口に扉を寄せ懸け門の口ある壊れし扉を傾け
て、外を見るに通行人とはあき深夜の事あれば、署へ急報せんとせば自身が行
かねばならず、自身が行かば其間には戸棚の中なる曲者が逃走せんも計られ
ず、如何はせんと暫しの間猶豫て居る中に、ガラ／＼と車の軌る音して一人の
車夫は俥を轆きながら、最と寒げに毛布を首に巻きつけて此方に來りければ、
之れ屈竟と大石刑事は「俥屋々々」と小聲に呼べば車夫は早乗客と思ひけん棍
棒を下へ突き「旦那何處まで参ります」と大石刑事の顔を眺めて驚きたり
車夫の驚きしも道理にて、大石刑事は水村刑事の身軀に觸れたれば、其鮮血を
顔の邊りより手あごに附着たる儘、恐しき権幕さへ見ゆるに、車夫は逃出さん
とするに又も呼止め、大「汝、驚くは尤もだが僕は決して怪しい者ではない、車
でも血だらけで……怪しい者ぢやないといつても……大「僕は京橋署の大石と
いふ刑事だが、後に賃錢はやるから直に京橋署へ駈附けて、部長でも署長でも
直に出張されるやうに……早く行け」と命じたれど、慄ねて恐れ居る車夫の

耳には、碌々それさへ通せず、一目散に駈出して京橋署へ駆付け、車々、大變です」と叫ぶに、受附ある巡査は深夜の事とて、殊更に驚き、巡ナ、何だ、何事だ、車、マア泡ア食つちやア可けません、巡、汝が泡ア食つて居るんだ氣を靜めろ、車、其何です、泥棒が血だらけにちつて俺は探偵だちんて……巡、ウーム、車、署長でも巡査でも何でも呼んで来い、何人亦ても俺が相手にすると威張つて居ます、巡、ウーンして曲者は一人か、車、門には一人ですが、未だ五人や十人は居ませう、彼の尋問では……巡、全体何處だ、車、采女町の原です、巡、若しや彼の一軒屋ではあいか、車、さうです、化物邸てわいよ家です」と車夫は誠空言打交せて、申立てるに巡査も驚き、當直の巡査部長に急報すれば、部長は更に車夫を尋問すると、其曲者の風体等より察するに大石刑事らしき節もあれば、取敢ず署長の宅へも急報しつゝ、自身は部下の巡査五名を率ゐて出張したり、續いて署長も五名の巡査を随へて駆付けしに、先刻より今かくと待受けたる大石は、大、署長、部長、非常な事が起りましたよ、署、非常とは何か、大、水村刑事が害られました、此一言に一統は顔と顔を見合せて、暫し詞も發し得ぬ中に、

署長は「大石、マア何ういふ譯か、大、イヤ躊躇しては居られんです、現場を見て下さい」と署長と部長の手を取らぬ許りに、二階へ案内し水村刑事の血に塗れし死跡を示すに署長も思はず「ウーム、惜しい刑事を殺した……して兇漢は大、ハイ此戸棚の中です、署、未だ居るか、大、サア夫は分らんですが、此板を御覽下さい」といひつゝ油断なく身構へして、彼の二尺四方位の板を左右へ割つて見せ、大、此中から一發放したので、水村君は害れたんです、話は前後しますが、今夜僕と水村君と二人で此家を探険に入つたんですが、其結果斯ういふ事にかつたんです、署長、僕は此中へ入つて……彼の水村君の敵を打ちます」と言ひ捨て、戸棚の中へ踏入らんとすれば、署長は之を止めて「待給へ、夫では毒丸の的とちつて犬死するやうなものだ、大、犬死は素より覺悟です」と勢ひ鋭く進んだり、署長は大石刑事を引止めて「大石、夫では甚だ氣の毒ではあるが、君は此戸棚の中へ這入つて呉れ給へ、君は今爰に死んでも職務の爲に斃れた功績は、永く我々が脳裡に刻んで警官の勳鑑とするぞ、大、有難いお詞です、僕は職にあるこ

ど日も尙淺きに、重き刑事に取立つて下すつた上官の御厚意は僕も亦、肝に銘じて死しても忘れません、唯一死以て其恩に報ずるのみです失敬」と部長初他の警官にも、會釋して戸棚の前へ進めば、署長は部長と共に十名の巡查を左右に配置して、充分に警戒しつゝ其戸棚の口を窺ふに、早や大石は身を横たへ左右の板戸を押し開きて、ツト進み入る勢ひに巡查等も、顔見合せ其勇気と威膽とに感じて言葉もあかりしが、今にも轟然一發の音と共に、大石は水村刑事の如き惨死を遂ぐるからんかと、平素大石と交はりある人は、殊に暗涙を呑んで茲に十二名は、手にく佩劍の柄を握りて、身構ふるに大石は、霧地に戸棚の中へ入る、暗れれども稍廣き所に出る心地すれば、益々勇氣を鼓舞して潜り入り、用意したる燐寸を掲げて見るに、見覚ぬある其次の室にして、一間の床の間ある外には、此室には置るべき箇處あし、愈よ不審の思ひして其床を見るに、元祿美人の畫幅を懸り一見女の居室らしく、七寶燒の花瓶に水仙を活けあり、他に一方の口あれば開き見たるも、此處へ出れば廊下にして、階子段へ降りざれば、出る事叶はず左すれば、水村君の打れし時も兇行者の、逃走するに

氣附かざる事は、あるまじきにと思索しつゝ、不圖心附きて其懸軸に右の手を掛けて、上へ引上ぐれば生憎に左の手に持ちし、一本の燐寸は消わたり既に二三本も擦りては照し、擦りては照し、したるを今又更に一本を點じて、其軸を引捲らんとする一刹那に、大石の身体にバツタリと衝りしは、正に人あるべしと思ひしも、其途端に又も燐寸の火を消され、其身も後かゝる方へ一足、下りし隙に再び響く霹靂一聲、大石は前に俯伏し倒れたり、其物音に今迄は戸棚の方にのみ、目を注ぎたる一同は驚きて、四邊を見るに署長は此響きを考へて「大室を開けて見ろ」と先へ足を進ますれば、部長も共に十名の巡查を指揮して次室へ第一は提灯を提げたる一人を突進させたるに、其一人は先驚きたる顔にて「署長、女が害れて居ります」といふに、又も一同は驚きつ、皆此室へ飛入れば此時に、階子段の方は速に騒しく、其響は恰かも駈下りんとする二三人の足音あり

五六人の巡查は階子段に向ひて、其足音のある方へ走り行けば、大石巡查は振り返りて「大、オ、君等は早く彼奴を逐駆けて捕まへて呉れ給へ」といふ巡查は怪しみて、曲者が居たのか。大、今床の間の懸物の後から短銃を放つて出た、僕は幸ひにして怪我もあかつたが、跡が心懸りだ、早く捕まへて呉れ」と言ひ捨て後戻りして来れば、残る五人の巡查と署長部長は、益々不審の眉を顰め、署、オ、大石か、今の足音は何か。大、此懸物を捲ると曲者が飛出したんです、今其後を追駆けて貰ひましたが、曲者が僕に向つて發砲した際、何か人のやうな物が私の懸へ衝りましたから、夫も氣懸りで一寸引返しました。署、ウム、其衝つたといふのは此死骸だ」と提灯を差突くるに、半輪四五六の婦人が血に染つて死したるあり、大石は死骸と懸軸の竈を、熱視て「大署長、此女の死骸は今殺したもんぢやありません、血液が乾いて黒くまつて居る所も見えます僕の考へ

る所ぢやア、先日彼の娘を惨殺した夜、此女も共に殺したので……此女が彼の娘の母でせう、容貌も酷似て居りますして、見ると彼の晩に曲者が母の死骸は此床の間の壁の間へ隠し、娘の死骸は僕が飛込んだので隠す暇もなく、彼の戸棚の中へ絨氈と共に押込んだものでせう。署、ウム、君の見る所と僕の思ふ所と符合して居る。大、もう此家は曲者が逃げて了つては、別に見込みはありません。署、今逃げた曲者の後を追つて、早く捕縛の手續きを願ひます。署、宜しう部長……君は直に署へ歸つて非常線の準備を頼む。部、ハイ」と足を宙に飛出す署長は残る巡查を引連れて、采女ヶ原の四方を詮議せしが、何分原中の事とて何れの方角へ行さしや判然せず途方に暮れたる處へ、最前の巡查は歸り来りて「巡、残念ながら見失ひました。署、何方へ行つた。巡、木挽町九丁目まで行つて見失ひました。署、何ういふ風体で年齢は……。巡、何分背後向きで能く解らなした。大、署長僕は燐寸が消けたので充分には見ませんでした。署、モーニングコートを着た、四十二三の男で髪が顔から耳の邊までありましたがと思ひました、署、何にせよ、今非常線を張つたら分らう」といふ中に早部長の手續きにて充

分に警戒が出来、先づ京橋區はいふに及ばず、日本橋區、深川區、芝區、麴町區と其接近したる箇所は、手配り漏れなくして調べたるに、翌日の午前十時に至るまでには、嫌疑者十二名を引致したるが取調べの結果格別怪しき者もなしとて、皆放免せられたり。

彼の采女ケ原ある露木げん(理)同(か)の二人は十二月五日の夜に惨殺され、加害者は勝手知つたる床の間の袋壁へ、げんの死躰を隠しちかの死躰は大石の立入りし際、隠すべき所をかりしより戸棚の中へ絨氈と共に押し入れたるからん、而して其夜加害者此家を去らず、豫審判事と京橋警察署長等が調べの時も、大膽にも袋壁の中に隠れて居りしからん、とまでは知れたるも、何故に斯の如く袋壁を造り、又戸棚の奥に開き戸を設けしが、此母子は善か悪か、死人に口無しとて少しも真相を知るに由なく、其加害者と目ざす曲者は、年齢四十二三、頬髭ありてモーニングコートを着せし者、とのみにて他に何の手懸りもなし、京橋警察署にては露木げんの死体を區役所へ引渡して、彼の家は家財家具と共に嚴重に調査し、怪しき箇所、異なる書類等は漏らす搜索したれど、之ぞとい

ふべき物もなし、此不思議ある事件の起りてよりは、警視廳初め各署の刑事は頻りに真相を探らんと焦りて、其探偵おさく(意)りあし、大石刑事は五郎兵衛町ある巡査合宿所の二階にて、一心不乱に思索し初めたり「待てよ、今度の事件は僕が発見した、言はゞ發當人である、采女ケ原の化物邸といふさへ、怪しみに變る戸棚、妙な袋壁、ハテナ四十五の女、十七の娘、モーニングコートの髪男、解らんぬ、困つたあア、愚圖愚圖して居て他署の管轄内で捕縛して丁はれちや大變だ、一日も早く僕が捕まへて老探偵の穴を明せてやらう……イヤ老探偵といやア惜しい事をしたあア……」

水村君は氣の毒であつた、彼の時君の敵は僕が屹度とると大言を吐いたが若し捕へられぬ時は、水村君にも申譯がある、イヤ署長も僕如き無經驗の者に、刑事を命じて呉れた恩義に報ひんけりやからん、ア、困つたあア……オ、宜い事があるぞ……、待てよ殺された女も殺した奴も立派な人物だから、紳士令嬢令夫人と考へるから可かん、物事は下等社會より知れ易い、之は却つて下等社會を探つたら、意外な邊から証跡が上るかも知れん……」

だが彼の采女ケ原には、上等にも下等にも家が外にない

んだから困るゝア……唯困るゝ言つてる許りぢや仕方がない……ア何
でも構はん、思ふ通を實行して見る……此委ぢや可かん、誰が見ても刑事らし
い、自身が下等社會の人物に化けて先づ采女町近傍の裏長屋、木挽町から新富
町、築地近邊をブラついて見る……斯うツト若物に困つたぢやア……エ、困
つたぢやあゝが口癖に附いて廻る……古着屋へ談判して見るツ」と磊落にして
疎放ある大石刑事は、八丁堀の古着屋より怪しげある衣服を購ひ來り、姿を變
じて此探偵に従事したり。
大石刑事は縞とも紺とも中形とも分らぬ洗ひ酒しの袷一枚に、之も形も模様も
定かからぬ印半纏を上に被りて、細の如き三尺帯を前に結び、古手拭の頬冠り
して薙刀草履を穿ち、誰か目にも一見其日稼の足としか思はれぬ見苦しき風
体にて、先づ采女原の附近を彼方此方と彷徨ひ、或時は裏店へ立入り又或時は
木賃宿に泊りて頻りに彼の化物邸の噂やあらんかと、耳を立てしが其噂は何地
にても皆話し合へるも、別に之ぞといふ確たる話はなく、唯己が思ふ儘の想像
を語るのみなる様子ありしが、早や十二月の十五日とありて世間は何となく

がしく、節季師走の忙しさに、市中も此化物邸の噂は忘るるとはあしに遠ざか
る模様あれど、大石刑事は熱心に今日も浅草の公園にまで立入り、當もあき處
まで探りしが、既に日も暮れんとして寒風一入吹荒むに、薄着したる肌寒さ
少しく空腹を覺わるとにて、身顛ひしつゝも公園の中店を出で、廣小路より
並木通に出でしが、馬車に乗り京橋に戻らんかと思ひしも、鐵道馬車は人日に
立てば、俗にいふ圓太郎馬車へありと乗らんかと思案しつゝ並木に來りし所、
兩側の商店は今しも洋燈又は瓦斯を點せんとする黄昏時とて、右往左往の馬車
人力車繁く往來せる中に、空車を覗きて行ける車夫の後より、之も空車を覗き
たる車夫が聲を懸けながら行くを、大石は見ることもなく聞くともしに其後に
隨ひたり「甲、オイ金公、吉原へ行くのか、金、ヤア平公か寒いぢやア……マアブラ
馬道へ行つたら、また宜い鳥が懸るめねもんでねわと思つてぢやア平、ぢ
やア一緒に行かう」といふに大石も獨り語して「イヤ俺も吉原へ行つて書店で
も素見して見よう」と其跡に尾けば、金平公、久し振りだ一杯飲らうか、平、申
歳云つちや可ければ、もう數へ日だ、一日一兩づゝ稼いだつて十五六兩切りで

お正月にあるんだ、年の内はもう飲まねね 金「客を事をいふもよ、俺か奢るよ
 平「ナニ奢る…… 氣の毒だあア 金「遠慮するもよ、俺か錢を持つてる時にや
 ア奢るし、汝がある時は汝が奢れア同じ事だ 平「夫はマアそんなもんだ、今日
 はまだ一文も取らねね 金「一杯呑んで景氣を附けた勢で旦那めわりやせうツと
 いへば又宜い鳥も懸らアあ 平「ウムくさうだく 金「時に何家が宜からう
 平「馬道ちやア玉川か宜いあア、酒の注ぎが宜くつて…… 金「ウム、俺もさう
 思つてる」と言ひつゝ二人は馬道七丁目の玉川といへる居酒屋の門に車を置き
 毛布と布團を小脇に引抱へて繩腰籠へ滑つて入るに、大石刑部も寒さと空腹に
 堪へられず、又斯ういふ家も経験にあらう」と共に此家へ立入つたり。

一六一

彼の車夫二人は、湯豆腐の鍋を中に挟みて、暫しは献酬應對に暇をかりしが大

石刑部も人目に着かぬ片隅に何やら、一皿の肴を取寄せ、空腹と寒さ波ぎに熱
 燭を、グツと一氣に呑みて心地悪げに舌打ちし 大「エ、濁り酒か、悪臭がある
 あ……マア宜いや飢しい時の不味い物をした之も経験の一つだ「虚心り濁語を
 言ひて口を押へ、二杯三杯と飲む中に清酒と異りて酔の廻りも坂と早く、日頃
 苦心の探偵に煩悶せる胸も鬱を散せしかの如くに思はれ、又も鉄子の代りを命
 する中に、二人の車夫は酔が充分廻りましものと思しく、下等社會の常として四
 邊構はぬ高話を始めたり 金「ヤイ平公、馬鹿にするかい 平「何をッて全体汝が
 癪に障らア 平「又始まつたあ、汝は酒さへ飲むとア……をいふから困るよ、
 何うせ錢を出して飲む酒だ、心持ち宜く飲んだら能からう 金「大きにお世話だ
 ……エーコウ馬鹿にするにも程があらア、警察からして氣に食はねねや 平「大
 きな聲をするあよ俺達は警察に憎まれたら、一日も稼業の出来ねわ弱い商賣だ
 訝しむ事を言つて巡査にでも聞かれたら何うするんだ 金「何を言やアがる、巡
 査でも警部でも何でも呼んで来い、俺が談判するから 平「廢せッて車によ 金、
 マア聞けッ、汝は新聞を見るか 平「ウム新聞は大家様のを借りて時々讀む 金、

そんなら知つて居たらう、去十二月五日の夜十二時三十分、采女ヶ原の殺人事件を……平「ウム知つてるとも、新聞に出て居た……未だ其曲者は捕まらねわさうだあア」金「サア其處だソユが我輩の癪をして大に厭らしむる所以の原因である」平「妙な漢語を遣ふな、過日も判然と惘然と間違へたぢやねわか」金「夫は輕蔑と警察ぐらゐは間違へる事もある」平「酔ふと仕様がねわあア、警察々々言ふあよ」金「其警察があせ此賊を捕縛する事が出来たのだ、既に十日以上も徒らに時日も荏苒経過して、まだ押へられんといふのは實に慷慨悲憤切齒扼腕の至りだ、此東京は殺殺の下でありながら、警察署はあつてもあきか如した、馬鹿にするな、俺ア之から警視總監と各警察署長に辭職勧告の運動をする」平「何も汝が辭職勧告をしつて、椽の下の力持ちだ」金「何でも大にやつて見る」と頻りに威張るを、最前より聞き居る大石刑事は、車夫風情さへ斯くばかり、警官を嘲けり居るとは歎はしいと、茫然としてありしが、今年長ある車夫は盃を下に置いて四邊を窺ひ「オイ金公、汝夫程心配するから俺アいふめわと思つたんだが、内幕に話をしてやらうか」金「ウーン何だ」平「乾度人にいふあよ」と念

を押しつゝ又盃を取上げグツと呑干したり
平公と呼ばれる車夫は聲を潜め「采女ヶ原の女殺しは、汝マア何んか奴だと思ふ」と意外の間に金公と呼ばれる車夫は少しく笑つて「何を言つてやがるんだ其曲者の面が分れア俺ア探偵にあらア」平「だがよ、マア汝何んか奴だと思ふよ」金「因つたあア……マア大方……大さか野郎が長わ刀でズバツと殺したんだらう」平「サア誰でもさう思つて居るのが大變な間違へだ」金「ヘー」平「年齢十六七の別嬪の娘が殺したんだ」といふに大石刑事は此意外の語に、耳引立て、熱心に聞き居たり、金は吹出して「嘘を吐くあよ、十六七の娘だつて……馬鹿な何處でそんな事を聞いて来た」平「ヤイ金公、今俺が話をするがあ……聞いてから嘆息するな」金「ウム」平「彼の采女ヶ原の女殺しは十二月五日の晩十二時半頃だつたらう」と顔を覗き込めば金公といへる車夫は目を据ゑて「ウム」
平「新聞にもさう出て居たらう」金「ウム」平「所で彼の晩に俺ア有樂町から請負師見てわあ人を乗せて華族銀行の横の長谷川で待合迄来たんだ」金「ウム」平「スルト八錢の極めに十錢呉れても夫から俺ア空車を校つてアラ」

女橋まで来たのが十一時過ぎだ、精養軒から異人でも歸るのがあれア宜いがと
 桶を突いてると眠くあつたから、蹴込みで腰をかけて提灯を股着へ引込んで毛
 布を冠つてグーと寝た。金寒いのには宜く寝られたあア。平背に飲んだ濁酒の勢
 でグッスリやると十二時半頃だ……女の聲で車屋さん車屋さんと来た。金ウム
 平目を覺して見ると美しい女だ、十六七で色の白い好い若顔を着て居るん
 だがあア、オイ不思議な事には足袋蹴足だッ。金ウムく。平マア一杯注げ
 金マア後を話せよ。平息継ぎだあア。金蒼蠅わあア、ソラキタ」と注ぐ酒を
 グツと飲み干し。平凄いやうな其別嬪がよ、髪の後れ毛の下るのを五六本チ
 イと斯う口へ啣へて斯う……金訝し身振りをするあよ。平片手に雪駄を持
 つて、車夫さん大急ぎで小川町まで行つてお呉れと来たんだ、夜更に小川町と
 来て加之も願ひ込みだ、五十銭にやアあると思つて、女を乗せて夢中で駆け出
 したが、俺ア考へた、待てよ夜中に足袋蹴足で車へ飛乗るッてのは、何か話
 があるんだ見れば勅任官あどの娘か夫とも紳士紳商の娘か、何しろ立派な御合
 衆だ、車を下りてから一圓だつても厭とはいふのねと思つたが、小川町の角で

宜いといふから降したが、女は銀口の藝口から錢を出して俺に呉れた……汝マ
 ア俺の貰つたのを幾何だと思ふ。金さうよあア、一兩も貰つたのかい。平所が
 大變だ」と又手酌にて二三杯を煽りて、上唇を甜めつゝ續けて語り出したり。
 大石刑事は意外ある邊より、探偵の端緒を得て喜ぶこと一方からず、尙も耳を
 澄して聞き居るに、平公は最と得意氣に、何うだい、其銀貨は混交せて三四五
 十銭あつた。金チツヨ、旨くやつたあア、一杯奢れ。平もう遣つちやつて一文
 もねね。金ウムさうだらう……夫から。平俺ア大喜びで自家へ歸つたが、財布
 の銀貨の音で嫌アを喫驚りさせて、鞋草を脱いで足を洗はうと思つたが、布團
 と毛布をマア家中へ抛り込んだんだ、スルトバツタリ蹴込みへ落ちたは俺の
 貰入に構すだ、此口も家へ抛り込んだが、未だ跡に落ちてる物があるから、蹴
 込みを手探りに探るとグシャリとした。金へエー、何だクシャリつてのは、
 平「真赤な血だ。金ギエー。平ハハア此奴ア女に汚されたかと思つて、井戸か
 ら水を汲んでザブくやつて洗つたが、まだ残つてる物がある、熟視すると相の
 手巾だ、横文字が附いて居たが俺にやア自慢ぢやねわが顔ねわ。金ウームく

平「勿体ねわから洗つて其手巾は持つてたが、小遣ねに困つたから賣ちやつた
金さうか 平「だから宜く考へて見ろ、十二月五日の晩の十二時半、采女ヶ原
の人殺しよ、宜いか、時も違へず十二時半、雪駄を持つた足袋跣足の女が飛乗
つて、小川町まで、三圓五十銭も呉れるたア言はずと知れた口留めだ、夫に血
に染つた手巾は櫛かに二人の女を殺したときのに違へねわ、今時の娘は油断が
出来ねわ、顔が綺麗だ、着物が立派だつて彼様處女が人殺しをするんだから、
幾何探偵が騒いだつて捕まる筈はねわんだ 金「ナール程、驚いたあア 平「斯ん
ど事は人に言ふあよ、又引合ひにでも引張り出されると可いねわから 金「ウー
ム言はねさ言はねわ、何と怖い女ぢやねわか」と二人の車夫は顔も杯を取つて
其話に餘念なし、大石刑事りは躍上らん許りに打喜び、早速彼の車夫を押へて
委細を聞き参考人にせんかと思ひしが、斯る混雑せる飲食店にては、他の外聞
もあり、又署へ引くには稍早計あり、萬一酒の上の座興と言へば夫まであれば
鬼に角此車夫のみを何とかして取調べて見んものと、懸て其身は此家の勘定を
濟せて立出でたり、二人の車夫は「ア、宜い心持ちにもつた、もう行かうぜ、

オイ婢さん幾何だい 婢「ハイ十九錢戴きます 金「オイ来た、此處へ置くせ 婢
有難うございます」を後に開流して、提灯片手に毛布と布圍を車へ載せ二人の
足はX形に彼方へヒヨロリ此方へヒヨロリとして吉原の方を指して行くに、大
石刑事は見れ隠れに尾行して、訊問すべき好機を考へ居たり。

一七

金といへる車夫は平公に向ひ「汝はマア少し休んで行けよ、俺ア愚問々々しち
やア居られねわから先へ吉原へ行くよ 平「先へ行つて呉れ、俺ア此處で客待を
するよ」と酔ひたる儘人力車駐車場とせし傍示杭の邊に楯棒を突き立て、ドツカ
り蹴込に腰を卸したれば、金公といへるは吉原指して赴きたり、大石刑事は折
こそ宜けれと打喜び、往來の舉動を窺ひて 大「車夫々々 平「へーお安く参りま
せうか」と客と思ひて見れば、破れたる衣服に細の如き帯を結び、頬冠りし

たる男あれば平公は面影らし 平「河だい、横柄に車夫々々だかんで、汝は何だ、大「僕は刑事調査である 平ギエー………何も私は悪い事をした覚えはありませぬ 大「イヤ何も悪事をしたせん、調へちやない、少し聞きたい事があるから一寸向ふの石畳場まで来い」平公は呆れ顔にてありしが、大石刑事の風体を見て儘に探偵やらんと推せしものか、恐るゝ提灯と毛布布圍杯を携へて大石の後に随ひ来るに、大石は人知れぬ處に誘ひ 大「心配するを、少し聞きたい事があるつて迷惑であらうが呼んだのだ………先刻玉川といふ飲食店で頻りに友人との談話中に、去五日の夜に手巾を拾つたといつたを 平「アッ、彼の一件でげすか大「其手巾は何うした 平「紙屑屋に………大「何處の………平「何處だか、紙屑屋の家をんか知りません 大「困つたかア………併し其方は拾ひ得た物を届出すして擅に賣拂へば其罪は免れんぞ 平「サア大變だ、幾月位食ひませう 大「そんな事は判らん 大「ア、彼れは私が賣つたんぢやありません、自家の繰アがいふにやア手巾一枚ばかりで、警察へ届けたりすると半日暇が潰れて、剩に代巻に錢を取られるから、買つて了へ〜つて繰アが勧めたんです、自家の繰アを縛つて

お呉んをさい、私は存じません 大「薄情な事をいふを、其方の妻が勧めようとも、賣つた本人は汝に違ひあからう 平「オヤノ、何うかア成るだけ安く負けてお呉んをせね 大「ソコで一つ汝に頼みがある、其紙屑屋を探して手巾を買戻して貰ひたし、又其娘の人相をも委しく聞きたいが………」と手帳と鉛筆を取出したれば平公は益々驚きて顔へ出したり 大「其方姓名は平「ヤ、山下平助 大「年齢は平「厄です 大「厄とは 平「四十二ですよ 大「住所は 平「下谷通徒士町二丁目六番地 大「身分は 平「平民です 大「其娘の人相を言へ 平「へー好い女でしたね、十六七で色の白い瓜實顔で、鼻筋の通つた口元の締つた日尻の上つた黒目勝の地藏眉毛に富士額、文金の高島田に結つたイーツ女でしたよ 大「顔は何か特徴はあかつたか」と要點の尋問に取懸りたり。

車夫の平助は大石刑事の穩和ある容子に、少しく安心したる面色にて 平「へー別に其女の顔は目立つた所もありませんよ 大「して其娘の居住は何の邊か承知して居るか 平「小川町の角で下車した切り、何方へ行つたか存じません 大「其後何處かで逢つた事はあいか 平「私も一遍に三圓も貰つた人ですから、探して

居るんですが夫ッ切り逢ひやせんよ 大「困つたあア……そんなら衣類は 平「美
 い若物でした、絹物だつて餘の春中見てわにピカ〜と光るんぢやありません
 せ、斯う細けわ分銅見てわ形物に紋の羽織に紋が附いて…… 大「紋は何
 だ 平「芋虫が相撲取つてるんでさ 大「何だその紋は 平「エ、何とか言つたつじ
 ぢア…… 大「蝶ぢやあし 大「片バミか 平「そんなぢやありません…… 斯う丸い
 土俵の中でホラ…… 芋虫が互ひ違ひに取組んで 大「ハ、ア丸に激の羽の打違ひ
 か 平「さうさうソレ〜 大「宜し、所で汝に一つ頼みがある 平「エー分りやした
 貴君がこの一件は内々にしてやるからつて…… 大「何だ 平「賄賂でせう、近頃
 流行りますからねわ、十銭も上げますから懲役にあらぬやう、お頼ん申します
 大「馬鹿な事をいふぢや、怪しからん奴だ……さうぢやあ、汝は明日から稼業
 を休んど其紙屑屋を詮議して呉れ、其手巾を買戻して僕の手へ渡して呉れたら
 重禁錮にあらぬやうしてやるんだ 平「其奴ア豪勢有難わが、駄目ですよ一日
 營業を休んでも困るんですからね 大「宜し〜 其方は一日何程ぐらゐの稼ぎを
 する 平「へー水商賣で分りません 大「何うだ一日に五十銭づゝやつたら、休ん

で居られるか 平「へー五十銭にちれア結構です 大「そんなら一日五十銭の日當
 をやるから、明日からチャンと自家に居つて、其紙屑屋が来たら買戻して呉れ
 其代も出してやる 平「有難うが、自家に遊んで居て五十銭の日當にあつて、
 懲役に行かずに済む、斯んぢやあ旨へ事はありやせん…… 紙屑屋の面も大体覺わて
 居やすから、屹度捕まへやす 大「宜し、そんなら今僕は金の持合せもいから
 兎に角明日其方の家へ持つて行くぞ 平「へー有難う存じます 大石刑事は尙念の
 爲に平助の車夫營業鑑札と車体番號を檢めて、手帳に書留めて分れたり、大石
 は茲に又一つ困難を感せしは、今此有様を署長へ上申するが正當の手續きを
 れど、方一他へ洩るゝか又は公然平助を召喚する事とあらば探偵も困難とあり
 又自身も今宵の苦心が水泡に歸せん、夫よりは自分に於て密かに金策して彼の
 車夫を利用し、手巾を手に入れてより、署長へ上申せんと決心したるが、車夫
 へ渡すべき金の爲に又心を苦しめたり。
 車夫の平助は聽て女房の購ひ來りし酒肴に、舌鼓を打つて喫し居たりしが、遠
 く酔が廻るにつけ其身が刑事巡查にでもありしやうに、障子の破れより戸外を

眺め、唯一心に紙屑買の来るをば待ち居りしが、クズイイ〜と呼びつゝ来る
 を見るより平助は 平「屑屋々々、紙屑屋ア 紙へー今日は結構なお天気で……
 平「面を上げろッ 紙、喧ましい事をお被いすね、全然警察へでも呼ばれたや
 うですね」と驚く顔を熱々眺めて 平「アッ遠ふ〜 紙、何がです 平、面が遠ふ
 用はねわよ 紙、折角お呼びますつたんですから屑でも何でも買つてお呉んさ
 いますし、平「紙屑は溜つて居ねわし、外には何にも買ものはないわ 紙、そんなら
 何で呼んだんです 平「愚圖々々吐すか、探偵さんに話して縛つて了ふぞッ」と
 喚くに紙屑屋も呆れて「何だ彼奴は氣狂ひだ」と小聲に呟きつゝ立去りしが、
 又もクズイイと聲のすれば 平「屑屋々々紙屑屋 紙へー何かお扱ひもんですか
 平「面を上げろ……ヤッ又違つた、汝にやア用はねわ 紙、馬鹿にしちや可げま
 せん 平「何を吐しやアがる、此方は警察の御用だぞッ」と獨り威張つて其日は
 三十人近き紙屑買を調べしが、手巾を買渡したる男に似たる者もなし、平助は
 少し落膽したるも其日の黄昏にありて「屑は溜りませんか、紙屑屋でござい」といふ聲の聞えわし聲あれば 平「オイ屑屋さんチヨイと這入つて呉んち……ッ

、汝ちやつたか過日手巾を買つたかア 紙へー〜 毎度有難う存じます 平、占
 めたく、時に彼の手巾は何うした 紙へーもう仲間へ買りました 平「サア大變
 だ、だが買つた先は分つてるかい、紙へー夫は知れて居ます 平、何日買つたん
 だ 紙へー昨日です 平「一昨日あら未だあるかも知れねわ、汝一骨折つて買戻し
 て呉んねわか 紙へー一つ聞いて見ませう 平「幾何で買つたつけあア 紙へー
 二十銭でした……が仲間へ買りますと買戻すには少々お高くあります 平「知つ
 てるよ、江戸ッ子だ、ビイ〜しねわや、幾何から宜からう 紙「左様ですわ、
 マア倍價四十銭 平「四十銭宜しく〜 紙「サア夫が又同業者がチヨイと口銭を見
 て……五十六十銭ぐらゐ 平「エ、面倒臭いや、七十銭が八十銭でも宜い、持つ
 て来い 紙「兎も角詮議を致して見ます 平「待て〜、汝の名は……オイ〜 嫌ア
 手帳を持つて来い 妻、手帳あんか自家にやアあいなよ 平「手帳でかくつちや旨く
 行かねわや、孩兒のがあらア持て来い……其方姓名住所を言へ、鑑札を見せろ
 ツ」と恰も其身が刑事氣取りにて書留めたるが、紙屑屋は酒の爲かとも思ひて
 心中に可笑しけれど淺草區松葉町九十一番地堀端吉兵衛と述べて翌日を約して

立歸りぬ

一八一

吉兵衛と言へる紙屑屋は、約束の如く翌日の午後三時頃に来りしかば、車夫の平助は大に喜び、平「何うした手巾は、吉「何うも大骨折りで漸々の事手に入りました。平「イヤ御苦勞々々々、持て来かい。吉「へー少し直が折合ますまい。平「幾何だい。吉「私は此方様の事ですから、何も儲けなくつても宜いんですが、何分同業者が先から先へと賣りやアがつて、トウ／＼一圓とありました。平「一圓、高いかア……エ、仕方がね一圓出すから持て来い。吉「へー一圓、失禮です。がありますか。平「馬鹿にするかい、俵屋だからつて輕蔑するかい、ソレ一圓だッ……汝は俺が盗み物が拾ひ物でも賣つたと思つて、高い錢を取る積りなんだらうが、此方にやアチャーンと探偵さんが附いて居らア、急役をんかに行く

氣遣ひはねねんだ、俺は探偵さんから日當を貰つてゐるんだ、恐圖々々吐すと捕縛するぞ」といふ權幕に吉兵衛は慄ね上つて。吉「へー左様ですか、さういふ事から二十五錢にお負け申しませう。平「何だ二十五錢、一圓といつたのがタツタ二十五錢か。吉「へー實は夫が元價です。平「ウーム、ぢやア黙つて居れア七十五錢も儲ける積りだつたのか。吉「へー、私共の營業は警察に憎まれちやア、もう一日も出来ませんので……元價限り大負です。平「呆れたらア。吉「では利息が七十五錢。平「オット宜し／＼」といふより早く手巾を手渡しして、紙屑屋は立去りたる途端、入違ひに大石刑事は「平助居るか。平「ヤア旦那でげすかい、思ひの外宜い都合で……。大「手巾は何うだ。平「此通りです」と手巾を渡すに、大石は打返して見つゝ。大「之に相違ないか。平「へエ、之でげすとも、儲に此手巾に送へねねんですよ。大「ウーム御苦勞であつた。平「で旦那、三圓お預り申したのを一圓私の日常に戴きやして二十五錢が手巾の代で残り一圓七十五錢お返し申しやす。大「ナニ夫には及ばん、意外に早く手に入つたも汝の骨折りである、残りは汝にやる。平「へー、夫ぢやア只ツた二日勤めて二圓七十五錢にあつたんで

ナール程有難い事です、旦那又斯んも事件があつたら、チヨイ〜お頼み申しやす 大馬鹿をいへ、斯事事がチヨイチヨイあつて溜るか……だが他日犯人を捕縛した際には、其方を証人として裁判所へ召喚するよか、又は警署へ關係人として喚問する事もあらうから、左様心付る 平へー何うか懲役にありませんやうに願ひます 大「もう以後は決して拾ひ得た物を賣つたりするも、直に署へ届けろ 平へーもう今度で懲々しました」大石は車夫を戒めて、巡査台宿所へ立歸り彼の手巾を能く能く見るに、地は日本織とは思へぬ綾縹らしく緑は桃色にして一方の隅に淺黄糸を以て「工」の字を花文字にして唐草を搦ましたる刺繍あり。

大石刑事は斯の如き最上の手巾は、却々普通の娘の持つべき品ならず、是程上等の手巾を所持する娘が采女ヶ原の化物邸にて一人からす二人までも婦人を殺すとは、實際受取り難き話あり併し此手巾の持主を探し出すより外に詮術なしと、千々の思ひに煩悶して、一夜は睡らす思案せしが、不圖思ひ當りしは斯る上等の手巾を持つ女は、警へ悪人にもせよ交際する者は皆紳士紳商、或ひは高

等官以上の人あるべし、下等社會へは近づくも容易けれど、紳士等には近寄り難し、其紳士の多く出入するは恩義を受けつゝある、権町土手三番町の高梨子爵夫人の邸より外にあれば、夫人へ頼みて紳士令嬢夫人等の舉動を探るに如かずと獨り思案して翌朝早く土手三番町へ來り夫人に對面して 大「扱與様、先日はお庇様で金を拜借しまして、幸ひ或る一つの證據物を手に入れました、所が其品は御覽に入れられませんが、貴女のお邸へ出入りするお人の御様子を見たいのです、何うか此方へ紳士令嬢夫人などがお出での時、逢せて下さいまし」と只管頼み入るに、夫人に片頬に笑を含みて 夫「大石さん、貴君は采女ヶ原の殺人犯の探偵をなさるでせう 大「ハイ 夫「妾方へ入らつしやるお方に人殺しおんぞに關係するやうなお人は一人もお出ではありませぬ 大「イヤ御尤もです、何もお邸に怪しい嫌疑者が出入するからといふ譯ぢやないんです……或るひとつの證據物に就いて……一寸調べたい事があるので何うか國家の爲と思召して…… 夫「然れア貴君が必死にあつて、今度の事に御熱心なんですから、妾も出來るだけのお力は添へたいと思つて居るんです、然んから此二十五日に

邸で少し心祝ひの事があつて宴會を催ほします。其時はお出であすつて皆さんの御容子を御覧あさいまし。大貴顯紳士がお出にありませうか。夫、ハア内閣の大臣方は申すに及ばず、陸海軍の軍人、紳商のお方も外國人もお出でにありませう。大女は來ますか。夫、悉皆、夫人令嬢御同伴の案内状を出しました。大、ハア夫は申分あいです。夫、貴君へも郵便で案内状を差上げますから……會場で皆さんへ失禮を事のさいやうあすて下さいましよ。大、ハイ。夫、食事も手はお附あさる。大、ハイ。夫、温順しくして居らつしやいよ。大、ハイ、呼んでさへ下されば私は無言の行でも、斷食の行でも何んでもします。夫、オホ、マア御熱心なのは結構ですが、又熱心の餘り失敗のさいやうに……大、御忠告は有難う存じます、大丈夫です。然んから二十五日の晩。夫、彼の禮服用ですよ。大、禮服……困つた。宜しい損料でも着て來ます」と落着く。大石刑事は暇乞も勿卒に立歸り廿五日の來るを遅しと待つ中に廿五日の早朝高梨家よりの招待状は郵送せられたり。

大石刑事は芝の日影町へ來りて、洋服損料貸より燕尾服一着と附屬品一具を借

受け、合宿所に歸りて着したるが、己が裸に自鏡を立て、立鏡の裏に紳士とありしかば、我ながら此姿あれば刑事と認めらるゝ事はあかるべしと驚きつゝ其日の黄昏合宿所を立出で、土手三番町に來りしが、高梨家の門前を見れば、賓の馬車、腕車二輪車等は門内に剩りて門外にまで整列しあれば、斯る夥しき來賓あれば必ず端緒を引出すべきものもあるべしと、早脚は躍りて動作場よるばかりあるを押鎖め一待てよ、俺も紳士として宴席に列るに、ラク／＼歩きでは價值がない、自轉車の時間貸へ取附けようか、鎌倉河岸の貸借馬車にしようか……マア手輕きのは新らしさうを俥に限る」と獨り語つゝ傍を見るに、幸ひ車体膝掛け服裝とも見苦ししからぬがありしかば、大車夫、向ふの高梨の邸まで行かんか。車、ハエー大層近い處ですよ。大、何程近くつても錢をへ拂やア宜からう。車、然れア然うです、お召しあすつて……大、幾何で行く。車、餘り近い處で……困りました。大、何うだ。五錢では、車、エエ結構です。大、其替り向ふの立關まで勢ひ能く取附けて、僕が降りたら御前様お邸へ御用はありませんかと。言へ、車、アッ然んから自用車の狂言ですよ。大、マア然うだ。車、演劇をやるんを

ら五錢ぢや行けません 大「エ、仕方がない、十錢やれ 車、参りませう 大向ふへ行つて増して呉れおんて言つちや打壞しにゐるぞ 車、へーく 大丈夫です 大「早く行け」車夫は一町餘の道程にて十錢を得ることよて勢ひ宜く空閑へ棍棒を突くに、大石は降立ちながら接待委員へ聞ねよがしに「家來、最う宜いから歸れッ 車、へー何うか又お頼み申します、有難う存じます」といはれて大石は胸を冷して、會場入口の卓子に向へる人に一禮して、入らんとするに接待係りは「一寸お待ち下さい、失禮ですが招待状を拜見致したうございます」といふに直に之を示したるに、接待係は大石といふ宛名は見たれど見研ぬ顔に顔に落ちぬかして「大石さん、失敬ですが名刺を頂戴致したう存じます」大石は名刺を出しおぼえ忽ち刑事の肩書にて事の破るゝ基とあらん、如何にせんと躊躇ひしが 大「僕は名刺を忘れて來ました 接左様から一寸お肩書だけ承りたうございます」と問ひしも道理今宵來れる人々は皆名譽ある肩書を有せし人のみあり、大石は一寸返答に困りしが、頓智に長けたる人として忽ちに返答して

大「イヤ、僕は佛國の學校を卒業して歸朝しましたもんで」未だ謝答には御交

際がよいから、御存じないのは無理はありません」と事もおげに言退けしかば接待係はさては遠からず學士又は博士ともあるべき人あらんと、急に會釋するも可笑し。

一九

大石刑事は會場に入りてより、音樂舞踏は耳にも目にも入らず、唯熱心に令嬢令夫人の携ふる手巾に着目し、若し類似の品ありとも持つ人あらば、密に探らんものと思ひ又二つには、豫て車夫の平助が見覚えありといふ、娘の容貌に似たる女はあきかど、手帖に記し置きたる人相書に照合せて、夥多の夫人、令嬢の顔を人知れず一々検めたるも、皆一人として美人あらぬはあけれど、手帖に認めたる容貌に、寸分違はぬといふはあき、皆十人十色の相格にて異なる點あり、且手巾も桃色の縁取りしたるは、生憎に持ちたる人はあきて今宵の探偵も

全然水泡に歸し、今は望みの綱も切れ果てたり、落膽したる大石は今まで張詰めたる氣も弛み、椅子に腰を下して四邊をキョロ／＼見廻すに、不圖其眼に映じて首を傾けたるは、會場の茶資席中種々ある餘興等ある處に、椅子に倚りて傲然と構へたる紳士は何處やらにて思知りたる人あらんか何となく見覚えある容貌に、大石は暫く下俯向き思案して居たりしが、遂に大石の顔色は赤くもりまた青くもりてブル／＼と身を顛はせ、思はずも「ウム彼奴に相違ない」と聲を發して四邊に居らるゝ紳士令嬢等に心附き、口を押へて心のうち「過口采女ヶ原の化物耶、忘れもせぬ水村老探偵が短銃の爲に一命を捨てられし際床にあつた軸物の後ある袋壁の中から、露木げんの死骸と共に飛出したる曲者と、類より願に生へたる髑の形といひ、服の着振りまで酷似たる風体の、寸分違はず其儘だが、事に依つたら紳士に打交つて又何か悪事をしようぞ、企み居るんぢやないか何にせよ近寄つて……イヤ／＼虚心口を利用して、先方が真正なる紳士であつた時には大失敗である、何か彼の身分を糺す法はないか……高梨夫人に聞いて見れば知れるが、今夜のお忙しい中さういふ譯にも行かん……オオ宜

い事がある、今夜此處へ来て居る者は、皆招待状がある彼奴の招待状の有無を調べれば譯る、事に因るゝ案内も受けずして、誤魔化して来て居るのかも知れん……又招待状があるとすれば、其姓名も分る……宜しく之が一番得策だ、やつて見るべし／＼」と獨り喜びたる大石刑事は、豫て夫人より來賓へ詞を交してはあらんと戒しめられしを打忘れ、其身に罹る災難ありとも神からぬ身の知るに由なく、聽て彼紳士の傍に來り「失敬」といふに彼の紳士も軽く會釈して「イヤ失敬」と答ふる舉動、過日見覚えたる曲者に、益々遠ふ所かしと思ひ極め大……貴君、招待状を御携帶ですか」と大石は啞生口調にて無難作に問ひしが、紳士は少しく激昂の体にて眉をヒリ、と動かし「何です君は、招待状の有無を尋ねる貴君は何です、失敬さッ」と葉巻灰の灰を腹立たしげに打拂ひたり。

大石刑事は今とありては、全く自身の思ひ違ひにて、其身の誤りと知るからに平生の活潑なる氣に似氣なく、一言一句の答へもしかねて、唯詫入るのみ大、何うも私が思ひ違であつたんですから、私が悪い……私が悪かつたと謝して居

るではありませんか、そんな大突進ひに這ふの、三通廻れのつて……馬鹿々々しい、然んか無理を言はずにマア堪辨して下さい」と首を下げるに、彼の矢山定輝といへる紳士は、益々怒り烈しく目に角立て、ナニ馬鹿々々しい、何が馬鹿々々しいんだ汝が馬鹿々々しい耻辱を、満座の中で僕に與へたんぢやないか、だから僕も汝に馬鹿々々しい耻辱を與へるんだ 大、イヤ夫は尤もです、だから私も男子が首を下げて謝して居ます、全体僕ア人に首を下げるかア大嫌ひあんですが、思ひ切つて誤まつてるんです、マア堪忍して下さい 矢、可かん 大、マア然う言はずに 矢、可かん 大、夫ぢやア何うしても免さんと被仰るんですか 矢、然うだ 大、ぢやア何うしても 矢、諍い 大、仕方がない、是程に謝しても肯かんと言はれちやア、最う別に手段もない僕ア最う謝まらん、詫びんから勝手にするが宜い 矢、ウーム、宜くいつた其一言を待つて居たんだ、オイ大石とかいふ刑事、宜く聞け……汝も自分に一理あると思ふから、僕のいふ如くに詫びあいんだらう 大、素より…… 矢、所で僕も充分理があると思ふから、汝に詫させようとするんだ 大、然うか 矢、然らば双方に理はあるもんだ、ソコで宜い

事がある汝が詫びないからといつて、僕も此儘にはされんから双方の理を議論した所が水掛論であるから、面倒臭い議論をんぞは度めて、腕力で勝敗を決しよう、決闘をしようぢやないか決闘といふものは、誠に男らしい仕事だが我國では不幸にして、法律の爲に禁止されて出来ん、併し僕は永く佛國に居て折々は決闘を行つた事もある……大石汝は先刻玄關を登る時、僕が聞いて居れば佛國から戻つたと言つたかア 大……ウーム……言つた 矢、丁度宜い双方佛國に居たとすれば、決闘の何物たるは汝も知つて居よう、昔は武士又は侠客等が果し合ひと稱へてやつたもんだ、人心の腐敗して士氣が柔弱に流れた今日、一番古武士流にやらうぢやないか」と最と磊落に言ひ放つた、大石刑事は夫も否とは言ひかね、遂に其身警官の職にあるを忘れ 大、ウーム夫程にいふから決闘もしよう 矢、ウーム流石刑事だ、宜く言つたサア決闘だ」と立上るに大石も今は免るゝに途なく双方顔色を變じて何處へか立去らんとする所へ高梨夫人は馳せ來りて「マアお待ち下さい、大石さん貴君はマア大變な事をして呉れましたね」と怒まれて大石は又面目あげに「奥様、實に勢ひ已むを得ないで斯んを失策を

やりました勘辨して下さい 夫、困りましたねわ……矢山さん此人はね、少し妾が心易くて會場へ入れたのですが、悪氣がある人でもありません、何うか堪忍してやつて下さい」と只管頼むも、矢山は背き入れず「イヤ夫人、貴君は怪しからん、お人だ斯んを男を引張り込んで、僕の身を調へさせたりもんか、する所を見るに何か僕に恨でもあるんでせう」と又夫人を詰問せり。
高梨子爵夫人は矢山定輝を宥めて 夫、イヤ、何れも妾が貴君を調へさせるもんといふ譯ぢやないんですよ、此大石さんは職務に熱心ですから、妾が一寸今夜呼んだだけで、此人も悪氣があつて貴君に失禮を申したんぢやありません、妾が代つてお詫を申しますから、御勘辨をすつて下さいまし 矢、假令貴女が何と被仰つても僕ア承知しません 夫、マア困りますねわ」と夫人は女氣に此處分に困じ果て早涙ぐみて、唯ウロウロするのみありしが、此處へ又進み出でしは麴町區富士見町に事務所を開ける、碓氷安夫といへる辯士あり 安、オイヤ大石君、飛んだ事をやつたを」と言はるゝに大石も豫て一二度は直談判ある、碓氷をれば又赤面して「イヤ何うも一寸した思ひ違ひから、斯んを失策をやつて申

譯がかい 安、ア、若し矢山さん、僕は富士見町に居る代言です貴君には初めてお目に懸りますが、扱今晚は飛んだ事になりました、僕も突然飛出して仲裁するといつちやア、甚だ失禮だが見れば大石も、貴君に對して故意あつてしたのぢやなし、又意趣意根のある筈もありません、何うか僕のものでも中間に入つて平和に歸するやう願ふんですから、お腹も立ちませうが何うか僕に免じて、今晚の所は任して下さい悪いやうにはしませんから」と流石に斯る扱ひには物馴れたる辯士の事とて、手輕に仲裁せんとするに、矢山は却々聞入るべき舉動なく「イヤ御厚意は謝すが、断然お断り申す既に決闘と定めたのである大石に於ても承諾して居るんだ、今更何人が仲裁しても、駄目を事だ、退き給へ」とキツパリ言ひ切つたれば、碓氷も今は是非をいふ素振にて「ヨシ、行り給へ僕も覺わがある喧嘩する場合には誰が何といつても撥めるもんぢやない、行れ」大に行るべした……だが、今矢山君の詞に佛國に居つて決闘もやられた事があるといはれたが、然んから御承知であらう決闘には介添人、又は立會人がなければ可かん、僕が兩君の決闘に立會とあらう 矢、イヤ立會をぞは

ちくつても宜い。安夫は可かん苟くも佛國文明の風に吹かれて来た紳士が立會人もあゝ野蠻な喧嘩は出来まい、僕が望んで立會人とあるから、大にやり給へ。大石君、僕の立會人を承諾するか。大宜しく願ふ。安、矢山君も承知して呉れ給へ。といはるゝに矢山定輝は左も迷惑に「宜し、折角の厚意だ、君に頼む。安、イヤ夫は有難い、僕のやうな者でも兩君が立會人として呉れるのは確水安夫の名譽だ……サア此邸で愚問々々しては怨みもあゝ夫人に迷惑にある、サア戸外へ出給へ決闘の場處は、靖國神社の横手で巡査の巡回せぬ處が宜い、サア來給へ」と先に立つて二人を導き高野子爵邸を立出でたり。

十一

矢山定輝と大石刑事を伴ひたる確水辯護士は、何とかして決闘を中止させんものと思ひ、確ねね兩君、佛國の決闘といへば一方が六連發の短銃から又一方も

六發連、一方が一尺の劍から又一方も一尺の劍でなければ可かんのだ、其得物から定めあぐちやアあらんが、今夜は突然の事だから双方其準備があらう、今夜はマア中止して更に再び時日と場所、得物までも確定してからとしたら何うだ」といふに矢山は口を尖らして「矢、夫は可かん、今とあつて然んか姑息も事を立會人がいふから、僕は立會を拒絶する……又得物があければ、石でも木でも拳でも何でも可い、是非今夜の中に勝敗を決する積りだ……オイ大石、汝は何か得物を持つて居るか」と問はれしに大石は采女ケ原の化物血に懲りたか其身の護身用として匕首をチョッキの内懐中に隠したりしに心附き、大、僕は短刀を持つて居る。矢、ナニ短刀……寸法は、大、八寸三分だ。矢、夫は不思議だ、偶然符合したんだ僕も八寸三分を持つて来た」と之もチョッキの下より取出したれば、確水辯護士は其寸法を計りしが、寸分違はぬ大きさはれば今は如何とも詮方盡き、確、仕方がない、實行し給へ……確、サア双方へ立ち給へ……僕が斯う……洋杖を一つ、二つ、三つと列べて……之が距離だ、僕が中間に立つて一、二、三の聲を懸ける、其處で兩名がやるとしたら宜からう。矢、宜しッ。大、

宜しい 矢、サア来い 確、一寸兩君待て 矢、又何か故障か 確、イヤ故障ぢやないが、爰に僕が改めて一言する事がある、夫は外でもあいが此勝敗は手続一つを以て勝敗と決して呉れ給へ 矢、夫は可かん、命のあらう限り争つて見る 確、夫は暴だ、野蠻だ、紳士の決闘としては外聞も宜くあゝ、僕は斯う思ふ、何も命の取り遣りする程の遺恨でもないから、一突、又は一斬りで何れでも一つの傷が附いたら、附けた者が勝で附けられた者が負として呉れ給へ、オイ大石君、不承知はあいか 大、宜し 確、サア一方大石も承知したんだ、矢、山君も承知して呉れ給へ」といふに、矢、山定輝も澁々承諾したる舉動にて 矢、宜しい 確、ア、有難い、僕のやうな者のいふ事でも兩君が快く諾して呉れば、僕も留んで立會人にあつた甲斐もあつて満足だ」といふ中に矢、山は上着を脱ぎ、靴も脱ぎ捨て短剣を逆手に取つて進めば、大石もシャツ一枚となり、ズボン巾を緊くして裾を捲り上げて右手に八寸三分を取りて身構へすれば、確、氷辯護士は洋杖を持って中に立ち一、二、三と合圖を爲して、後ある方に飛退つたり矢、山、大石の兩人は敢闘荒く何れも兩眼血走り必死の勇を揮ひて闘ひを始めたり。

大石刑事は萬已むを得ざる意氣地と、一は青年の血氣に逸りて紳士矢、山定輝と端かくも決闘せざるを得ぬ場合とあり、今しも刃を合せたるに素より尺を足らぬと首の事とて、近寄れば忽ち何れかに傷く道理をれば、今しも丈高き矢、山が大石の臍上よりと首逆手に突懸りたる尖先を、引外して下より突かんとせし大石は、其身を避け損じて肩口を突かれたり、逆しる鮮血を見るや否、確、氷辯護士は二人の間、洋杖を打振りて、之を遮り「待つた」矢、待てどは何だ今一息に…… 確、矢、山君、何を云ふか今誓つて言葉に、傷一ヶ所を以て勝敗を決すると、約條したんぢやあいか 矢、ウーム……と理の當然に一言もあし、大石は傷に手を當てしが其手の指の股より溢るゝ血沙を物ともせず 大、確、氷君、残念だ、今少しやらせて呉れ 確、君も馬鹿を云ふを、條約を履行せむけりや可かんよ……イヤ 矢、山君、之で決闘は済んだから何うか此場を立去つて呉れ給へ何日までも居つては可かんからあア……で善後策は僕が考へもあるから 矢、確、氷君、君には初めて逢つて飛んだ迷惑を懸けて済まん……イヤ 大石、能くも満座の中で耻辱を興へたる其返報で此通りだ、態を見ろッ」と上着を引被りながら

ら悠々として立去つたり、身を悶へて「無念」と叫ぶ、碓氷辯護士は、負傷したる身を調査合宿所へ連れ行くは心苦しとて、土手三番丁ある梨高邸へ仰にて連れ来り、窃に醫師の治療を受けしが、さしたる重傷にもあらず、二週間を経過せば全治するとの診断に、子爵夫人も共に安心して、其夜は同邸の客室に一泊を計されたれば、碓氷辯護士は猶夫人に大石の身を依頼して立歸りたり美事なる客室に据ゑたる室臺に横はりたる大石は、獨り語して「ア、立派もんだ、客間といふからは……ハ、ア客が此室に居たんだ……大さな支那靴……書物には……古今集、萬葉集……ハ、ア矢張り女が居たんだ……ア、傷かツキ、痛んで来た……今夜は残念だ……」と千々の思ひに眠られぬ大石刑事は、氣を紛らす爲にと書棚より取出したる書籍は探偵小説とあるに此身には相應の讀物と手に取りて開き見る中に、其書籍の罫より迂りてサララと寢臺の下へ落ちたるは、絹の手巾あり唯さへ手巾に目を附け居る身の、胸先づ躍りて拾ひ上げ打返し見れば、桃色り縁取り地合は綾絹にして、罫には花文字の「I」を刺繍にて顯したり、傷の痛みをも忘れて寢臺を飛び降りし大石刑事は、物をも言はずで夫人

の寢室へ既来りしが、今宵は宴會の席上に間違ひを仕出来し、刺さへ夫人の睡りを驚かして、一泊を乞ひし身が今又夫人の安眠を妨ぐるは、無禮あらんと又も茫然舊の客室に歸て「ア、有難い、少し端緒を得た」と喜びたり

彼の手巾を己が持つたる手巾と較べて打喜び、今までは其端緒を得ぬに悶れたる大石刑事が今長く思はるゝ一事あり、大ア、早く夜が明けんかあア、夜が明けたら奥様に此手巾の持主を聞いて直に時を移さず其女を捕縛し……有難いア……早く夜が明けんかあア……併し彼の女は此客室に居たものとする、何處か遠方へでも移轉したんぢやないか、何で奥様が人殺しあんなかする女と心易くして居たんだらう……爾ういふ悪い女だから誤魔かして奥様と交際して居やがつたんだ、爾うだ爾うだ早く夜が明けんかあア、未だ三時か今夜のやうに夜の長い事はない……時計は止つては居らんか、ア、ボン／＼言つてるあア」をぞ、唯氣のみ焦りて、肩の傷は全く忘れて寢臺を降り又上り、獨り煩悶する中に、東天紅の聲に心附き「占めた、五時だあ少し早いが出懸けるツ」と騒ぎ立つ胸を押詰めて、子爵夫人の寢室ある襖の外へ立ちしが、真逆に其襖を開く譯

にも行かねば、小聲にて 大「奥様々々、未だお目覚めにはありませんか 夫「最
う起きて居ります、大石さんちやありませんか大層早いぢやありませんかねわ
大「へい少し心の急ぐ事がありました…… 夫「マア此方へお送り下さいまし
大「有難う存じます」と襖を開けば夫人は今侍女の運びし、牛乳とビスケット
を喫し居らるゝ處あり 大「お早う存じます、夜前は實に申譯のあい事を致しま
した 夫「貴君傷は如何です 大「最う治りました 夫「然んかに、早く治るもんで
すか二週間懸ると醫師がいつたぢやありませんか 大「夫が不思議の事には最う
治つたんです……マア然んを事は何うでも構はないです、此手巾は誰殿のです
夫「オヤ其品は何處にありました 大「彼のお室間の探偵小説の間に…… 夫「探
偵かんでもものは何をするか譯らぬ、失禮な事ををさる無暗に人の座敷を搦
すといふ事がありますか 大「之は恐れ入りました、マア誰のです 夫「伊川俊子
さんのです 大「伊川俊子……とし子……占めた其れで此Tの字が……有難い今
何處に居ます其女は 夫「其女だあんて失敬な事を被仰るゑ、先達まで此家に居
らしつたんですが、學校へ御通學の御都合で神田に居らつしやいます 大「神田

小川町ちやありませんかね 夫「宜く御存知ですね、小川町の朝日軒といふ旅館
に下宿して居らつしやいます 大「ソコで其俊子さんは色の白い瓜實筋の鼻筋の
通つた、口元の締つた目尻の上つた、地膚眉毛に富士額、別嬪でせう 夫「何處
で聞いてお在ますつた、其通りですよ 大「此手巾はお返し申します……今行つ
たら俊子さんは朝日軒に居ませうか」と血相變へて問懸けたり。

一十一

高梨子爵夫人は何の氣も附かねば、打笑ひつゝ 夫「何ですわね、大層狼狽へて
俊子さんはそんなお訝しお疑ひあんぞ受けるお方ぢやありませんよ」と平然た
るに、大石刑事は先づ俊子と夫人の交際せる關係より問はんとなせしが、斯る場
合には一刻も早く本人を押へざれば、後に又肺を嚙むが如き後悔あらんも知れ
ずと、只心のみ焦ちて 大「マアそんな事は何うでも宜いんです、朝日軒に居ま

すか 夫、夫はお在にありませんとも、八時にあらあつちやア學校へもお出懸けにありアしません未だ五時でせう 大「宜しい大きにお邪魔をしました、失敬 夫、マアお待ちあさい、碓氷さんの御盡力で今朝早く、醫學士が見ゆる筈ですから……」 大「ナ、ニもう傷は治りました 大「そんな早く治るもんですか 大「もう治つたんです左様からッ」と挨拶もソコソコに飛出すに、夫人は大石が書生風の氣質を知るものから、心にも留めず其儘に寄せしが大石は玄關に抵りて、自分の靴を穿いて来りしを忘れ、有合す雪駄と薩摩下駄を片足づゝ突懸け、夢中にあつて一散走りに門外へ飛出せしも未だ夜の明けたる許りの時おれは、通行人も少く俥も見ぬぬに 大「エ、仕方がない」と足を宙に京橋警察署に駆付け、今しも小使は竹箒を取りて敷石を掃き居りしが大石の姿を見て、小「オヤ大石さん、大層お早うございますね、ヤツ燕尾服で雪駄と下駄の片敷、驚きやしたね、廊署長は出られたか 小「未だ〱御出勤にはありません、漸く五時半です 大「斯ういふ際には早く出る 小「今日は何です 大「何でも汝等の如きものゝ知る事ぢやない、急げッ 小「何處へ急ぐんです 大「エ、解らん奴だ

俥屋、俥屋」と幸ひ門前を通る車夫を呼べば 車「へー御用ですか」と櫛櫛を突くに、大石は小使の襟首と腰を捉へて、車の上へ押据る車の櫛櫛を上げさせ、車の幌に手を懸けてグツト力限りに押し切れば、車夫は思はず京橋を渡り銀座二丁目の角まで来りて心附き 車「ア、驚いた、小使さん何處へ行くんです、何處にしよう 車「申言つちやア困ります、乗つた人が知らなくつちや困りますアね 小「何だか署長に早く出るを言つたが、大石さんが署長のお迎ひに行けといふんだらう 車「其署長さんのお邸でわのは何處です 小「水谷町だ 車「オヤ、一町來過ぎた車夫も何處やら知れぬ儘、只疾風の如くに水谷町ある京橋警察署長の住邸へ来りたりしが、小使は車を降りて門を入るに、署長は今食事中ありしも、門前に俥の止りし音のするに質素なる住居とて、小使の聲も奥に聞わしかば、流石に警察に職を奉せる身の猶豫なく、自身玄關に立出でたり。小使は大石刑事に驚かされて竹箒を持ちたる儘俥に乗り、周章狼狽し居れば、署長の顔を見るより 小「大變です 署「何事か 小「エ……其早く出る 署「何だ 小「斯ういふ場合には早く出る全体署長は怠りものだと斯ういふんです 署「誰

がそんな事をいふか 小「大石さんが燕尾服で、雪駄と下駄の片殿、餘ッ程泡を食つて居ますから、何か大事件があつたに違ひありません、私を車に押乗せて俤の後を押したんです 署、ウーム……何だ、汝は箒を持つて……小「オヤ、氣が附かず持つて来ました 署何にせよ大石の云ふ事だ、直ぐに行かう」と職務に熱心ある署長は、制服を着くる間も返しと其俤に飛乗れば小使は箒を握いで後押をかし、早くも京橋署に到れば大石は傷口に緊と糊帯して衣服を浴換へ何やら認めて居りしが署長の顔を見て思はず莞爾り打笑ひ 大署長、早朝から相済みません喜んで下さい、水村探偵の横死以来、御苦心をかされた采女ヶ原の犯人が知れました 署、ナニ犯人が知れた、して居處は何處だ 大「小川町の管内です 署、前科者か初犯か、逃走しはせんか 大「大丈夫です、逃走の憂ひはありませんが、少しも早い方が宜しい、直に小川町署へも照付して捕縛りませう 署、流石は大石、宜く探つた、だが其證據と事實は 大「勿論證據審判事の令狀の發するまでの順序は證據事實共にチャント茲に認めて置きました、御覽下さい 署長は之を見るに彼の山下平助ある車夫に依りて得たる血染の巾の互細送し

く知れたれば 署、宜し直に令狀の手紙をしよう」と之より三人様き二臺の俤を仕立て、署長と大石刑事は先づ鍛冶橋の地方裁判所に到り、豫審判事より逮捕狀を得、又俤を小川町署に走らせ、同署長と打合せをなしたる後、同署の巡查十人は犯人居處ある小川町朝日軒の裏表を圍みたり、大石刑事は唯一人にて朝日軒に入るに、家の造は總て洋風にして受附らしき處の卓子には、髪を蓄へたる主人らしき者居り、大石は最と叮嚀に辭義ををし 大「エ、一寸伺ひます此方に伊川俊子さんといふお嬢様がお在でいますか」と問ふに主人は大石の粗服あるに、之を侮りし様子にて 主「ハアお在だよ 大「唯今居らつしやいますか 主「ア、未だ學校にはお出でなさらないよ」居るといふを突留めてより大石は姿勢を正し 大「お前主人か 主「何だい、主人かとは 大「俺は京橋署の刑事大石といふもんだ」と名刺を出せば主人は驚き顔「へー、左様でございます私か當家の主人でございます、何か止宿人のお検めでございますか……手前共は胡亂なお方は御一人もお泊りはありません、皆紳士とか御令嬢とかいふお方はばかりで…… 大「イヤ夫は知つて居る、俊子は一人か、他に男でも附いては居

らんか、平生身の廻りに兇器等所持しては居らんか、と一先急處を押して問ひ懸けたり

旅館朝日軒の主人は打笑ひて「そんな兇器なんかお持ちなさるお方ぢやありません、夫は何うも美しくいゝ温順いゝお嬢様で、男も何も居やアしませんお獨りて居らつしやいます」大石刑事は主人の偽りからぬ口振を聞きて、大石何處に居る主へ一三階の一番の室にお在です、大石、其座敷へ行つて俊子を呼んで来て呉れ、主畏りましたと立つて二階に登らんとするに大石は之を呼止め、大石待て、汝が俊子に向つて警官が来た杯いふ事を言つては可かんぞ、何ぞか騙て是まで連れて来い……汝の家が、普通の旅店から踏込んで繩を打つんだが、相當知名の士も外國の紳士も宿泊して居るから遠慮してやるんだ、又汝の家から繩附きを出すのも暖簾に拘らうから、門外へ出てから繩を懸ける積りだ、汝が心得違ひをして今探偵が来たおと、俊子に内通でもしたら、汝の家四方には巡査數名が固めて居るから、如何なる騒ぎになるかも知れんぞ」之を聞きたる主人は顔色を變じて驚き、顫ひ聲とあり「ナ、却々もちまして、ナ、内通あ

ぞは致すごころではございませぬ、ド、何うかお静に願ひます」と言ひつゝ階子を登りしが又降り來りて、主、エー唯今申上げようと存じましたら、俊子さんは丁度今學校へお出懸けの所でございませぬ、大石、そうか、夫から却つて言はぬ方が宜からう、入口に立つて待つ中に、今しも階子段を降り立ち來れるは豫て車夫の平助の詞の如く、容貌は手帖に認め置きたるに寸分違はず、唯異るは血染の手巾を落したる當時、頭髮は高島田と聞きしも、今日は夜會結びに消らかある白リボンを飾り、質素なる小紋の五ツ紋、海老茶の袴を穿ち、紫縮緬に包みたるブックを小腋に抱へ、悠々として入口に來り、上靴を脱ぎて南面表若狭塗りの臺に鑑珍の鼻緒をすげたる駒下駄に穿替へたる時、大石刑事はフト側に寄り軽く一禮をし、大石、貴嬢が伊川俊子さんですか、俊子、ハイ……貴君様は大石、僕は京橋警察署の刑事大石と申します、一寸貴嬢に伺ひたい事があるんです、京橋署まで御同道を願ひます」と言ひ切つて大石は俊子が抵抗するか、他に連累の應援者でもあきや、連行するを拒む場合には據なく殺人犯嫌疑に依つて逮捕する令状を示さんと、四邊に鋭き眼を配つて身構へしたるが俊子は夫と聞

きて一方あらず驚き、早兩眼に涙を浮べて身を顛はせ、俊、イニ妾は警察あぞへ御同道致すやうか、別に罪は犯しませんのに……大、イヤ別に難かしい事ぢやあいです一寸御同道を願つて……お申立てにある事は署へ行つてから……一寸です」と手輕に言ふに、俊子も否みかねて、俊、ハイ……左様からお供を致しませう」と力あげに立出るに、大石は袂より結紮を取り出し、口に呼子の笛を啣へたり。

十二

大石刑事は伊川俊子の背後より尾行して、時分は宜しと口に啣へし笛を吹鳴らすに、左右より馳せ來りし巡查は俊子の前後を取圍ひ中に、忽ち大石の爲に俊子の兩手は背に廻りて、犂々と縛しめられたり荒鷲に捕はれし小雀の羽叩さへあらず、瀧あす涙を拭んとするも自由あらぬ身の、今は陸方泣くく……大石の

す儘にありて憐れ居たるが、署長は小蔭より立出で、長、大石、意外に容易く捕縛し得たか、俣も用意してあるから之へ乗せて運出して呉れ」といふに、一人の巡查は二人乗の俣を雇うて待ち居れば、大石は俊子と共に其俣に打乗り、京橋署指して急がせける、去れば朝日軒の近隣は黒山の如き群集にて、中にも此邊には學生連の多き所として日頃俊子の美しき姿を垣間見、野心を抱ける輩、彼方此方に打寄り、熱心に噂し合へり、甲、君、彼の尤物は實に意外だね、乙、所謂外面女菩薩の女であつたんだあア、丙、犯罪は何だらう、丁、僕が刑事的觀察を下して見ると、彼は高等賣春婦の大統領でもあらうよ、断じて窃盜の如き犯罪では無い、甲、君のいふ所は過まれるの甚だしきものである、彼の高尚優美なる婦人が脱しむべき淫を隠ぐ如き所爲はし無い、僕が保證する、乙、僕思ふに彼は強姦であらう、甲、女が強姦するかい、あぞとりくの評判にて、物好の青年は其日の通學をも忘れて、態々京橋署門前まで赴き、署内の模様を窺ふもあり署の門前は人垣を作りて見わたるが、群集を押分けて署長も歸署し、大石と打合せをあし始めたり、大犯人は留置所に拘禁しましたが直ちに訊問所に引出し

ませうか 長「イヤ其前に車夫の山下平助を召喚して置かんと可かん 大「ハイ畏
 りました、大石は召喚状を認めて、小使を呼び 大「小使、直に下谷區徒士町二
 丁目六番地平民山下平助といふ者を呼んで来い 小「ハイ 大「細い路次の突當り
 だ車屋だぞ、往は車へ乗つて行け、歸りは平助を其車に乗せて連れて来い 小「
 然うすると往は私が車へ乗つて……歸りは私は歩行んですか 大「然うだ 小「如
 何でせう歸りの所は幸ひ本人が車夫ですから、其奴の車へ私が乗つて歸つては
 大「自分勝手な事をいうを、歸りはスタ〜歩行いて来い 小「オヤ〜 大「早
 く行け小使は車に打乗りて徒士町に至り、平助の家を尋ねたるに、平助は今し
 も稼業に出でんとて草鞋を穿きたる所ありしが小使の姿を見て不審顔して居り
 しに、小使は少しく不平の折あれば鼻息荒く 小「コラ車夫山下平助は其方か、
 平「へい俺でげす 小「警察の御用だ、直に京橋署へ出頭しろ……ソレ召喚状だ
 平「ヤッ過日の引合ひか、へい参ります。
 車夫の平助は京橋警察署に來りて、人民控所に入れば、大石刑事は署長に此通
 知を申し直に留置所ある伊川俊子を引き出し、腰繩として訊問所へ連れ来るに、

署長は一段高き處に卓子を控へ俊子の舉動に目を注げば、俊子は斯る處へは初
 めて來りしことゝて、唯わろ〜と慄わつゝ柵欄に兩手を載せ、熱き涙を落し
 て俯向き居るに、署長は垂れたる頸髪を撫で除るに口を開きて訊問を始めた
 長「お前さんの姓名は 俊「伊川俊子と申します 長「年齢は 俊「十七歳でござい
 ます 長「本籍は 俊「麴町區土手三番町二番地子爵高梨直則方同居でござい
 ます 長「當時は何處に居る 俊「神田小川町朝日軒に止宿して居ります 長「身分は
 俊「士族でいます 長「父母はあるか 俊「父も……母も……ございませぬ、没
 しました 長「同胞はあるか 俊「一人もございませぬ 長「職業は 俊「職業とては
 ございませぬが、女子手藝學校へ通學して居ります 長「一定の職業なくば財産
 でもあるか、學費を支給する者でもあるのか 俊「ハイ些細ながら父の遺産がご
 ざいまして、公債の利子や株券の配當で何うやら其日を送つて居ります 長「是
 迄に重罪又は輕罪の處刑を受けた事がありますか 俊「イエ却々左様な事はござ
 いませぬ 長「お前さんは露木げんとかといふ者を知つて居るか 俊「ハイ……
 イ、エ少しも存じませぬ 長「ウー、然らば去る十二月五日の夜十二時三十分

采女ヶ原を通行したか 俊「イ、イエ左様な處へは参りません」と答へしも其舉動は身に覺わあるべきものと見て取りし警察署長は繩取りの大石刑事と眼と眼を見合せ、猶も署長が炯眼は休みなく俊子の一舉一動に注ぎぬれり、長、これ、偽りをいふては可かんぞ此……此手巾はお前のであらうか」と大石が身を離さざりし彼の手巾を示すに、俊子は益々顔色を變じて慄ね居れり 長「大石、大「ハイ 長、車夫を呼んで……」 大「ハイ訊問所を立出で、小使に通ずると、今歸り來りたる小使は面影らして控所の方に向ひ「山下平助、山下平助」と横柄に呼びしが 平「へー」と答へて之も訊問所は初めてのことと慄ねながら入來り 平「何處へ参ります 小「サア此内へ這入るんだと突入るゝに平助は周章たる風情にて、柵欄に凭れり 長「お前の姓名は 山下平助と申します 長「住所は 平「下谷區徒士町二丁目六番地 長「年齢は 平「厄でげす 長「厄とは 平「四十二でげす 長「身分は 平「平民 長「職業は 平「人力車夫 長「十二月五日の夜に拾つた手巾は之に相違をいか 平「へー、まにに違ひまりやせん 長「お前は此婦人を知つて居るか 平「へー、此方ですか 長「宜く顔を見ろッ」とひつゝ双方の

顔を見視居たり。 車夫の山下平助は伊川俊子の顔を一日見たりしが、最と驚きたる面色にて 平「マアお嬢さん、何うあさいましたかお氣の毒さまお縛られて……過日は有難う存じました、大變お金を戴きました……」と言はるゝに俊子の土色ありし顔は、少しく紅葉を散して下俯向きたり、署長は此有様を見て平助に向ひ 長「もう宜ひ、用が済んだ引取つて宜しい 平「ちやア私はもう懲役に行かずに済みますか」といふに大石刑事は聞かねて 大「コラ、何をいふ早く出んか」と言ふ大石の顔を見て平助は心附き 平「オ、過日の旦那でげすか、お蔭様で日當を戴いて……」 大「黙つて下れッ」と一喝されて恐るゝ 平「平助は訊問所を立去つたり、署長は更に語を變へて俊子に向ひ 長「お前は本職に對して偽りを繕へるやうぢやが、偽りの申立をしたら、相當の處分のある事は知つて居らう、正當の申立をせんとお前の爲にあらんよ」と物柔かに説きて尙も語を缺ぎ、お前は十二月五日の夜采女ヶ原へ行かんといつたが、お前が現に乗つた車屋が今の詞と言ひ、お前の舉動で行つた事は知れて居る、采女ヶ原へは行つたに相違をからう 俊「ハイ、

實は参りましたので、長、然らば戻りはあの男の車に乗つたのぢやあ
俊、ハイ、長、其夜は何處の家へ何用があつて行つた、俊、あの……夫は……其運
動に参りました、長、運動……小川町から殆んど一里もある采女ヶ原へ運動とい
ふ事があるか、況して夜中唯一人で……、そりやア夏から未だしも、此寒さに
そんな事は無い、隠さず言ひなさい、俊、イ、ニ運動に違ひ無い、長、マア
そんなら運動として置かうが、運動に行つた者が何で戻りに車に乗つた「ハイ
夫は……餘り草臥れましたから……」長、マア夫も宜い……が車の中へ落した此
手巾もお前のであらうか、俊、ハイ、長、其際此手巾に夥しい血が附着して居つた
といふが、其血は何か、俊、彼の夫は……其血は……」署長は少しく聲に力
を入れて、長、お前は十二月五日の夜十二時三十分、采女ヶ原の露木ヶ原へ
押入り、母子二人を惨殺したのであらう、其事實と連累者の有無を悉く自白し
て了へッ、俊、却々もちまして、妻は大それた人殺しを致した覺はございま
せん、何うぞ御勘辨遊ばして下さいまし、長、然らば其手巾の血は何だ、俊、ハイ
長、采女ヶ原へ行つたは運動として、先づ辨疏にあつて居るが手巾の血は言聞

きは出来まい、早く自白して了へば其罪にも酌量減刑といふ事もあるのぢや、
何日までも剛情を張ると自分の身の爲にあらんぞ、俊、有難う存じますが、全く
人殺しを致した覺は無いのでございませう、長、然らば手巾の血は何ぢや、俊、其
手巾の血と申しますのは……アッ、彼れは斯様でございませう、誠に、お耻かしい次
第でございませう」
伊川俊子が手巾の血染に就ては、耻かして口籠るを見て、署長は先づ書記の
巡查と大石刑事を訊問所より立去らしめ、長、何か耻かしいといふ容子であるか
ら、書記も刑事も立去らせたがもうお前と本職と二人ぎりぢや、耻かしい事
も隠さず言はんけりや可かんよ、誰も外に聞く者は無いがお前が言はんと重罪
犯の嫌疑者である……イヤ既にまつて居るのだ、見受ける所お前は相手を教育
を受けた者のやうに思はれるから、本職も成るべく穩かに問うて居るのだ、宜
しく心を静めて事實の申立をなさい」と最と物柔かに尋ねるに、俊子は此優
しき詞に猶も涙は止り木を濡し、唯首を垂れて答へず、署長は俊子の情に迫
りて打委れたるに附入り、長、手巾に附いて居つた血は何だ、俊、お耻かしいこと

でございませぬが、女の……不淨でございませぬ長、ナニ月経だ、ツーム行くはひ逃れたる、然らば何で其手巾を車中に捨てた俊、イニ……捨てたといふ譯ではございませぬが……其ツイ危相で落しました……、敵にお耻かしい次第でございませぬ」と何うやら其座を繕らふが如き口吻あり、署長は直ちに書記の巡查と大石を呼びて口供調書を作らせ、拇印をささしめ、俊子は舊の留置所へ容れて署長は大石に向ひ、長却々見懸けによらぬ剛情を女であるが、既に事實も證據も充分だから、直ちに検事局へ押送しよう、大、承知しました」大石より巡查に傳へて、遂に俊子は即日検事局送りとなり、豫審調へに懸りて其身は鍛冶橋監獄本署ある未決監に繋がることとあれり、此處に大石刑事は、素人上りながら熱心の爲に、一大偉功を奏して東京府下二十八の警察署と、警視廳までが全力を竭して探偵せし、此兇行者を容易く捕縛せしこととて、警視廳の許判とあり、頼母しき、青年刑事と適れある警官の龜鑑よと譽め稱へられしが、俊子を捕縛したる翌日より三日間の慰勞休暇を得署長より探偵費、賞與金等を與へられしかば、大石は傷の治療もし、且つ是まで苦しめし心を養はんと、三日間

は非番に當る入懇の同僚を伴ひ、其處此處と遊び酒もど飲みて日頃の鬱つ散せしが、四日目の朝に至りて未だ宿醉の氣遣かざれど早や出勤の時間に聞もければ七時頃署へ出頭すべく、受附迄來りし時、小使は慌だしく走せ來りて、小オ、大石さんですか、今貴君の許へ持つて行かうと思つた所でした、大、何だ手紙か、小、大石さん、別紙からのお手紙お安くありやせんせ、大、冷評すも、小、女の名ですせ、大、ナニニ女だ、俺は生れてから女あんぞから手紙は貰つて事はあいが」と其封皮を見るか、高梨ゆき子とあり、封押切て文面を見る、中に大石の顔色は忽ち變じ來れり。

一十三

大石刑事は顔色を變じ、大、ハテナ何事か與様から直に來いと被仰るんだが、僕もツイ骨休めに遊んで居たんで何はあかつた、悪い事をしたか、小使は何

も知らざれば、少大石さん貴君ばかりですよ、署中で女から手紙でも貰ふのは大馬鹿な事をいふあよ、そんな浮いた話ちやない僕の大恩人の或る夫人から急のお召しあんだ、まだ僕は肩の傷が充分治らんから署長へもう三日の休暇を願ふ積りで書面も書いてある、之を署長へ差上げて置て呉れ、僕は直に行くからと、大石は非常に狼狽したる体にて、俥を呼びて之に飛乗り、越町區土手三番町高梨子爵邸へ來りて、玄關より大御免「ハイ」と侍女が立出でたるが例は三ツ指の拶拶にて大石が首は二度三度下げねば、先方は首の上らぬ程に鄭重なるに、其侍女は大石の顔を見るや否「大石さんでしたか、奥様がお待合でござりますよ、お早くお通り下さい」といふに大石は益々不審附れず勝手知つたる應接所へ入らんとするに、侍女は「大石さん今日は奥様が御居室へと被仰いましたから、何うか奥へ……大ハアさうですか」と首を傾けつゝ襖を開くに、子爵夫人は褥の上にくの字形に坐り、銀の延煙管を膳に立て、其吸口に顔を當て、鬢の後れ毛を口に啣へながら、何か腹立たしき事のあるにやあらん重さうある頭を上げ、口惜し氣に大石を見て、夫大石さん宜くお出であすつた、此方

へお進みあさい、大御無沙汰を致しました、ツイ〜骨休みに二三日遊んだもんですから……夫、そんな事は何うでも宜うござります、貴君はお忘れなすつたんですか、大ハテナ忘れたかとは……ア、彼の金の事ですか、實は奥様に十圓拜借して、其爲めに或る證據物も首尾好く手に入り、損料の禮服も借りて、何うか斯うか犯人は捕縛しましたが、ツイ〜……其賞與金も貰つたんですか、其時お返し申せば宜かつたに、友人が目出たい飲う〜と勤めるもんですから、遂ひ悉皆遣つて、最う十二錢五厘にあつて了ひました、門に待つてる車夫に拂ふと愈よ一文無しにあるんで……何れ俸給を貰つたらお返し申します、夫、大石さん妾は金の催促あなかで貴君を呼んだんちやありませんよ、大ハア夫で安心しました、して御用は、夫、大石さん、宜くも〜貴君は先日伊川俊子さんの住所を聞いて、妾に一言の断はりもあくお縛んあさいましたね、大ア、彼の一件ですか、奥さん彼の女は何ういふ御懇意か知らんが、大變な奴ですよ、人の二人も殺した曲者です、夫、エ、何を被仰る、俊子さんのお父上には妾等夫婦が大恩を蒙りつて居るんです、妾は最う勘辨は出来ません、貴君の命を貰ふ爲

「め今日お呼び申したんです」
 流石に子爵夫人、斯る場合にも狼狽せず静かに手を打つて侍女を呼び「夫、コレよ、お前方は部屋へ行つてお在よ、用があれば呼びます、呼ぶまでは決して、此座敷へ来てはありませぬよ、女「ハイ」と次室に控へたる侍女と共に親室が隠れたる女中部屋へ立去れり、夫人は大石の顔を凝視めて「夫、大石さん、妾等夫婦の大恩人を捕縛にあつた上は此儘には許せませぬ、大、イヤ、與さま御尤もですが、彼の女が殺人犯であるといふ證據があります、先夜探偵小説の中から發見した、Tの字の刺繍ある手巾を血に染めて俥の蹴込みに落したんです、其夜采女ケ原の化物邸で二人の女が殺された時も逃へず十二時半、乗せた俥の車夫が證人で、落した手巾は證據物です、又本人が深夜に采女ケ原から小川町へ行つた譯が言へないです、斯く證據事實二ツあがある上は、正に罪は成立つて居るんです、私の勝手にやつたんぢやない、豫審判事の令状により長官の命令の下に捕縛したんです、夫、假令貴君が何と言はうとも、俊子さんを縛した上は妾の敵です、何あつても妾は貴君を殺しますさうしさいと事業の成にお在さる

俊子さんの御両親に對して妾は濟まぬのです、妾等夫婦には世にかへられぬ恩義があるので、事から貴君の命は今此處で戴きます、尤も貴君は男子妾は女の事ですから、事に因つたら妾は貴君に敵はあいかも知れませぬ、假令妾は貴君に殺されても構ひませぬ、又首尾能く貴君を殺した所で生きては居りませぬ、直に死んでしまふ考へですから、大、夫は又與さまにも似合はぬ粗糲な事ぢやありませんか、夫、イヤ、エ、粗糲と言ふれても構ひませぬ、不殺不徳の人と言はれればア宜いんです、大、何うも困りましたア、夫、貴君は男らしくもよい、卑怯にも逃げるんですか」と夫人は襟を蹙り出で、詰寄るに、大石は目を閉ぢて暫らく考へ居りしが、何思ひけん襟を正して前に進み、大、與様、解りました、貴女は恩義を重んずる爲め、私を殺し御自分も死なうとさるお心は感服の外ありません、日本の婦人は斯うあては適はん所だ、私は貴女に大恩を蒙つて居て、抵抗する程の氣力はありませぬ命は差上げます、イヤお手向ひは致しません、スツバリやつて下さい、首からでも胸からでも突くとも斬るとも御勝手次第、併し與様……私、一方は犯罪者を押へて職務の爲に竭して居る、又一

方は恩殺の爲に手向ひせず、命を捨てる、大石が精神の潔白、心中を察して殺して下さい。夫能く被仰つた、そんなら命は貰ひました」と楯の下より取出せし六連發の拳銃、覗ひを定めて大石の眼前に差向けたり。

高梨子爵夫人は大石刑事に向つて、拳銃の狙ひを定めて今や引合を引かんとする一刹那、襖を引明けさま飛込み夫人の拳銃持つ手を下へ緊かと押へ付け「待つた」と聲を掛けたるは豫て決闘の際に介添人とありし、碓氷辯護士あり、夫人は決死の覺悟に血走る兩眼を炯らし、柳眉を逆だてて夫誰かと思つたら碓氷さん、放して下さい。碓、イヤお待ち下さい野蠻か、何事です荷めにも子爵夫人ともある人が、マア、お待ち下さい大石を殺すから貴女が手を下さんでも私が殺して上げます、先づ此手をお離し下さい」と男の力に敵はずして拳銃は碓氷辯護士に奪ひ取られたり碓氷はホット一息して碓、イヤ夫人、恐れ入つた貴女の精神、恩人の爲に大石を殺し自分も死んで冥途ある、伊川君に謝罪するといふ……ア、天晴れもんだ、日本の婦人は凡て斯くありたい。夫何です貴君は、人の許しも受けず、突然居室に闖入して失敬か。碓、イヤ之は……餘り喧嘩

の場合で失禮しました、實は唯今來て立關で侍女に聞いたら、貴君が大石を此室へ呼んで血相變へてお在にあるとの事、考へて見ると先日からの事は大石も宜くまい、若しやと思つて失禮を願みず無斷で闖入しました……何うか御勘辨を願ひます……オイ大石君……君も之までの所爲は悪いが、今の君が詞には碓氷も感服した、一方は職の爲に充分竭し一方は恩の爲に抵抗せずに夫人へ一命を捧げるとは、アア斯うかくては適はん、日本男兒だ。大碓氷君出すとも宜い處へ出て來て……退き給へ、僕は奥さまに殺されて死ぬが本望だ。碓、マア然う死にたがるか、少し僕に命を預けて呉れ……奥さま、茲に一つ私が貴女にお尋ね申したいことがある、夫は外でもまいが、今貴女は此大石を殺して了ふと、彼の伊川俊子さんは助かりますか。夫、エー。碓何うです、大石を殺したら貴女の潔白は立ちませうが、俊子さんの謀殺犯は免がれませんよ。夫……碓何うです、自分ばかりの潔白を立て、恩人の命を見殺しにするのは、不徳哉おやまいかと僕は考へる。夫……碓何うです、ソコで僕か思ふには、命を救つて置いて、夫から大石を殺して、遅くはあからうと思ふが何うです。夫して

確水さん、何うしたら俊子さんが無罪にありませう。確、サア、夫れは餅は餅屋で僕の許へ持つて来なくつちや可い。夫、何うか俊子さんを助けて下さい。確、宜しい……ソコデ大石君、君にも尋ねるが……抑も伊川俊子が犯罪の目的は何だ、人を殺すには目的をくして面白半分には、殺すものはいせ。俊子さんは何には困らず色戀などは関係の無い事は従來の品行に因つて見るも明らかだ、サア犯罪の目的を言へ。大、君は議論するのが商賣だから飽舌るのは嫌はん。確、氷辯護士は打笑ひて、確、併し大石君、君も俊子さんが何故斯る重罪を犯したかといふのは、胸に一の疑問とあつて居よう……僕でも何うも解らんのだ。大、ウーム……成程然れア僕も變だと思つては居るよ、證據も事實もあるが本人は手巾の血の事も、深夜に采女ケ原へ行つた事も明かす、何うも然んを思はずするやうな女とも思へないのだ、不思議だと思つて居るんだ。確、サア其處だ……實に斯んを犯罪といふものは、僕も數年間辯護の職に従事して居るが、餘り聞かぬ所だ……君は豫審判事の令状と長官の命で捕縛したと言へ、犯罪の目的、犯罪の原因を知らずして俊子さんを捕縛したとは滿更缺點が在いと云へんぞ。大、

ナール程、確、又君は子爵夫人に大恩を受けて居るさうだ。大、ウーム、夫れは非常なものだ。確、して見ると夫人の爲めには此缺點があつた無實の罪人を救つて恩返しをしあげられ、君は濟むまい。大、だつて僕が捕縛したものを僕が救へるかい、申、言つちやア困る。確、夫は然うだが、君は夫人の爲めなら何を事でもやるかい。大、然れア奥様の爲めには死なうとまでした位だ、何んを事でもやる。確、ウーム、能く言つた、然んから僕が君に一策を授けるから充分働いて呉れ、然うすれば夫人へ恩返しが出来て其の上俊子さんも助かるといふもんだ……君は今日日は閑か。大、ウーム、今朝三日間の又休暇を願つて来たんだ。確、イヤ、丁度宜かつた……夫人、俊子さんも訝いで人殺しをすべき人でないに確たる事實證據があるんです、所で豫審判事が昨日僕へ相談したのは、豫審中の秘密に話が出来ないが、聞けば君が交際せらるゝ高梨家に俊子の籍があるさうだが、高梨が普通の人物から召喚して、俊子の身に拘はる事を聞うと思ふが、何分主人直則子は洋行中であるから、子爵夫人を豫審廷へ呼出すも氣の毒と思ひ、今日まで控へて居た、何んと君が高梨家へ行つて俊子嬢の極々親密にする女を連れて来

て呉れぬか役人が調べたのでは何うも女は其秘密を明かぬ、秘かに聞へば言はず嚴しく聞けば泣く、イヤ實に困つた、何うか此盡力を頼む、斯ういふと私事にゐるが君と僕とは同じ學校の出身だから、マア折入つて頼むんだが其親密な女を連れて来て、俊子に面會させ、女は女同士といふから其女に話さういふ合めて、情を以て言はせるやうにしたら宜からうと依頼を受けたんです、僕は夫は妙案だ、一つ盡力して見よう、今朝来て見ると此仕儀で驚きました、誰か嬢さんの極仲の宜い娘でもありませんか」といふに、夫人は「成程旨いお考へですが駄目です、俊子さんは學校中での評判の美人と言はれて、親密な交際のあるお嬢さんはありません。」

一十四

確氷辯護士は打ち案じて「夫人、夫ちやア駄目ですよ、俊子さんは氣の毒ながら死刑……マア未丁年で一等減じられたとして無期徒刑……」高梨夫人は驚き、夫は夫は大變です、何うかしてお救ひ申したいんです……妾でも御面會して伺へば宜いんですが、彼の温順しい嬢さんは妾にも打明話あんぞはあさいませ、平生銀行の利子のお話をしても、顔を赤くして宜しいやうにと被仰るんです、大きな聲では物も被仰らぬ程なんです、逆も秘密を聞く手段はあいのです、確、困つたあア、夫人は女性の事として早涙ぐみて聲盛らせ、夫、確氷さん……何うか助けて上げて下さいよう、確、助けたくつても夫がぬいとすると最ふ夫まで、夫人はワツと計りに泣沈むを、後の方に黙然として腕拱き居りし大石刑事は前に進み、大、オイ確氷君、確、ア、吃驚りした、何だい、大、先づ聞き給へ、昔の小説即ち爲永春水、柳亭種彦等の著作に随分淫猥な書があつて實に讀むに耐へぬ、確、何だい突飛な事を言つて……今然るを證據をする場合ぢやかい、大、マア黙つて聞け、其小説の中に深窓紅閨に人をつたる、令嬢が不圖僕のやうな好男子を見染めて戀煩ひとある、確、餘り好男子でもあからう、大、

冷評する、黙つて聞けつ、お醫者さんでも有馬の湯でも戀の病は治りやせぬといふ場合に父母は心配して其病源を探ると、或男を見染めたと解る、サア何者を見染めたかと詮議する、本人は言はん、友達に聞かせる耻ぢて言はん、下女等に聞かせる尙言はん、斯る場合には其乳母を以て問はせる、乳母といふ女は自分の母同様のもので、且つ自分の目下であるから遠慮がない、ソコで乳母だけには實は誰であると打明けるといふ事が古い小説にある當時の娘は然んを心の狭い女は一人も無い、自分で勝手に男を見立て、自由結婚をいふのをやるから、戀の病のバチルスは全滅して了つた、だから一番其俊子さんに、乳母でもあるか之れを一つ探つて乳母に聞かせたら乾度いふせ 確、旨いッ……流石探偵だ、宜い處へ氣が注いだ……夫人、嬢さんに乳母はありませんか、夫人は思はず喜びの眉を開き笑を含みて 夫、マア大石さん、宜く考へて下すつたねねありますよ 確、氷さん 確、其乳母は何所に居ます 夫、彼の……東海道の藤澤ですよ 確、ウーム神奈川縣の藤澤町で……名は 夫、みやと言ひます 確、姓は存じません 確、唯藤澤でみやちやア知れぬい 夫、困つたあア 大、宜しい夫だけ知り

ア、僕が直に出張して取捕まへて来る 確、其探偵は君が專賣特許だ、何分頼むせ 大、宜しい、行つて来る、夫人も手を合せて 夫、大石さん何うかお頼み申します。

大刑事は直ちに飛出さんとせしが 大、奥様、其乳母の顔を知つてお在ですか 夫、ハア年は最う五十近く色は少し黒い方です 大、宜しい解つた」といひつゝ躊躇するに、確、氷辯護士は氣を焦ちて 確、大石君少しも早く行つて呉れ給へ、大、然れア急いで行くがね……困つたあア 確、何が 大、其僕は停車場へ二人腕の俵で飛せるよ 確、然うだ二人腕でも三人腕でも早い方が宜い 夫、大石さん早く行つて下さいよ 大、困つたあア、貴女方は金に困らんから何んとも思ふまいが、實は金があるんです 確、相變らずか 大、紋切形の一文無し 夫、そんなら早く然う被仰れば宜いに、サア之を持ちあさい」と傍への手箱より額は幾何か白紙の上に、紙幣銀貨を列べて出せしかば、大石は引摺んで懐ろに捻ぢ込み 大、奥様、確、氷君行つて来ますせッ」と無頼者ある大石刑事は門を出るや否、俵に飛乗りて新橋停車場に到り、八時何分の東海道列車の三等客車に乗込みて藤澤

驛に若し、又も俵は二人輓にて町藤澤を彼方此方と問合せしも數千戸ある藤澤の町中に唯乳母をあしたるおみやとのみにては知れ難く、理髮屋、湯屋等にて問合せしも、是亦同様手懸りあく、遂に藤澤町役場に抵りて本籍の帳簿を一々閱覽の許可を得、細かく調べしが不圖目に着きしは飲食店天田みや(八十八)とて年齢も似合ひ、其住處は藤澤町の何西町とて驛の西端ありとまで知れたるに、大石は力を得て役場を辭し、又も俵に打乗り西町へ來りしは、早日も暮れて六時頃の事あり、車夫は俵を止めて、車旦那、煮賣屋のおみやや婆アさんの家は此家ですよ、大宜しく、少し待つてろ、事に依ると直に又停車場へ歸らあくちやアからあいから、車へお早くあさいませんと、終列車は七時五分ですから其お積りで……、大宜しく」と言ひつゝ天田みやの門口を見るに、酒肴いろいろと記したる薄暗き行燈を懸け、障子にも何やら記しあれど汚れて判然とは見えず、大石は障子を明けて立入るに、店には血鉢をど取散らしたる外一人も居らず、洋燈のホヤが燦りて家の内も能くは見ねど、奥の方に人の氣息すればオツと入りて、大、オイ、誰か居らんか居らんと、聲を懸くるも答ふる者あし

大石は心急げば暖簾を潜りて奥を覗く、一人の老婆は茶漬を食し居る体かゝるにぞ、大、オイ此位の大さを聲でいふのに聞わんのか」と問へど老婆は夫も聞わぬかして、訝かし氣まる面色して己が耳を指さし、妾は耳が遠うございます、今少し大さを聲で言つて下さいまし、大、婆か……道理で聞わぬかと思つた、お婆アさん僕は少し聞たいたことがあつて來たんだ、お前がおみやさんかい、婆、イエみやは妾ではございませぬ、大石刑事は又打案じて、大、ナニみやはお前ぢやない、でも旅人宿の鑑札に天田みやとしてあるぢやないか、婆、ハイそれは妾の娘でございませぬ、大、娘……おみやさんといふのは一体幾歳にあるんだ、婆、四十九でございませぬよ、妾が最う七十五で、婆、ア、と言はれる中に娘が婆アにあつて最う可けませんよ、早く阿彌陀様のお側へ參らあくつちやア……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、大石は思はず噴出して笑ひしが、猶も婆の耳の邊りに口を寄せて、大、それでおみやさんは乳母をして居た事はあいか、伊川俊子といふ者を知つて居ないか何うだ、婆、ハイ、存じて居りますとも、永い事伊川様に御奉公申上げて居りましたが、

伊川様も宜いお方でしたが惜い事を致しました、お嬢様も御成人遊ばしましたらう、お小さい時分に一度妾も東京のお邸へ参りましてお顔を見ましたが、其時に奥様から頂戴致しましたお羽織を未だに大事にして持つて居りますよ、大宜しく判つた、しておみやされは何處へか行つたのか、婆、ハイ娘に就ては種々お話がございませぬ、マア、其處へお懸あすつて下さいませ、大、早、話で呉れ、都合で僕は今夜にも歸らあけアあらいんだ、婆、マアお聞きあすつて下さい、みやの娘におゆうと申すのがありまして、妾の爲めには大事を孫でございませぬ、大、エ、ツ孫の話は何うでも宜いや、婆、マア夫からお話し申さあぐつちやア判りませぬ、大、困るあア、早くやつて呉れ、婆、孫も十七にありませぬが夫は、孝行者でございまして……、大、ウム感心々々、夫から何うした、婆、所が先年みやの本夫が亡くなりましたからといふものは、永の煩ひの後で、彼、方此方に借財が出来まして、其が爲に財産差押へとかいふ事になり此家も人手に渡すやうな事にあつた時、孫のおゆうが申しますには、先祖代々住んだ家を、何うも人手には渡せぬ、妾が身を賣つても、此家にお婆アさんと阿母さんを住は

せて置きますといつて、妾の止めるも背かすにトウト、東京の吉原へ身を賣つて了ひました、大、ヤレ、お氣の毒、婆、斯んか穢かい家でも先祖が建てた物で、此家に今でも住んで居られるのは悉皆孫のお庇でございませぬ、大、オヤ、婆、婆アさんト、泣出した、オ、車夫、車は何うだ、車、お早くあさいませぬと終列車の間に合ひませぬよ、停車場が遠いんですから、大、婆さんは孫の自慢は判つたが、結局おみやさんは、何處に居るんだ、婆、マア、之から解りますんす、正直の頭に神宿るとか、孝行の徳とでも申しませうか、おゆうに宜いお客様が附きまして今度落籍といふことにありまして婆は又荒瀬に語り始めたり。

終列車の時間切迫するものから大石も氣の急げば「婆さん早くやつて呉れ」と側から急ぎ立てるも老婆は沈着して「孫のおゆうは宜い、鹽梅に結構、旦那様が附きましてね、大枚をお金をお出し下すつて落籍ばかりか日本橋とやらへ立派な妾宅とかいふ家を拵へて下すつて、昨日其方へ引移つたと申して孫から端書が参りましたもんですから、みやも喜んで今朝程東京へ参つたんでございませぬ

よ大「ナインダ、東京へ行つたんのか夫ぢやア早く東京へ行つたといつて呉れりやア好いに孫娘の自慢話から聞せられちや堪らぬ……して其孫の居る先は日本橋區何町何丁目だ 婆唯日本橋と聞いた計りで何分に耳が遠いもんですから 大「然うか……然んから其端書といふのは、何處にあるか一寸見せて呉れ、婆其端書は處書きは大事だといつてみやが持つて行きました 大「オヤ、何といふ運の悪いことだ、夫ぢやアもう仕方がある、おみやさんの歸るまで藤澤に待つて居あけりやアあらぬ……ア、困つたあア」と大石は又茲に茫然として腕拱きしが、忽ち思ひつきて「オイ、婆さん、其お前の孫のおゆっさんは吉原の何といふ貸座敷に居たんだ 婆「ハイ大文字屋です 大「ナニ、大文字樓だ夫は大店だ……大店の娼妓から受出された先も直に知れるだらう……可し可し婆アさんや大きに邪魔をした、又來るよ 婆して貴君は何處のお方で、何の御用でお出であすつたんです 大「其話をして居ると又流車に遅れる……婆アさん少あいが此金は茶代だよ 婆「アレマア大きを銀貨を……有難う存じますといへる敏枯れ聲を後に、逸早く車に飛乗れば車夫は棍棒を上げるが否、車夫大走り

に藤澤の町を過ぎて、停車場指して駆け附けしが、今しもシグナルの洋燈は其色の變りし折にて、既に發車したる後あり、車夫は氣の毒さに頭を掻きつゝ、鉢巻を外して、旦那何うも申譯けがありやせん、ト、遅れやしたよ随分一生懸命で來たんでげすがね 大「何うも仕方がない……ナニ汝が悪いんぢやない、彼の婆アが何時までもゴタ、饒舌りアがつたからだ……宿屋は何家が宜い車へ一町へ行けば上等のものがありませんが、停車場前は皆支店ばかりで御意に入りますね……オイ相棒、何家へ御案内しようかア……、ナニ伊勢長……ウム旦那、向ふの一番大きき家へ御案内致しやす 大「何家でも宜い」と例の無頓着あれば車夫は又も轍を廻ぐらして、伊勢町旅館の門に來れば下婢等は口々に「入らつしやいまし」大石は車夫に貸錢の外、酒代を與へ旅館へ茶代を番頭下婢にまで纏頭を撒き散らし大盡氣取りあるは其金が皆夫人の物あれば氣前宜きも道理あり

〔十五〕

朝は子爵夫人に拳銃を目前に突つけられ、森は藤澤の町中を探し廻り、夜に入りては深車に乗遅れ、一身の疲れは一度に出で豪放ある壯士を以て任する大石刑事も、身は綿の如くにあり藤澤天田の一室に、正宗の小櫃五本を倒して其身も倒れ、生休なく寝入りしが下婢は起すも醒あしと、夜具打着せて立去りしに其夜も更闌けて幽に遊行寺の九ツの鐘響く頃「大石君、大石君」と呼び起す者あるに、洗石身に暇なき刑事のことよて、ムツクと起上り、誰だい……ア、熟睡た……今時分誰だ「ハイ私でございます 大私ちやア評らん……田舎の宿屋は薄ッ暗い行燈あんぞ用ふからチツとも見ぬまい……ヤッ汝は矢山貞輝だあ、何用あつて来た過日……僕が悪いとは言ひながら、決闘までして散々僕を困らせやがった、ナ、何しに来た 矢サ、其御立腹は御尤もです……實は貴君のお後を慕つて……其罪を自白しお縄を受けに参りました 大ウム、扱は俺の鑑定通

り采女ヶ原の殺人は 矢如何にも、此矢山貞輝の所爲でございます 大ウム能く自白した、悪に強きは善にも強しといふ譬もある、威心を奴だサア縄を受けろッ 矢暫くお待ち下さい、自首する上は決してお手向ひは致しません、佛しまだく外に積り重なる犯罪の数々、認め置いた此懺悔文をお渡し致してからお縄を戴きます」懐中から取出せし一通を大石刑事の胸の邊りへ差出したれば大石は何氣なく右手を伸して受取らんとする一刹那、其書類の下に鋭き匕首の光り見わければ大石は身を避けんとする間もあらせす力を籠めて突込みし尖鋒は哀れや、大石の鳩尾を貫ぬき進する鮮血は、室内に時からぬ紅葉を散したり大石は「ウーム」と身を悶へて手足を動かさず、苦しむを「モン」とお客様何うあさいましたんですよ、足をバタ〜おやんあすつてウン〜言つて……大オ、女中か、僕の首はあるか 下貴君何うあさいました 大ア、ッ夢か……夢は五臓の勞れといふが、何んだ馬鹿馬鹿しい夢か……だが今健かに彼の鏡面の矢山が来て、僕の胸を突いて……僕が血だらけになつて……下何を被仰いますの……今お隣室のお客様が、貴君が夢に魔はれて居らつしつて、ウン〜

被有るんで、寝られぬいつて……大「ウムさうか……モンお隣室の客人失敬し
ましたお氣の毒でしたね僕は今殺される夢を見たんですよ……貴君も一番で
東京へお歸りですか、御一緒に行きませう最う大丈夫ですお寝みささい……姐
さん氣の毒だつて、此金は少しだが賈でも買つて呉れ……ア、此夢が正夢を
ら斯んを苦勞をしなくつても宜いんだが……」下「毎度有難うございます、お寝
みささいまし……大石は其儘一睡の夢と明し翌朝一番列車にて東京へ歸り先
づ吉原大文字樓へ赴きけり。
新橋停車場より二人輓きの俥にて京橋署へ立寄り、夫より青原ある大字文樓へ
駈付けし大石刑事は、先づ同樓の入口へ懸りしは、午前十一時といへる頃を
ば、夜の遅き稼業の慣ひとて、今漸くに咬へ楊枝の娼妓等が、顔を洗はんとす
るもあれば妓夫輩は板の間を這ひながら雑巾がけするもあり、口喧ましき楊婆
のバタ／＼と隙子采配に叩くもありて、最と賑はしき處へ「オイコラッ」とい
ふに妓夫は顧みしが粗服ある養生風に侮りて「ちんだいお前さんは自由黨の壯
士かい、今日は樓主が朝詣りにお出であすつたから駄目だよ」といふは其頃多

かりし錢貨ひの壯士と間違へてあるべし大石は打腹立ちて大「コラ、失敬を奴
だるア、サア名刺を見ろッ 妓「へーナニ……京橋警察署詰刑事巡查……ヤッ貴
君は探偵様ですか……へいお見外れ申しやしてね、今日は結構をお天氣でござ
います、何ういふ御用向きで……マア此方へお登り下さいまし……オイお金ど
んお茶を持つてお出で 大「急に胡麻を擦るを……外でもあいが、一寸聞きた
い事があるんだ、其娼妓の源氏名は何んといふか知らんが、神奈川縣藤澤町の
者で天田ゆうといふ娼妓が當家に居つたか 妓「へー 彼女は夕顔さんと申し
やして、ツイ二三日前落籍にありやして 大「宜しく夫だ、して其女は何
處へ行つた 妓「へー 其先でございますか、エー……濱町の二丁目で……一
寸お待ち下さいまし、番地は判つて居りますから……」と帳場に入りて何やら
調べしが 妓「エー判りました、濱町二丁目五番地へ今度妾宅を新築してお貰ひ
あすつて、一昨日當家から引移りましたよ、引祝ひも立派でございまして……
大「宜しく 大「きに邪魔をしたア 妓「何う致しまして、マア何うかお茶でも
召下つて…… 大「イヤ／＼然うしては居られぬ」と言ひつゝ戶外に待せし俥

に飛乗れば車夫は又も足を宙に大石の命令の儘、日本橋區濱町二丁目五番地へ
 来り、一二軒其家を探ねしが忽ちに知れて「車旦那、此家でございませうよ」と
 梶棒を突くと同時に大石は降り立ちて、此家の模様を見るに陶器の表札に天田
 ゆう」と記し、冠木門には新らしき郵便新聞受取箱、牛乳函などの設けあり、
 門より三軒程は露砂を敷き、正面に玄關めまし格子戸あり、普請てが新築の事
 とて、心地よき程綺麗にて、吉原大離の花魁が素人となりての住居とは一見し
 ても知らるべき結構あり、大石は先づ格子を明くる鈴の音に聽て立出でしは年
 齡二十四五にやあらん、肥者の下婢にして、其處へ手を支へて大石の顔を珍ら
 しげに眺め、何方から入らつしやいました「大」お前の家に藤澤から天田みやと
 いふお婆アさんが来て居るか」と問ひ懸りたり。
 下婢は首肯きて「ハイ阿母様でございませうか、居らつしやいますよ」といふに
 大石刑事は初めて安堵し「大」一寸呼んでお呉れ「女」して貴君は何方から入らつ
 しやいました、何御用でございませう「大」僕は……ウム然うだ土手三番町から来
 たんだ「女」お名前は大、唯高梨と言へば宜い下女は奥へ入りしが、聽て出で来

りしは俊子が乳母ありし、天田みやあり「彼の貴君様でございませうか、高梨様
 からのお使いは……宜く私が此處に居る事が知れましたね「大」ウムお前かいお
 みやさんは……外の事ぢやないかお嬢さまの事に就て、誰々昨日藤澤までも尋
 ねて行つて漸く此家といふ事が知れたんだ「み」お嬢さんの事とは何でございま
 す、若しや最うお妙齡ですから宜いお聲様でもあつて、婚禮とでもいふやうな
 事ぢやありませんか「大」お婆アさん夫ぢやアお前は未だ何にも知らないわ「み」
 知らぬいとは何でございませう「大」マア此處では何も話が出来ん、人の聞かぬや
 う一寸其處まで出てお呉れ」と言ひつゝ庭の中央に連れ出し、四邊に眼を配り
 て聲を潜め、俊子さんは采女ケ原で女二人を殺した爲め、今は銀冶橋盛に
 繋がれてるんだ、僕は何を隠さう京橋警察署の大石刑事だ、俺が俊子さんを
 縛したんだが……」と詞の終らぬ中に、乳母は何思ひけん大石の胸に手を懸け
 み、エ、貴君は驚んでもない事をあさいます彼の お嬢様に限つて然んも悪い事
 をあさるお人ぢやありません、妾お二つの年から十一にお成り遊ばすまで、お
 側に居りまして存じて居ります、宜くも貴君はお嬢さんを縛つて……「大」コレ

婆アさん、苦しい咽を締めちやア放しをさい……何も僕が様子を苦しめようア
て、捕縛したんちやあい、一旦は誤まつて捕縛したが高梨夫人の恩人の娘さん
だ、一番僕も無實の難を救つて上げたいと、實は昨日からお前を探しに藤澤へ
も行つたんだ、み、オヤ左様でございますか、然うとは存じませんでした失禮しまし
た、宜くマアお出で下さいましたマア此方でお茶でも差上げます 大急に胡麻
を摺るを、時にお婆アさん其嬢さんが不思議にも事實も證據もあつて嫌疑は晴
れかいたんだ、所でお申譯けをさせるに役人が髪を捻つて尋ねては、又言ひ惜い
所もあらうから、お前に一つ面會して貰つて人情で聞いたら、其一部始終を僕
さんが打明さうと思つて、今日頼みに来たんだ、兎も角僕と一緒に高梨邸へ来
てお呉れ……併しお前が娘さんぞに、其次第を話しちやあらんよ、豫審中の事
は秘密なんだから、み、ハイ、お嬢さんがお身の災難が免れる事から妾は何處
へでも参ります又娘にも誰にも申す事ぢやありません 大宜しく早くして呉
れ……ナニ着物を着代へる、其儘で宜いよ……コラ仲屋、其邊で二人靴を最
一挽連れて来い大急ぎだ。

一十六

高梨子爵夫人と碓氷辯護士は、子爵邸の一室にて頻りに密議を凝し、大石が彼
の乳母を連れ来りし時は、如何にして俊子に面會させん、如何にして其實を吐
せんかと協議し居たり 碓夫人大石は昨晚ト、歸りませんでしたね、何う
しましたらう 夫然うですわね知れおけりやア知れおいで電信でも打つて呉れ
よば宜いのねへ 碓然うですよ……アツ夫人、貴女大石に金を幾何やりまし
た 夫勘定しませんでしたが三四十圓もありましたか 碓サア大變だ、迎も大
石は二三日戻りませんよ 夫オヤ夫は又何うしてです 碓駄目々々、然んかに
金を遣つたら歸れアしませんよ……全体彼の男は能く働きますがね、平生金を
持ちつけあいから、金さへ持つたら氣が大きくあつて、女郎買ひしたりあんど
するんです、三四十圓あれア屹度昨晩は藤澤で宿場女郎でも買つて遊んで居ま
せう 夫困りましたねへ、何うしたら宜うございませう 碓慮心して居たが、

困つたか、屹度夫に違ひあい尤も金が失われア歸つて来ますよ」と語りつゝ居りしを、大石は意外に早く乳母を連れ來り、手柄顔に案内もかく奥へ通りしが今夫人と碓氷辯護士の話を聞きて打腹立ち、襖を手荒く押開けて大石歸つたツ」といふに碓氷も驚きて碓オ、大石君か、大層早かつたか、大早かつたか、もあいものだ、宜い加減に馬鹿にし給へ、人の苦勞も知らあいで何時僕が女郎買をした、碓氷も夫人も共に打笑ひて夫大石さん堪忍してお上げあさいよ、碓大石君、彼れは申慮だよ僕の想像だ、大想像も甚だしい、僕は昨宵既に胸を突かれ血に塗れて……碓ウーム危あいの喧嘩でもしたのか僕は何うであつた、大ナニニ夫は夢だ、碓相變らず妙あ事をいふ男だ、大マア然んか事は何うでも宜いとして、彼の乳母が東京に來て居る事を知らあいから、甚々藤澤までも行つたんだ、兎に角濱町からチャーンと今引張つて來たよ、碓ウム判つたか、流石大石刑事だ、イヤ感服した……夫人最う大石が乳母を連れ來たさうです、夫大石さん有難う存じました、大ハイ、オイ婆アさん、此方へお入り、奥様も居らつしやるから失禮のあいやうに……此方にお在あさるのが碓氷辯護士で

此人が非常に俊子さんの事を心配して事さるんだ」と聞くより乳母の天田みや、其一室へ入るや否高梨夫人の顔を見るありワツと計りに泣伏し「奥様暫くお目通りを致しませんでした、此度はお嬢様が飛んでもあいな事にありまして、大婆アさん泣くあよ、夫泣ちやア事が判らん……大碓氷君要領を掴んで鏡を懸めて面會の要領を話し始めたり、舌つたら、直に俊子さんに面會させる準備が肝要だ、といふに碓氷辯護士はみやを懇めて面會の要領を話し始めたり。碓氷辯護士はおみやに向ひて「豫審中は何事も秘密にするが例れども、今回伊川俊子の犯罪は如何にも其犯罪の目的に不明ある様もあれば窃かに脱獄する者をして俊子に面會させ其情を以て俊子の錠を明けんとする由を細かに語り聞せ、猶も聲を潜めて「ソコで婆さん、お前が永年育てた情合で旨く聞いてお呉れ、嬢さんが秘密さへ打明けたら、無罪か有罪かチャーンと判つて了ふのだ、みハイ、お嬢様が無實の災難をお免れあさる事から、妾は死んでも宜うございますよ、何うかしてお助け申したいもんです、碓お前が其の位に思つて居れア大丈夫無罪にもあらう、みだが若し旦那様、彼んを温順しいお嬢様ですか

ら、ヒョツと其譯を被仰らぬ時は何うしたら宜うございませう 確ナール程
言はぬ時は……困つたあア……ウム宜い事がある、若し言はぬかつたら刺刀を
一挺持つて行つて、お小さい時分からお育て申して我子より可愛いと思ふ貴様
が、隠し事をかざるやうな水臭い御量見から、お先へ死んで了ますと、斯うい
つて其刺刀でお前は咽喉を突くんだ、夫は大變ですね、咽喉を突いたら血が
出ませう 確當り前だ……婆さん今お前何んといった、娘さんの爲から死んで
も宜いといつたらうな……ハイ……でも年寄が刃物三昧をぞ致すのは……確、
アハ、お婆さん本當に突くぢやない、突く狂言をすれば娘さんが黙つて見
ちやア居られぬ、蛇度止めるに違ひない、み成程演劇をするんですか……し
てお娘様が止めて下さらぬかつたら」大石刑事は耐わかねて、大ニ一氣の長い
婆さんだ、然んか時は雖でも止めてやるよ……確永君取う夫で何も彼も判つた
俾も来て居るから少しも早く連れて行つて、豫審判事にも安心させ、然うして
直に面會の手續きをしたら宜うございませう 確然うだ、夫人マア吉左右を
お待ち下さい、事が判つたら直に大石を飛ばせて御報知します、サア婆さん大

石君行かう」と忽ちの間に三人は玄關へ出るや否、二人鞍三葉の車に打乗り東
京地方裁判所へ急ぎ行きけり、扱て伊川俊子を見るもいふせき未決監の一房に
食を断ちて死せんの決心あるか、高梨夫人より差入れたる食事に手も觸れず、
營養不足の爲めに今は花の顔も痕なく消ゆ、頬骨高く眼も凹みて憐れある姿あ
り、且つ事實を云はぬ爲め密室禁監を命せられ、分房に唯一人潜然と泣き居り
しが、折しも押丁靴音高く來りて密室の前に立ち、コラ伊川俊子、面會人があ
るぞ天田みやちウは知つとるか、其住所は何處か 俊、ハイ、妾の乳母でござい
ます、神奈川県藤澤町……押宜し出るッ」と錠を明けて戸前を開くに、俊子
は周章しく戸前に縋りて、何うか此面會はお断りなすつて下さいませし押丁は口
を尖らし「コラ、勝手な事をいふお其方は既に重罪犯の未決囚として、公權
を停止されて居る身でありながら、我儘な事をいふを」俊子は又も涙を拭ひ、
俊、イエ、決して我儘を申す譯では無いませぬが、此面會に参りましたみや
と申すは妾の乳母でございませぬ、唯さへ妾が監獄に居ると聞て驚いて居る所へ
斯様お淺ましい姿を見せましたならば、蛇度乳母は泣死に死で了ふであらうと

存じます、妾は此様に官へ御苦勞を懸けました上に、又乳母までを苦しめては
 尙々罪に罪を重ねる道理と存じます、未ゆゑ寧ろその事遂はぬがましと思ひまし
 て、お斷りを申したのでございます、何うかお役人様此邊をお察しなすつて此
 面會はお斷りを願ひます」と又潸然と泣入るに、押丁も不慮とや思ひけん聲を
 低うして「コラ俊子、お前のいふ所も一應尤もである、併し先方も逢ひたいと
 思へばこそ遠くから尋ねて来たものぢやから又其情も察して逢うてやるが、却
 て乳母の爲であらう何うぢや、俊、ハイお優しい其お詞、夫ではお詞に甘へまし
 て矢張り而會致しませう、押ア、さうか、ウーム逢うてやれ」と心切に介
 抱して俊子の手を取り、廳へ面會所へ連れ来たり、碓氷辯蔵士と豫審判事は其
 面會所の隣室に板羽目一枚を隔て、立聞きせんと靴をも脱ぎ足音させず、
 耳を澄して聞き居たり、押丁は俊子を先に入れて天田みやを誘ひ、押、コラ天田
 みや、總て普通の面會は小さき窓に金網の張つてある處へ顔だけ出して話をし
 た上、家事向の事とか財産の事とかの願ひの外は一言も言はせんのだが、今日
 は特別寛大の處置で一室にお前と俊子と二人切りぢや、悠りと……イヤ早く返

をして下へど、面會所に突入れて扉は堅く鎖したり、斯る處へは始めて来りし
 事とおみやは唯キョロ／＼四邊を見廻すに、早くも俊子は夫と見ておみやに
 取附き、俊、オ、乳母かい、能く来てお呉れた耻かしい此姿、お前には顔を合は
 すも面目ない、み、何の面目ない事がムいませう、天神様さへ無實の難にお罹り
 ますたつ事がムいませう……併しマア此お竈れ遊ばした事は」と二人は手に手を
 取交し、聲を放つて泣入りしは無理ならぬ主従の情と室外に立つ人々も、其涙
 に手巾を濡したるが、夫と知らねば俊子はおみやに向ひ、俊、乳母妾は言はれぬ
 仔細があつて、此牢屋の中で罪の極らあいうちに死んで了ふからお前は随分と
 もに軀を大事にして、彼のおゆうといふ娘を頼りに長生してお呉れ、主従とは
 言ひあがら、生の親より育ての親と、阿母さんが死んでから親同様に思つたお
 前に、今又別れて死んで行く妾の身の上何うか推量してお呉れ、何れお前が長
 生した上で冥途へ来た其時に、育て、呉れた恩は返します。

〔十七〕

乳母ある天田みやは此處ぞと思ひ聲を潜め「お嬢様、私には何うも其評が判りませんよ、證據とやら事實とやらもあつて、貴嬢様は斯ういふお身の上とあつたのだと聞きましたたが、若しや貴嬢様は過ちでも、采女ヶ原の人殺しにお立寄りあすつたんではありませんか 俊乳母お前マア飛でもない事をいつて呉れるナ、妾は大それた人殺の場へあんど立寄りはしませんよ」「そんなら手巾に血の附いて居たのは、彼れア何ういふ譯でございます 俊夫はお役人様へも申上げた通り恥かしいが、女の身にはあるべき……」「イ、エ夫は嘘でございます、マア夫は然うとして置いて……彼の曉十二時過に何御用がおあり遊ばして、采女ヶ原へお獨りで行らした 俊夫は運動ですよ」「イ、ねそれも嘘でございます……お役人様の前では爾う被仰るんでせうが、私には本當の事を聞せて下すつても宜いぢやありませんか、誰にも申しは致しませんよ……」幸

ひお役人もお在るさらず、丁度宜い所ですよ、お早くお話しなすつて下さいまし、彼の手巾の血と夜中に淋しい處へお出であすつた譯は…… 俊乳母、お前までがお役人と問じやうにさう責めては、妾一人が困ります……今言つた事より外いふ事はありません「み、夫ぢやア何うあつても隠して被仰らぬんですね 俊、悪く思つてお呉れでないよ、妾は死んでも其譯は言はれぬ義理があるんだよ、もう聞いてお呉れでない「み、宜うございませぬ、貴嬢がそんな水臭い御座見あら、私も覺悟が御座います、私の方では我子より可愛い大当のお嬢様と思つて居るのに、貴嬢が薄情な事をなさるから私はもう生きては居りません、又貴嬢が死刑とやら徒刑とやらにお成り遊ばすのを見ては居れませんから、私は死んで了ひます、イ、エ死にますお嬢様、御免を蒙ります」とさも腹立たしげなる舉動にて、おみやは確水辯護士の命の如くに、豫て用意の剃刀を取り出し、今咽喉へ突立てんとするに俊子も流石に驚きて剃刀持つ手を緊かと押へ 俊乳母お前マア刃物三味をんぞして、危かぢやないかねお待ちよ」「イ、エ死にますもう私も定命ですから惜しい命ぢやありません、其手を放して下さいま

し、俊子は痛く決心したる面貌にて、俊「お前夫程までに……死あうとまでして聞く位あら真逆人に言ふやうな事もあからうね、そんなら内密で話して聞せるが、決して人に言つちやあらまいよ、み「何で人に申しませう、サア早く話して下さいますし、俊子は是非もあしく泣を拂ひて、姿勢を正し四邊に目を配りて小聲にあり、静に物語を始めしが、此物語に因りて犯罪者の何者あるかと、俊子が何故斯る嫌疑を受けしかの理由判然するべし。

俊子は静に語るやう、俊「妾の阿父様は舊兵庫縣の神戸で高等官で居らしたのが、政治上の事で感ずる所があつて、辭職の上横濱で貿易商をお始めなすつた所が大層を御繁昌であつたのは乳母お前も知つてゐらう、スント妾の慈母様が御病氣でお没死りなされてからお前の乳で妾も育つたのだが、お前が暇を取つて藤澤へ歸つて後阿父様を頼つて神戸から遙々尋ねて来たのは、露木げんといふ舊は藝妓をしたとかいふ女で……夫がおちかといふ妾と同歳の連れ子をして来たのだが、其おげんは阿父様が神戸に居らつしやる時分のお妾ださうで……おちかといふは阿父様のお胤でも、前の亭主の子だとかで、此二人が来ると

阿父様も態々遠方から来たものだからといつて、其儘宅へ後妻とも妾ともつかずお置きなさると其おげんが妾を邪魔にして娘のおちかといふのと、一緒に何彼につけて意地悪をするから、妾は阿父様へ願つて東京へ出て、高梨の奥様のお世話で學校へ通つて勉強して居たがね、忘れもしない三年前の十月の三十一日横濱の露木おげんから電信が来てね、阿父様が死んだから直に來いといふ文面、妾は膽を潰して彼のマア益壯健を阿父様が何うしてお逝去になつたのかと夢のやうで涙も出さず、直に横濱へ駈附けて見ると早や阿父様のお遺骸は棺の中に納まつてあるのですが、阿父様は平生御酒が過ぎた爲め斯ういふことになつたんです、就ては餘り世間の人にも此お姿を見せたくないと思つて、お醫者様に願ひ御病死のお届けをして、今棺に納めた所です、貴嬢は未だ子供ですから斯様なものは御覽なさるゝ、又見れば阿父様が冥途の隙りでお迷ひなさいますからと言はれて妾も其時は未だ十四五だからツイ其儘になつて一七日の忌日も果てたから、泣くく東京へ戻つたけれど、何うも阿父様のお死様が氣になつてあらず、生憎其時は高梨様御夫婦も九州の御郷里へ氣歸り中で、御相談も出

来ず泣寝入りにあつてると、百ヶ日の二日前又おげんから書留郵便が来たのは阿父様がお没死り遊ばしてから商賈は損ばかりで店の者は懸先も取つて逃げたり、店の代物を擡つて逃げたりト、借財が出来て、店が張り切れまいから分産をする、金はないが家と地所を買つたのを貴嬢へ分けますとタツタ一万圓阿父様の財産は人の噂にも何十万圓と聞いたのを、自由に人が分産してタツタ一万圓とは情ないと思つて、横濱へ行つて尋ねて見れば、もうおげん母子の行方は知れず愈々怪しいと思つたけれど何の證據もないので其儘にあつてると此十二月五日に飛んだ人に逢ひました」俊子は猶も話を續ぎて「妾は京橋の勸工場で買物をして向側へ移らうとすると、俥で来た紳士が妾を見ると其まゝ車を停めて、下に降りながらお嬢さんお久しぶりです、宜い處でお目に懸りました私は貴嬢の阿父様に御恩を蒙つて居りました横濱のお店の支配人矢山真輝と申す者でございます、實は貴嬢のお住居が判らぬので、今日までもお探し申して居りました、夫は外でもございませぬ旦那様のお近れにあつた時の事で、内々お話致したいのでございませぬといふやら妾も何うも心懸りで居る所だし、矢

山の顔も店で見覚えもある事だから、何うか聞きたいといふと、矢山が何しろ此處ではお話が出来ませんといつて、三十間堀の船宿の二階座敷へ引上げて、妾にいふには、貴嬢の阿父様は腦充血でお歿れなすつたと、思つて居らつしやいますか、貴嬢の阿父様は御病死ではありませぬ、毒殺されたんです、實に私は口惜しうございませぬといふから、妾は何うも實に驚いたよ」乳母も此毒殺といへる一言に顔色を變へて「マアチツトも存じませんでした、呆れて了ひますねヘンテ誰がマア然んを事を致したのでございませぬ 俊マアお聞きよ、矢山がいふには、阿父様の財産を横領しやうが爲に、お妾の露木おげんと其娘のおちかど二人で毒殺をしたんですといふから、妾は然んを事が知れてるから、ナセお官へ訴へたいのだといふと、矢山が夫は貴嬢様が被仰らんでも私が承知して居ります、直にも訴へようと思つたんですが、證據がありません尤も之は少し後に毒殺といふ事が知れたんです所で阿父様のお遺骸が、埋葬から宜いが火葬にしてあるんですから、今告訴した所でお遺骸は解剖する事も出来ず、告訴すれば却つて此方が誣告罪とあります、就ては貴嬢にも彼の母子は親の仇、私に

は主人の仇です、法律を免れても、何うも生かして置けぬ母子です、ソコで私が貴嬢と御一緒に親の仇主の仇を報いたいのですが、御一緒にお出でなさいといふから妾が夫は可けぬ、仇討ちだなんて然る野蠻な事は出来ぬから、今外に何とか思案はあるまいかといふと、兎も角仇にお逢はせ申しますから、今夜十二時三十分を合圖に、采女ヶ原の一軒家へお出でなさいと、いふ忠告を矢山の詞だから其時は別れて其晩約束通りに、采女ヶ原へ行つて見ると、勝手は知れぬけれども、タツタ一軒ある立派な和洋折衷の邸、思へばく憎らしい阿父様を毒殺して、其財産を横領し斯んな立派な邸に住んで居るとは何んたる悪人だらう、逢つたら其罪を充分責めてやらうと思ひながら、其家の裏手の方へ廻つた時に、二階の裏窓を明けて矢山がお嬢さん宜くお出で下すつた、サアお約束の物ですと何か出たよ」乳母の天田みやは不審顔して「出したはそりやア何でございます」と問ふに俊子は猶も小聲にありて「矢山がお嬢さん、サアお受取り下さいと、二階の窓から大きな物を出したが何か下へ垂れるやうな気がするので、思はず手に持つた手巾で之を受けると、妾は驚いたよ」だから

ね又能く上を見ると、血の垂れる死骸を出して居るのさ、スルト其方に表の門でも叩くやうな音がして、明けろくといふのが若しや巡査でもあれアしあいのかと思つて、喫驚りして居ると矢山が二階の戸を閉めたから、妾は矢山と話をする間もあく夢中で逃たのだが、乳母や悪い事は出来ぬんだね、其血の着いた手巾を妾は切めて阿父様の仇の血だから、手に持ち急いで俵へ乗る時、蹴込みへ落したものと見て其車夫が拾つて居たので、妾の犯罪の證人とあつて居るのだよ……だから深夜に采女ヶ原を通つた譯と、血に染つた手巾の事が斯ういふ譯なんだからお前にも判つたらね」と打明したれば乳母は呆れて暫し考へしが「そんならお嬢様貴嬢が人殺しをなすつたのぢやないといふ事をナセお役人様の前で被仰らぬんです、夫さへ言つて了へば貴嬢は明るい身におあり遊ばすんではありませぬか 俊、サア素より妾は明るい身だから然ういふのは雑作もあいが、其事を妾が言つて了へば自分が無罪にゐる其代りに、矢山が罪人にあるだらう然うすると妾の爲に親の仇を討つて呉れた大恩人の矢山を苦しめる事にあるから、何うも之ばかりは言はれぬ又自分が殺しもしぬ

のを殺したとは言へないから、寧ろその事御膳を喫へないで、死んで了へば後理も立つし妾の身の潔白は人が知らなくつても、神様や佛様が御存知であらうと思ふ、何うか妾が死んだ後は思ひ出した日には、線香の一本でも手向けてお呉れ之ばかりが一生のお頼みだよお前も随分身を大事にしてお呉れ」又も其場へ泣伏したり、豫審判事と碓氷辯護士は此事件の真相を初めて知り得たれば、顔を見合せて其意外ある犯罪に一驚を喫せしが、直ちに押丁をして俊子と乳母を引分けさせ、俊子は未決監へ送らせ乳母は面會所より引出したり、碓氷は此一部始終を大石刑事へ物語るに、大石は膝を打つて喜び「犯罪は意外であるが、犯人は僕の見込み通りであつた、僕の思ふには露木げんと、矢山貞輝とは、何か關係があつて之を殺し其罪をば俊子嬢に被せようと、巧んだものに違ひない何しろ、矢山の住處は牛込矢來町だから直に之から捕縛の手續きに及ぶよ」との語の中に早豫審判事は逮捕状を認めて持來り「大石君、何分共に頼みます大イヤ承知致しました」

〔十八〕

牛込警察署長は大石刑事と共に巡查十名を随へ牛込區矢來町ある矢山貞輝の邸へ向ひしが、門の扉は斜めに貸家の札を貼りて、唯緊く鎖しあるのみあれば一同之はと驚く中に、大石刑事は其隣家に就きて委細を訊ぬるに、矢山様は昨夜の中に何處へか御移りになりました、御家族とては全く唯大勢の御家來衆と女中はばかりにて、其等の人にも昨夜皆何處へか参られ、今朝早く家主が貸家の札を貼りに参りし外は、何事も存じませんとあるに、又其家主に就きて取調べしも鹿兒島縣に本籍のある由あれど寄留届さへせずして、昨夜突然移轉せられたるありとまでは判りしも、其行方は勿論他の事等は少しも知れざれば、大石も無念の拳を握りて口惜しと叫びしも、今は誰かく署長と巡查の勞を頼み、大石は獨り別れて豫審判事に其由を通疎し、自身は京橋警察署長に始終を上申して

其日より例の如く勤務し居たり、然るに超えて三日目、京橋警察署長は大石を呼びて、今聞いたが伊川俊子は保釋にあつて、高梨家へ戻つたさうだ……尤も逃走の夢ひはないからあア、ソコで君が一つ高梨家へ行つて俊子に矢山の事を聞いて見る、屹度何か参考にある事があると思ふし、夫に今まで心附かずに居つたが高梨夫人が、宴會に矢山を呼んだのは何ういふ關係か、何者が矢山を紹介したか等に就ては又意外の手懸りにあるかも知れん、兎に角俊子を訪問して見るが宜からう 大「成程、私も唯矢山の方ばかり一生懸命に考へて居つて、其方に心附きませんでした今日までも矢山の行方になつては彼の近隣から、其層人等までも取糺して居つたんですが、チツトも判らんです夫ぢやア行つて参ります……署長に申上げて置きますが、若し此事件に就て少しでも見込みがありますと、私は一命を犠牲に供してもやの積りですから、或は署長の命を待たず署へも欠勤して、獨立運動をやりますから此儀はお許しを願ひます 署、宜し君の力の及ぶだけやつて呉れ 大「では失敬します」と署を立出でし大石は廻町區土手三番町ある高梨子爵邸に來りければ、侍女も大石を知り居ることゝて鄭重

に手を支へて、之は大石様でございますか、宜うこそお出で遊ばした 大「オヤ御無沙汰しました奥様は御在邸ですか 侍、ハイ 大「俊子さんも居らつしやいますか 侍、ハイ唯今おみやさんがお庭へお連れ申して、御運動でございますよ、大「ア、然うですか、一寸奥様へお目通りを願つて下さい 侍「ア何うか此方へお通り遊ばして」と應接の室に入る、程なく子爵夫人は、さも嬉し氣にいそ／＼として「オヤ大石さん先日は大變失禮しましたね、併し段々々のお骨折りで有難う存じました今お嬢さんも庭に居らつしやいますからお送あすつて下さい」大石刑事は今庭へ立出づるに、乳母のおみややは俊子嬢の手を取りて、彼方此方と散歩せる所ありしが、乳母は目早く大石を見て「大石さん此度は色々お骨折りで有難う存じました、お庇様でお嬢様もお變りがあつて、妾も此様に嬉しい事はございせんよ 大「おみやさんマアお前の骨折りでお嬢さんが助かつたといふもんだ 大「イ、エ妾より、貴君が 大「だが彼の切れぬい剃刀で咽喉を突く狂言は旨かつたよ 大「又彼んか悪口を被仰いますお人の悪いこと……お嬢様此のお方が貴嬢を間違つて縛つた大石さんといふ探偵ですよ」俊子は驚い

て下俯向くに、大石も面目あげに「大私が大石と申すもので……此度は實に申譯がありませぬ。俊此度は妾の行届きませぬ所から、種々御心配を懸けまして相済みませぬ、お庇様で未だ放免とはありませんが、下げて戴きました、何うか此上とも宜しく願ひます。大最う大丈夫です、貴嬢が殺したのであいなさいよ。とは充分判つて居ます、御心配をさるゝ……、奥様々々嬢さんも未だ弱衰してお在にありませんから、嬢の爲にある物を喫へさせあぐちや可けませんよ、ソツプに牛乳、アロイロナートにツマトーゼ、滋強丸に次亜硝酸、肝油にスコット乳果、チストーフルトロンを澤山食せあぐちや可けません、僕ふんぞは成胃を引いた時は、餛飩の五六杯も食やア治るんです、ウンと食せて……」高梨夫人も打笑ひて「相變らず大石さんは滑稽な事ばかり被仰る、然んちに一遍に上げても駄目ですよ、夫にお嬢様は困る事には彼れから隙さへあれば、死あうとささるんで及物をぞは側へ置れませぬ、何うか其邊も御異見あすつて下さいよ。大ア、然うですかお嬢さん、貴嬢は未だ矢山といふ悪人に情を立つて居るんですか、彼奴は怪しからん奴ですよ、僕の考へぢやア貴嬢に罪をば遣らうと

したもんだらうと思ふ、兎に角本人の捕縛にあるまで御量見違ひをあすつちや可けません、死ぬのは何日でも死ねます、マア、御大切にあすつて早く舊の嬢におあんあさらくつちや可けませんよ。俊有難う存じます。大時にお婆アさんお前は一番運が宜いねわ。み「オヤ、大石さんナセです。大ナセだつてお嬢さんは最う近日無罪にあるしさ、お前の嬢のおゆうさんは彼んも立派な妾宅に住んで榮耀榮華のしたい三昧だ、お前も平團扇だらう。み「オホ、お庇様でねわ三方四方宜いやうにありまして……夫に旦那様が誠に宜いお方ですから大併し嬢さんが吉原に居のを、落籍するには、却々大層な金だらう。み「ハイ引祝ひと妾宅の普請で三千圓とかいふことで。大「ウーム、して其の旦那は何處の人だ。み「銀行の頭取ですよ。大「何處の銀行だ。み「三百六十五の國立銀行ですよ。大「然んち銀行はあいではいか、大石刑事は此に又不審を抱きたるは、乳母天田みやの嬢おゆうを落籍したる本人あり、姦姦あればまだしものこと。姦姦の爲に三千圓の大金を抛つは怪しき沙汰あり、之は先づあるべき事としても、其身銀行の頭取として斯る不品行をあすは、何者にやと荷に尋ねる三百六十五

国立銀行の頭取ありといふに、大石も打笑ひて「おみやさんお前間違へたんだらう然る銀行はいせ、み、エ、大石さん間違ひちやありませんよ、藤澤の宅がね番地が三百六十五番地です夫で宜く覚えて居たんですよ、大、ウーム、して何といふ人だ、み、旦那は水村さんと被仰るんですが、水臭いお方ぢやありませんよ本當に實のある旦那で、一寸視た所ではお髭の中からお歯を出したやうか、怖い顔をして居らつしやいますか優しいお方で、私にも何かと能くお心附け下すつて、お前もお前の母も二人とも東京へ来いと言つて下さるんですよ、大、ナニ髭の中から顔……オイおみやさん若しや其人は年齢四十二三で、色の高い人ぢやないか、み、アラア能く御存知ですね、其通りですよ、大石は之を聞いて、扱は繁がる縁にて乳母が娘の旦那といふに、矢山でありしか……輕卒に判断は下されぬが、何んとも知れ難し此上はおゆり方の出入を探つて見んと内心意を決したるが乳母初め他の人々にも、覺られぬやうと詞を紛らし「イヤ然んから三百六十五国立銀行の頭取に相違ない僕が知つてる、併しお前は儂

倅者だあア……僕も何日までか刑事調査をぞして居ても面白くない、銀行へでも入つて金持にありたいんだ、一度紹介して呉れ其旦那に逢つて、出世の出来るやう頼んで見たいから、み、エ、お遊びにお出でなさいますしよ何か御馳走しますから、大、併し虚心遊びに行くと僕のやうな男振りの好い者は、又おゆうさんの情夫だかんと思はれて、間男見附けたと来られちや大變だ、み、エ、旦那は然んち野暮をお方ぢやありませんよ、開けたお方です夫に此頃は毎晩お出でが、いんで娘も心配して居ります何れお出でにあつたらお知らせ申させませう、大、何日から来かい、み、四日程前から、大石は益々胸に當る事のみをれば、大、何れ近日遊びに行くよ、御馳走を頼むせ着は要らんから、酒だけは宜い酒をあア……奥さん何うもお邪魔をしました、俊子さん随分御大切になさいますし、早く御本復あさるを祈ります……左様あら失敬」と心も足も輕げある大石刑事は、此家を辭して直に俥に打乗り断付けしは、日本橋區濱町二丁目ある天田おゆうの家あり、用もあさに訪づるゝ譯にも行かねば、俥を歸して其身は唯一人此宅の前後を窺ひ、終日立ち往生の姿にて疲れ果てしが、何れ旦那と言はるゝ者が妾

宅へ来るは、夜間にこそ限るべしと猶も夜に入つても此家を離れず窺ひ居たり。

一十九

天田おゆうが宅の前後を彼方此方と廻り歩き、人の出入りに氣を付けて大石刑事は唯一心に窺ひ居りしが、夜に入りても何事なく、彼の矢山貞輝に似寄りたるものも来らざれば、遂に一夜眠らずに張番せし効もあらず、翌日は又朝早くより来りて注意するに、出入る者は魚屋、八百屋豆腐屋の外に料理屋より岡持提げて来る男のみ小間物屋らしき荷を背負ひし男と、女髪結さては呉服屋の手代らしきが来りしも怪しと思ふは一人もあらず、午後三時頃にいたりて主おゆうは常着ながら風通に小紋を重ねて、同じお召の番生羽織を羽折り髪は丸髻にして金足五分玉に玉の櫛、指には寶石入りの指環眩ゆきまでに輝かし、静かに出て来りしが、之と反對にデクデク肥わ太りたる年増下女の金盞に石鹼と卵練、白

粉に小町水あど七つ道具と言へるを提げて、入浴にと赴くらしければ、大石も之は追跡する必要もあらずと断念し、商家の戸外に佇みて其歸るを待ち居たり。近隣の者等は大石が前日より彷彿く舉動の怪しきより、刑事とは知らずして此邊の女房らしきが聞えよがしの高聲にて「チヨイとお竹さん、氣をお附けなさいよ、此頃は何處も物騒でね、新聞にも能く掻掻ひや空巢祝ひが出て居ます」と言へば下女らしきが之に答へて「然うですと……」と小聲にあり「チヨイとお隣りのお妻さん、彼の目附きの怖い番生風の男ね、アリヤア何んでせうよ、事によると彼んち男が隙を見て、何か持つて行くんですよ油断は出来ませんよ一サア夫だから妾がいふんだよ、お向のお金さんにも然ういつておやんをささいよ」との話を聞きて大石は困じ果て、何うも探偵も盗人と間違へられちやア最う末路だ、困つたあア、何うしようかしら、今日限り張番は止めやうかしらん……イヤ、折角之まで苦心して、今此位の事で之なりにしちやア馬鹿馬鹿しい、待て、何でも白晝は来る筈が朝の踊りと夜間来る所を押へるが宜い白晝はマア寝て休む事として、夜と朝に極やめう……併しおゆうの旦那が果し

て、矢山か何うかは判らんが……ア物は試した、早朝と夜だけにして最う二三日やつて見やうと、又も彼方此方と散歩する体にて暫く容子を窺ひ、おゆうの入浴より歸るまでを見て其日は立歸り、其夜に入るを待つて一夜寝ずに張番せしが、其翌朝とありて「郵便」と叫びつゝ脚夫は一通の状をおゆう方へ投げ入れたり、聽て下女は此状を奥へ持ち行きし後、再び出て來り履物を穿きたる間も遅しと狼狽へたる態にて門外へ走り出で、東角ある人力車の帳場へ聲を懸け「若い衆さん、大急ぎで一錠持つて來てお呉れ、奥様がお出懸けにあるんだから」車夫が新しき車に新しき膝懸にて萬事に注意するは上花客と見わたり、懸て立出でしおゆうは紺セルの東コートに其服装は見わねど、藤紫の頭巾にて面を隠し、無量の愛ある眼元のみを僅に出して、急がしげに車に打乗れば車夫は心得て走り出すを、下婢が「お早くお歸り遊ばせ」と金切聲を後に殘して走り出したり、大石刑事は之を見て「素破こそ一大事なり、おゆうは何處へ行くか判らねど、若しや今來りし郵書が其旦那とする、矢山貞輝にして人目を忍びて御家へは來らず、何處にか隠れて三千圓の大金を奪らし程の妻あれば、物に呼

出して樂しませんの策畧にはあらざるか、コハ猶豫あらざる大事あり、イデ此上は追跡しておゆうが何處へ行くや如何ある舉動をするかを探らんと、車の後を追駈くるに車夫は稼業とは言ひあがら、其早い事は利底大石刑事の及ぶ所にあらず、如何はせんと思案せしが側の人力車駐車場に、客待ち顔ある車夫の居たれば、無言にて飛乗り「急げ」車へ「何處へ參りませう 大何處だか判らん 車判らあいつて困りまさア 大何でも宜い、彼の先へ行く女を乗せた車の後を追駈ける、賃錢は澤山やるぞ 車長りました、有難う存じます、車夫も必死とありて駈出す容子あるも、大石の車夫は到底おゆうの車夫には速力及ばず、大石は車上にありて獨り氣のみ焦り「コラ車夫汝はナセ彼ん車夫に及ばんのだ 車へエーもう之より早くは參られませんかといふに、大石は能く見始めて始めて心付き「オヤ」汝幾歳だ 車可けませんよもう二三年で六十です、大「オヤ」情けあいな、斯んかに遅いから俺が降りて後押しをしてやらう……其位から自分で歩くはうが宜い……コレ錢はやるからもう宜い」と短氣ある石は車上より飛下り、銀貨一個を車夫へ投げ附け又一心に追駈けしが、おゆう

の車は濱町より彌売町へ出で、水天宮前より鐘橋を渡り、南茅場町より八丁堀夫より木挽町に懸りて河岸を真直に蓬萊橋を渡らんとする時、おゆうの車は新橋停車場へ向ひしかば、大石は一息して、先づ「停車場と判れば「安心」と思はず息切れする胸を叩きつゝ停車場に入るにおゆうの姿は見えず、車夫は汗を拭ひつゝ歸り行くにぞ、待合所は三等より一二等まで細かく調べたれど其影さへあきまに不審に堪へねば、先づ驛夫に向ひ「若し今汽車が出はしませんか、驛ハア只ツた今出ました」大失敗つた、何處行きです 驛國府津行が三分前に出ました」といふに扱て蓬萊橋の上にて一息せし間に、おゆうは乗りたるものからんか、一應念の爲め切符賣口で問うて見んと決心し「一寸伺ひますが一寸一寸」と小窓を叩くに驛員は「何ですもう二十五分後であつたら切符は賣出しません大石刑事は驛員に名刺を差出して「切符を買ふのちやありません、此名刺の如く京橋警察署の刑事ですが、一足遅れで今追跡して来た婦人が今の列車へ乗込んだらしいのです、就ては其女は何處までの切符を求めましたか、夫だけでも伺ひたいのです……紺セルの東コートに藤紫縮緬の頭巾を冠つて、却

々美人です年齢はまだ二十歳にあらんですお覺はありますか 驛多い乗客の中ですから判りませんが、發車の間際には……女はありませんでしたよ 大、隠しちや可けません儲かに乗つたからして待合所に居おいのです 驛、そんな事を隠したつて何の益にもありません……全く知らんのですよ 大、妙だわア 驛、併し其婦人は一二等の切符を買つたんぢやありませんか……此窓は三等です、大、アツさうですか、自分が例も三等ばかり買ふもんですから……大石は何事も隠さぬ氣性で、驛員にまで笑はるゝも頓着なく、驛の窓へ來りて「モン今ね、三等の方へ名刺を上げましたかね……京橋署の刑事です、今の列車が既に出でんとする間に美人が切符を買やしませんでしたか 驛、ハ、ア頭巾を冠つた東コートの……大、占めたくさうです、何處まで行きましたか 驛、大船までの切符を賣つたんです 大、大船といふと横須賀へ行く處ですか 驛、然うです 大、夫から先は何處へ行きましたらう 驛、此方ぢや行先までは判りません 大、成程……イヤ大きにお邪魔しました」大石は又茲に落膽したるが猶能く考ふるにおゆうが藤澤へ行きしものあれば、己が祖母の許へ訪づれしからんか、

藤澤の一驛前に降りしは又一の疑問あり、尤も郷里に近き處をれば、或は親戚にてもありて行きしも知れず、兎に角廣からぬ大船の驛をれば、隅々端々を細かく調べれば知る事もあるべし、次の列車に乗りて行かんものと決心したるが、先刻濱町の宅にて下婢が郵券を受取りて、奥へ入り夫より直に車を呼びしものゆゑ、下婢に尋ねればおゆうの行先も知れ、且何かの模様も明瞭せんと又思ひ直して、停車場を出で車に乗りて馳せ來りしはおゆうの留守宅あり、大石は格子戸の外より「オイ一寸々々」最前の下婢は立出で「オヤ誰方様でございます 大マア夫より聞きたいのはおゆうさんが今日行つた先は何處だ、下新橋の停車場でございます 大そんな事はチャンと知つてる、夫れから何處へ行つた 下存じません 大此三平二蒲め隠すを、先刻郵便が來たら、汝が奥へ持つて行つたらう 下オヤマア能く御存知ですわね、氣味の悪い事……、大僕は京橋警察署の偵探大石といふ者だ、偽はりを言ふと免さんぞ、サア言へおゆうの行先は何處だ」と厭しく問ひ懸けた、おゆう方の下婢は大石刑事の殿重ある間に顔を上りて、唯奥様は旦那から來いと被仰るから、新橋の停車場

へ行くと言つてお出懸けにあつたんです 大そんなから其番状は何處から來たんだ消印は何處としてあつた 下妾は田舎者でございまして……お恥かしうございしますが、字は讀めません 大益々汝は馬鹿を奴だをア、田舎者だからつて明治昭代の今日に番状の上書きも讀めんなんて奴があるか、チツト夜學校へでも行つて勉強しろ 下有難う存じますがおもう二十三でムいますから無益ませんよ、大して其番状は何處にある、一寸見せろッ 下婢は奥へ入りしが随て又出で來り、お生憎様ですよ、見なませんの 大忌々しいわア僕が探して……」と言ひしも眞逆に家宅搜索もしかねれば 大イヤ、大きに邪魔をした」と又も車を飛ばして新橋停車場に來り、おゆうの乗りし其次の列車にて大船驛に着いたり其頃は未だ東海線は全通せず、僅かに國府津までにて其國府津より五驛前なる大船は、横須賀鎮守府に近き事として乗客も頗繁ければ、随つて小さな停車場の割合には、車夫も多く着車の際は頗る騒がしきを、大石は其降りたる客の散るを待ちて車夫等の集れる小屋に入りて何氣なく 大オイ若い衆、此前の演車に着いた時にね、東コートに藤紫の頭巾を冠つた別嬪が降りたらう、少し用が

あつて後から来たんだが、何處へ行つたかお前方の中に知つてる者はいかね」と手軽くいふより、車夫等は大石を刑事と知らねば無難作に車知りませぬせ大「知らん事はあいな筈だがね、儘に此驛へ降りたんだ年頃は二十歳恰好、色の白い眼許に愛嬌のある女だ、降りれば屹度車へ乗るに相違ないんだ、車知りませぬか、大「誰か知つてる者はいかね、知らんて筈はいかね、何うか救へて呉れ、車者蠅をア此男は、先刻から黙つて相手にあつて、厭に人を疑つてやアがらア、知らねわ者は知らねわんだ、大「イヤ尤もだがお前方も大勢の事だから、誰か見た者があれアしあいかア、車「エ、喧ましいやい書生ボー奴、恩圖々々吐すと吐き毆るぞ、黙奴」と立ち懸るに大石も早や之までと思ひ、大「コラ、確やかに問へば附け上り、人を黙とは何事だ、車「黙と言つたが何うした、俺達は今こそ車屋さんでふいますと、ビョココ、首を下げてるが、御維新迄は東海道から中仙道を股に懸けた雲助だ、手前達に馬鹿にされちやア背中に刺文た瀧及夜姫に濟まねわや、サア叩ッ挫ぐからさう思へ」といひさま車夫が番を記したる二尺有餘の板割を持つて打蕘る、餘の理不盡に大石も血氣に早る壯士を

ば引外して襟髪取り、彼方へ手痛く投付けたり。

二一

大石刑事は無禮なる車夫を投げつけたれば、其仲間二十餘人は思ひくの棒片を持ち、右左より打懸り既に修羅場を現せんとする處へ、折能く駈附けたる大船驛取締の巡査は聲高く「コラ静まれッ、何事か」といふを大石も見て、懐中より一葉の名刺を取り出し、有の儘を陳べけるに巡査も大石が刑事あるを知つて車夫を叱し「コラ其方等は平生から旅客に對して、粗暴なる舉動を致すから斯ういふ事にもあるのだ、此人は東京の刑事巡査だ失敬な事をしては可かんぞ……怪我した者でもあるか」車夫の重立ちし者は前に出で「イヤ投げられたヤけで怪我はございませぬが、探偵様とは知らなかつたもんですから、ツイ唯のへッボコ書生だと思ひやして……」巡「コラ、へッボコとは何だ、全体汝等が常

に然ういふ詞を用ひるから可かん……大石さん最う宜しいお尋ねにある事は、私から尋ねます……ハア、然うですか……コラお前達は全く其女が降車たを知らぬのか」大勢の背後にありし一人の車夫が進み出で、「へー旦那申上げますが、其女てねあア今能く考へて見ると辰の野郎が乗つけたんぢやアねわかと思ひやすよ、あア定、留、定、エー男、ホラ先刻、お前達が番に外れた時、辰が同じ客から別嬪の方が乗せても心持ちが宜いつて言つたぢやねわか、留、ウーム然うよあア彼奴は助兵衛だから、巡、其車夫は居るか、定、未だ、歸つて来ませんよ、巡、何處とも行つた先は知れんか、留、判りません、巡、大石さん此大船は狹い土地ですから、大体遠くて二里か三里の處へ行くんですから、少しお待ちをすつたら戻つて来ませう、車夫は皆此附近の者ばかりです、夫に他へ泊るといふやうな事はありません、マア、駐在所に來て御休息あさい……オイ、汝達は其辰といふのが歸つたら一寸駐在所まで御苦勞だが知らせて呉れ、車へ一、巡、以來は旅客へ粗暴を所爲はあらんぞ見つけ次第告發するから其積りで居れ」と一方は頼み一方は脅して巡査は大石を誘ひ、大船村駐在所へ引上げた

り、大石も駐在所の厚意を謝して後、「此邊に紳士らしい者が泊つて居るか又一家を構へて居るやうな心當りはありませんか、巡、ハア、紳士ですか、イヤ此邊にはありませんが之から海岸へ出ると、却々別荘が出來まして近來移しく、東京横濱邊の紳士紳商が參りました、夫に横須賀鎮守府が近いので物價も騰貴し、餘程賑かになりました、大、若しや矢山貞輝といふ者を御存知はありますか、巡、ハ、ア、矢山貞輝……頼と聞きませんか……何處の人です矢張東京ですか、大、然うです東京にも横濱にも居つて……年は四十二三、鼻の隆い目の鋭い一文字眉で鼻の下から頤へかけて一面の濃い髭です、巡査は膝を打つて「ハ、ア、判りました、駐在所に聲を潜め、大石さん大抵夫かと思ひますが、矢山貞輝とは言はんです、水村とかいつて船越村に立派な別荘があります、人相と年恰好の容子では夫にちがひありません、一つお調べなすつたら宜うございませう、大石も大に喜び「イヤ有難う夫では御迷惑ですが御同行を願ひたいです、如何でせう、巡、ハア宜しい私も及ぶだけは盡力します、マア私方で食事でもなすつて、夫からお出懸けにあつたらどうですか、大、種々御配慮を蒙つて有難いです」

と夫より色々打合をあり、食事を済ませて、大石刑事と駐在巡査の二人は、船越村へ向ひつゝ話しながら歩みしが大石は眉を皺め、大其水村といふのが若し矢山であつた場合には、實に困るですが一つ何とかして其内幕を探る法はありますまいか。巡左様さ、先づ其家の雇人からでも調べるより外は仕方がないです。大、僕も同感です、先然ういふ方面から着手して見ませう、萬一の場合には貴官が制服で出て職權を以てお取調べを願ひます。巡承知しました。話しの中に早や水村の別荘に近きたり、茲に又おゆうは新橋停車場より大船驛に下車し俥に打乗りて船越村の別荘を尋ねしが、彼の郵書の表書のごとく水村別荘とあるに、其構へを見れば海岸の事とて海苔庵の垣を結び、砂地の廣き庭に大小三棟の家を建て、大あるは其住居とも見ね、小あるは其離室らしく、尙小あるは車夫下男等の雇人に與ふる長家らし、餘れし赤松の形面白きを以て無造作に門を作り、正面ある玄關は破風屋根にして高尙に造り敷畳前より雨落もの邊りを五十恰好の爺が箒を把りて掃除し居れり。おゆうは門を入りて會釋あり、
 若し一寸伺ひます、此方様が水村様の御別荘でございますか。爺、ハイ、

手前が水村で……」とおゆうの顔を熟々と眺めしが爺、オ、若しや貴女は東京の濱町からお出であすつたんではありませんか。ゆ、ハイ被仰る通りでございますよ、旦那様のお手紙を頂きましたして直に参りました。爺、オヤ、左様でございますか、マアマア何うか此方へお上り遊ばして下さい、今日旦那様から貴女の事を承りまして、私も心待ちにお待ち申し、唯今もお掃除を致して居りました所でございます……マア此處ではお話が出来ません……何うか此方へ……」と此邊りの爺を雇ひたるものらしく、質朴ある風体におゆうも心落着き、玄關より上りて一室に入るに客間と覺しく、床には古雅なる置物、大幅なる軸物等あれど、女の眼には唯立派とより外譽めようもなく、流石に銀行頭取の水村が別荘と見ねたりけり、自分も今は妾の身あれど、水村が常に、本妻は死しておれば遠からず本妻にせんと云ひしが、然うする時は斯る立派なる別荘にも住へる事かと、獨り笑みして爺が運べる茶食盆に向ひたり。
 おゆうは御守殿の貫入を取出し一喫し居る所へ彼の爺は又入り來りて「殿にお構ひ申しませぬ……實は旦那様も郵便をお出しをすつてから、お待ちかねの御

容子でした。が、惜しい事でございます。最う其中にはお歸りにありませう」といふにおゆるは不審顔して、ゆ、オヤ夫ぢやア旦那様はお在がらぬですか。爺、左様でございますよ、貴女をお待ちなすつて居らつしやいました。が、急に銀行のお方がお寄合で……其總會とかいふものをあさるんだらうでございますよ、多分今晚はお歸りでございませう、夫とも又唯今にもお歸りにあるかも知れませぬ、今朝程お出懸けにあつたのでございませう……アア外ぢやアございませぬ、旦那様のお邸は貴女のものでございませぬ、御悠り遊ばしてお待ち下さいませし」と左もまめくしくいふに、おゆるも心落着きて「然んから又歸つて来るといつても東京と此處では大變離れて居るんですから、今日は旦那のお歸りまでお待ち申す事としませう、爺夫が宜しうございませう……アアお茶を召上つて……オ、御膳は如何でございませう、御支度を……ゆ、イェ、爺さん構つて下さるゑ、最う汽車の中で喫つて来ましたから……爺左様でございませう、左様から今に旦那様がお歸りにあつてから差上げませう、何うも田舎の事でございますから何も御馳走がございませぬ……又御用がございませうたら、お

手をお打ちあすつて下さいませし、此お次室が旦那様のお居間で此お座敷ばかりは私も這入れませぬので、旦那様が御自身がお掃除をあすつて、這入るゑと被仰います、大事を銀行の御書面があるさうでございませう」と爺は立ち懸りながら指さすは、夫とあく入るゑと戒しむるものと見たり、跡におゆるは唯獨り茫然として居たりしが、尋ね行きし先に主人は居らず、其家に獨り歸りを待つは誠に退屈あるものにて、おゆるは、馴染あき所に何となく心細くもあれば、彼方此方を見廻し居りしが、冬の日脚の短かくて、早暮れかゝるに、彼の爺は夕餐の膳を持ち出で、田舎にて魚の新らしきより外は馳走あしといふを、紙返しく述べて立去れり、おゆるは此家の如何に別荘とは言ひながら、爺一人の留守番あるは訝かし、下婢等は居らぬものにやかと思ふ中に彼の居室ありと聞きし一室にてカタリくと音する、合點行かすと爺が置きたる洋燈の心を出して、密と襖を引開けて入るに、庭に向ひし縁の障子に隙ありて、濡れ来る風に床に懸けし一軸は、斜にありて揺るゑものと知れ、おゆるは障子を閉切りて、其軸を一直線に直さんとするとき、圖らす心附きしは軸の後ろある壁に角ある

穴ありて、其向ふは眞暗にして判らず、合點行かぬ家の作りと洋燈を取りて、穴の中を窺へば次の室には大きな器械を据ゑ、何やら角に切りたる美しくしき紙は算に亂して取散したり

三十一

おゆうは懸け物の背後ある壁の切穴へ、洋燈を差入れて窺ふに、大なる器械は印刷器の如く、美しき紙の束と見しは五圓紙幣又は十圓紙幣の百枚づゝに纏めて封印しあるあり、おゆうは思はずギョツとしつゝ「オヤマア旦那様は銀行の頭取だけあつて、恐ろしい澤山にお紙幣を……アツ此處が御用心の金庫もんだらう」と獨り語して、尙も其奥を透し見んとする時、ガツ／＼と靴音して此室に入來る者あるに驚き見れば、制服着けたる一人の巡査と探偵らしき人あり、之を浦郷村駐在巡査にして今一人は言はでも知るき大石刑事、最早前の親爺の

右手を取て動かさず、爺は慄々上りて「ナ、何も私は存じません者でございませ、此一月前から此御別荘に雇はれまして、月に五圓のお手當は戴いて居りますが、何も悪い事を致した覚えはございませぬ素は此村の學校に小使を致して之でも正直者と言はれた親爺でございませぬ、何うか御勘辨おすつて下さい」といふ舉動は別に怪しと思ふ筋もなければ、大石は其場に突放しておゆうを眺め「大、オイ天田おゆう、お前が旦那といふ水村とか矢山とかいふ人は、お前の母の主人伊川俊子に罪を被せようとして、露木げんとおちかといふ二人の女を殺した大罪人だ、眞逆にお前が悪事の連累者とは思はんが、今まで怪しいと思ふ事と見た事聞いた事は残らず言つて了ひなさい」と殿しき問ひにおゆうは初めて自分が二世の夫と思ひ込みし水村某は悪人ある事を知りしが、今までの仕向けより考ふれば悪人とは思はれず、今日までの舉動に怪しき節をさし申上げます、今此處で言ふは薄情に思はるゝより、ゆゑハイ存じて居れば何んか申上げますが、妾は何も存じませんで、唯妾を苦界から救ひ出して下さつた大恩ある旦那様とばかり思つて居りました、外には何も存じませぬ、大、ヤマア夫も宜いが

……君彼の床の間に懸物がある 巡ウム 大何んで壁に透しがあるんだ……
 妙ち處に穴がある……見給へ」と言ひつゝ二人は懸物を外して其中へ洋燈を差
 入れて眺めたるが、大石は以前采女ケ原の化物邸にて此通りある懸物を見て
 居るより、充分に身構へして先へ入り、巡査に洋燈を差出させて、巨細に取調
 べたるに、大ハハア采女ケ原の家にも怪しい仕懸けがあつたがシテ見ると彼の
 家で賈造紙幣を作つて居たんだ二人の女が殺害されてから数日の後、僕が水村
 探偵と彼の家へ忍び入つた時は、既に其器械等は取去つて何か後に残つた物で
 又取りに来た所へ、水村探偵が戸棚から入らんとした爲め、矢山の爲に拳銃で
 撃れて死んだんだ……オイ君見給へ、君の受持區内で賈造紙幣を作つて居たん
 だ、此五圓も十圓も皆賈造だ」といふに巡査を之に驚きたりおゆうも今更の如
 く驚きたるは、自分は娼妓こそしたれ、田舎生れの正直なる心に唯二世の夫と
 すべき、大切の旦那とのみ思ひし水村といへる其人は、銀行頭取とあり信じ居
 りしも、今大石刑事と駐在所巡査の談話にて、初て其悪人たる事の判然したれ
 ば、今は早隠すも詮なしと思ひしものか、吉原大文字樓にて馴れ染めし折より

今日までの一伍一什を物語りしが、大石は委細取取りて爺に向ひ「此家へは是
 まで何んあ者が出入りした、又今日主人の行つて先ぞ知つてるか」と問ふに爺
 は「イエ今考へて見れば訝しいんです、お客様は誰もお出でがなく、今日此奥
 様がお出でにあつたが初めて、又行先は何日でも何處にも被仰いませぬ」大
 石も之を聞きて二人に向ひ、マアお前さんも此爺も連累者でもないといふ事は判
 つたが、何うも此儘には出来ぬから、兎に角東京へ行つて其顛末は警察署で
 述べあげア可かん、君失敬ですが此二人を此村の役場員にでも一時預けて置
 いて下さい、さうして今にも曲者が此處へ歸つて来るかも知れぬから、之も待
 つて見あげられア可かん 巡無論さうです、兎も角大石君少し待つて下さい」と
 二人を役場へ托して歸り來り、之より二人にて其夜は徹夜して張番して居るが、
 遂に矢山は歸り來らざれば大石も早や是までと切上げ、此家の始末は駐在巡査
 に任せ置き、彼の爺とおゆうを連れて東京へ歸り、委細を京橋警察署長へ復命
 し、更に二人を取調べたるも前に同じて、少しも矢山の舉動の知れぬより、詮
 方なく爺は船越村へ歸り、おゆうは母の天田みやへ引渡して、尙もおゆうの許

へ矢山が来りやせん、又郵書等を送ることもやと密に窺ひ居たり其後おゆうは
 何を感じせしか、折あらば自殺せんとての舉動見ゆるより、母のおみやも其心を察
 し、多分は二世の夫と思ひ詰めし其人が悪人ありしかば、耻かしと思へる心と
 一つは自分よりして、夫の悪事が露見したりと思ふ女の狭き心より、斯くは死
 んと思ふものからんと、日々其心得違ひを論じて居たりしが、茲に明治二十
 一年も暮れて、世は明治二十二年の春とありぬ、高梨夫人の本夫たる陸軍中將
 高梨直則子は、永く歐米各地を軍事視察として巡回せられしが、其任務を畢り
 て、其春の三月一日といふに無事歸朝せられたり、四千万の同胞は中將の歸朝
 を祝して、新橋の停車場に郡集して歓迎し、高梨君萬歳の聲は天地を震動せし
 むる賑ひありしが、夫人の喜びは更あり、俊子嬢も身躰舊に復したる上にも尙
 強くありて、乳母のみやに連れられて高梨邸の門前まで出迎へたる所へ、中將
 は歐米の山に海に雨に雪、寒暑とも照され暖されたる征服の儘、夥多の出迎へ
 人に送られ、亟刺比亞産の駿馬に跨がりて、出發の當時と變らず、色黒き顔に
 微笑を湛へて芽出たく歸邸せられたり。

高梨中將は歸朝早々軍事視察の模様を參謀本部へ報告し、夫より天皇陛下に
 拜謁の榮を賜はりて後は、永く氣候の變れる異域にありし事とて、身の静養を
 するが宜からんと同僚の注告もあり、かたゞ俊子嬢も早登壇不充分に無罪
 とあり居れば、之も亦永く鐵窓に呻吟して身躰舊に復さねばとて、中將は夫人
 并に俊子をも伴ひて、豫て馴染ある豆州熱海の温泉に遊ぶ事と決したるが、幸
 ひ確氷辯護士も忙中の閑を得て己が夫人を連れて、俱に行きたしと請ふに又大
 石刑事も、一週間の賜暇を得たれば随行したといふに、夫人は左まで一同揃
 うて行かるゝ事あれば、願はくは彼の天田おゆうが夫の悪人ありしに落膽して
 死かんとまでする心情の如何にも憐れければ、之をも俱に連れ行きて海邊に保
 養させたらんには、之に増したる我望みはあしと願ふに、中將も小膝を打ちて
 宜き所に心附きし、然らば皆同行するが宜からん、乳母のみやも俊子に附添ひ
 て來れよとあるに、遂に中將が修善寺行きは、夫人と俊子、確氷と大石刑事、天
 田母子に侍女一人と合せて八人の一行とあり先づ新橋停車場を發して國府津驛
 に下車したるが、其頃は馬車鐵道の設けもあければ一同は腕車を列ねて、熱海

町伊豆山ある相模屋旅館に投宿したり、夫より五日目の事あるが中將は唯一人
 樓上の安樂椅子に凭りてシガーを吹しつゝ新着の横字新聞を読み居られし所へ
 大石刑事は入来りて「閣下、然う細かい物ばかり見て在つしつては折角の混治
 場も何んにもありませんチト御散歩でもおさいませんか熱海の町へでも御案内
 致しませう 中、オ、大石か、ナニニ俺は之が好きなんだ……何うだ一杯やらう
 か……」同は何うしたか 大、ハイ皆さんは濱の地引き網を見にお在てゝした、
 碓氷君までが女のやうに一緒に行つたやうでした 中、ぢやアお前と俺と二人さ
 りか 大、ハイ 中、然れば愉快ぢや、汝は酒を呑むが碓氷は酒を呑まず、女は松
 手にあらんし共に談すべきは汝ばかりだ、大にやらう 大、イヤ夫も結構です、
 中、所であ、下婢に然う言つて淡泊を肴と……酒は要らん……此ウイスキーが
 宜い……一ダースあつたら、當分は大丈夫ぢやハ、」と豪放にして快活ある
 中將の詞に、大石は委細傾承して此室を出でんとせしが中將は大石を呼止め、
 「大石、序に按摩を呼んで呉れ……強い奴が宜いぞ……然うして穢いのも可
 かんぞ 大承知しました、閣下の潔癖は存じて居ります精勵を力のありさうあ

のを連れて来ます」と氣輕なる大石は申戯を言ひつゝ、次室に下り手を拍つて
 下婢を呼ぶに、下婢は心得て引下りしが鑿て杯盤を運び、他の下婢は一人の按
 摩が手を曳きて連れ来るに、大石は夫と見るより「ア、婢さん按摩は僕が連れ
 て行くが、少し此方に注文があるんだ之を聞きし下婢の共意を得て立去るを見
 たりし大石刑事は按摩に向ひ 大、オイ按摩、一寸待て呉れ厭な事をいふ様だが
 立派なお方の前へ出るんだから粗服ぢやア御用にあらんだ、一寸僕が検査を
 するから」と見れば雨眼こそ盲ひたれ骨格選しき四十男にして、頭も青々と剃
 りて着衣も木綿あれど垢づかず、人品好き盲人あれば許して奥へ進行かんとし
 取らんとする手を振拂うたる按摩は容を正し、何です……粗服ぢや御用におら
 ん……馬鹿々々しい事だ、按摩は五錢か十錢の稼する、不具者の營業とは御存
 じあいんですか、粗服で悪るけれど美服を着た按摩をお呼びあさい、今の人間
 は外部ばかり綺麗から夫で宜いんだ、鏡芋でも錦の布片へ包めば立派と思つて
 るから困る、私も又大紋素袍長袴か、社袴か直垂れか鍍兎は大禮服、美服を着
 たら参りませうよ」と勝手知つたるものか、廊下の板疊を蹴立てゝ立去るに、

大石刑事も腹立つて、一酷か按摩だ、止せ〜未だ外に湯治場程は幾人て来て居らア、忌々しい奴だ、獨り語しつゝ又下女を呼ばんとするに奥には高梨中將が之を聞きしものか「大石何を怒つて居るんだ 大ハ、唯今按摩の奴が餘り失敬な事を申しまして、腹が立ちましたから 高ハ、ア何うしたんだ 大閣下が潔癖で居らつしやるから粗服ぢや可かん、一寸検査すると申したら、そんなら大禮服か鏡兜を着たら参りませうあんど申しますから……高成程夫は按摩の云ふ所は尤もだ、お前が粗服あんどいふから可かん、彼等は粗服は當り前だ、僕の云ふのは唯垢つかす汗臭くければ宜いぐらゐに止まつて居るんだ、是は全くお前が悪い按摩を呼んで其罪を謝し、さうして今の按摩を連れて來い 大、夫は可けません何程何でも盲目に謝まるのは御免蒙ります 高假令目であらうとも悪ければ謝罪するが宜い人は過つて改むるに憚かる事勿れた 大、困つたあア閣下は潔白過ぎるから……高さういふ氣骨のある按摩は俺は大好きだ 大、オヤ〜……宜しうムいます、謝まります〜」と廊下へ出で見たれば早影もあければ梯子段の方へ來るに今や手探りに降りんとする所おれは、

大ア、危あ〜待つてお呉れ 按、イヤもうそんな難かしいお座敷は御免蒙ります 大、マア〜待つて呉れ、實は僕が悪かつたんだ粗服〜いつたが僕の詞違ひだ、勘辨して戻つて呉れ 按、悪いと氣が附いたんですか……人は過つて改むるに憚かる勿れた 大、閣下と同じやうなことを言つてるを 按、勘辨して上げるがもう斯んが失禮を言つたんですから御免蒙ります 大、イヤ〜其氣骨のあるが、閣下の御意に適つたんだ、構はん來て呉れ〜 按摩も是非よく不承々に大石に手を取られて元の座敷へ戻りたり。

二二二

按摩は雖一禮し中將の後に廻りて、肩を揉み始めたが中將は下婢の持來りし膳に、大石と差向ひとりウイスキーを傾け始めたり、暫らくして大石は洋盃を下に置きて 大、閣下、中座しては甚だ相済みませんが奥様始め皆さんのお

歸りが餘り遅いです、一寸見て参りますから 中「イヤ構はんぢやないか女ばかりぢやあし確氷も附て居るから、何も心配する事はない、此處に居れッ 大「ではあります、もう日も暮れませう、一寸失禮して門まで出て見て参りますから 中「さうかさう汝が忠義を盡して呉れるに、止めては可かんそんなら一寸見て来て呉れ 大「承知しました」と氣輕なる大石は樓下へ降りて立出でたるやうなり、中將は酒の相手の大石が居らすありて、獨酌も興ふく無聊の餘り按摩に向ひ「按摩もツと強く揉んで呉れ 按「へー失禮ながら却々骨格が宜くつて在つしやいますから私も一生懸命にやつて居ります……如何です此位では 中「もツと強く 按「では此位ぢやア如何 中「未だく 按「どうでございませう 中「却々利かんぢやア……コレ按摩、汝は左りのみ利いて右に力が入らぬが、左利きでもあるのか 按「へいさういふ譯でもありませんね……チャオと怪我をして居りますんで……」中將は按摩の右ある手の甲を見て 中「ウーム其疵は何うしたのぢや 按「へー子供の時分に轉びまして、どういふ途端か…… 中「コリヤ按摩馬鹿をいふぢや、俺も軍人ぢや石や木の根で附いた疵か、突疵か斬り疵ぐらゐの疵

定はするぞ、此疵は鐵砲疵であらう 按「ギエー……さう何も御存知からもうお隠し申しません、實は先年山を越します時、盲目の悲しさには野猪が居るか狼が居るかチツとも分らず盲滅法界に歩行きました處、獵人が居たものと見なして一發放した外れ弾が、手に中りましたので夫から其獵人を詮議して懸合てやらうと、存じましたが旅の事でどうする事も出来ず、マア／＼咽へども當らあかつたが、未だしもの事と、不承しましてツイ夫切りにありましたが幸ひも事には手療治で治りました 中「按摩、汝は未だ俺を欺む積りか 按「却々持ちまして 中「其方が手にある疵は正に銃傷にして、加之明治九年より十年に西南の役に受けたる疵あらん、察する所官軍より打出したる舊式銃の彈丸にて、其方は必らず賊軍に與して居りしものであらう、斯く明らかに知れたる上は眞直に申して了へ、既に過ぎ去りて十年は一昔、善惡共に証の種ぢやマア按摩、前へ来て一杯呑めッ」と小事に拘泥せぬ中將の快活あるに、按摩も思はず揉む手を止めて、中將の前に進み「さう被仰られますと、實は昔話がやりたくつて居る所、失禮の段は盲目蛇に怖ぢやと思し召して下さいまし中將は按摩の容貌を

熱々凝視めて「コリヤ按摩満更知らん顔でもあいぞ」按摩は益々驚いて「何と被仰います 中思ひ出せば、オ、ソレヨ、今より昔十三年、征興論の意氣張りより、旗上あせし西郷が謀叛の軍、一時の勝利も水の泡、賊將桐野利秋が熊本に破れ、肥後の要害第一と聞ゆる八代口に漸く喰止めて、我官軍を待つ其時しも、我は血氣熾ある卅三歳の猪武者の向ふ見ず、敵陣間近く斬近む時……」之を聞きし按摩は何思ひけん、膝を進めて「ウム頃も彌生の櫻時、花を散して唯一騎、素破好き敵に出で向ふ、其時我は旅頭西郷小兵衛が手にあつて、乗出したる轟然、敵より打出す一發に、刀持つ手を此通り、思はず刀を取落す 中、オ、其刀をば敵の手に返してやつたる此高梨 按ア、敵ながら通れある勇士と、其名を尋ねんと存せしも、ハヤ敵味方入亂れ大亂軍の折とて、遺骸ながら其儘立別れしも、今日迄片時忘れぬ其勇士は、そんなら貴君様でございませしたか、して貴君の御姓名は 高、高梨直則である 按、ウム扱ハ先皇御臨朝ありし高梨中將に在せしか……存せぬ事とて失禮の段平に御容赦下さいませ 高して其方が姓名と是迄の身の上話、酒の肴に聞かん……マア一盞傾けよ」昔は敵味方の

仇敵も、今は太平の世に隔あく、打解けて献酬の後按摩は容を正し「私は維新前徳川の旗本にて、三千石を汚せし水村和泉の二男にて、父が旗本に似氣なく勤王論を唱へ、西郷先生に随ひしより恩顧を受けしが却て其身の仇となり、先生が冠を掛けらるゝと共に鹿兒島へ赴き、賊の汚名を受けて戦死……自分も兄と共に賊軍に馳加はらんとせしも兄は監視廳に奉職し居るより之を拒み、私一人父の意に随ひ西郷先生の下に走りて數度の戦をあしたるも、武運拙く先生は城山の露と消われし當日、残念ながら官軍の擒とあり、遂に懲役七年の刑を石川島監獄に苦役中、身に受けし玉疵と共に烙印の毒が眼に入り、斯く盲目とあつて放免後も十數年の其間、卑しき稼業の按摩渡世……貴君様は勳功に依て爵位まである御立身、夫に引換へ私は人の肩腰揉んで目を送るとは却々計られぬものは人の身の上で御座りますか」と懐舊の情に堪やらず、見ぬぬ目に涙を浮べ下俯向く 中、ウム水村和泉の次男であつたか、我も又盛満ふれども妻は足下と同じく番町に住みし旗本の一人、矢山清之進の娘である、今にも妻が歸り來らば、久し振り番町の話と致すが宜からう 按、ナニ貴君の令夫人が矢

山清之進の娘……そんなから私とは従弟同士、中何と申す、按私の母は矢山清之進の妹にて水村家へ嫁入り致せし者、夫ゆる私も一時は賊となり水村の姓を厭ひ、矢山の姓を冒したる事もございまして、中ウーム……然らば足下は矢山貞輝であつたか、今ぞ足下に見する一品あり」と取出したる短刀鞘打ち拂ひて、按摩の眼前に差附け「何と此尖先が其方の見ねぬ目にも見ゆるであらうか」と敦圀き荒く身構へたり。

見ねぬと知れたる按摩の眼先へ、高梨中將が差附けたる短刀は、豫て大石刑事が大切に携へ居りし、彼の水村老探偵の遺留あるが、温泉場へ來りての徒然に水村刑事の事より此短刀の話まで、委細漏れなく大石より物語りしに、中將は心に其と思ひ當ることありしか、其短刀を預りて日夜傍に置きたるに、其物語りと今思ひ合せて斯くは按摩の眼先へ差附けしものあらん、按摩は今まで堅く閉じたる兩眼をクワツツと見開き「ヤアツ、是こそ我亡き父が秘蔵の七首何うして是を中將が……」と暫し呆れたる折しも次室ある袂を押開きて、ツト立出でしは大石刑事、左の腕に捕縄を懸け右手に其端を把りて、大ヤア偽冒目の矢山

貞輝、紙幣贖造の大賊、婦人二人を殺害せしばかりか、主人殺し兄殺しの大罪人、變る姿に知らざりしが、斯く現はれたる上からはサア尋常に繩に懸れつと敦圀けば、中將も聲荒げ「如何に水村貞輝、武士は死する時に死せざれば死にまさるの耻辱ありと云ふぞイデ大石が繩に懸りて、武士らしく白狀致し、公明ある判官の宣告を受けよつ、若し又抵抗するに於ては、高梨直則が十數年の昔を茲に、武術の一手相手にあらん」と身構へたり、悠然としてグツともせぬ矢山は、少しく不審の眉を顰め「紙幣贖造、二人殺し、主人殺しは覺れあれど兄殺しとは其意を得ず、大恩や矢山貞輝、汝は惡の報にて采女ヶ原の化物邸に戸棚の中より放つたり一發に、無慘や一命を殞せし老探偵は汝が兄の水村刑事と知らざるか」之を聞いたる矢山貞輝は、流石に惡逆無道の兇漢あれども、今は下俯向きて詞なく、暫しは涙に暮れたりしが、稍あつて面を上げ、面目あびに中將の前に兩手を突き「ア、誤てり、知らぬこととは言ひながら、現在の實兄を銃殺したる人非人、イザ中將……大石君繩を打つて下さい」打つて殺つた有様に、中將も感じて、ア、惡に強きは善にもと能く改心をした、だが繩

を受くる前に是までおしたる悪事の顛末、酒の肴に物語れ、何うせ汝も命だ、送別會に此席でア悠りと飲んだ上、明日大石が附添ひて東京へ護送すれば夫で宜い、大閣下のお詞ではございますが、既に重罪の犯人である上は斯る席へ置きますも如何なもの……矢大石君、直に繩を打つて下さい、高イヤ、何も然う遠慮することは無い……大石も心配することは無い、元を糺せば親戚の縁に繋がる水村家の次男ぢや、改心すれば兵人間、善ある元の性に返らば最う逃走の憂も無い、心配せず大石……酒を持って來させる與や俊子は何うしたのか」といふ時、惶惶しく襖を開いて飛入り、矢山の膝に取籠りて「ワースと」許に泣伏すは、誰かと思れば別人からぬ矢山の愛妻おゆうにて、續いて入來るは夫人と俊子、確氷夫妻に「おみや、下婢の人々あり。」大悪人水村貞輝は取籠るおゆうを押隔て、之まで積り重なる犯罪を自白したり。

城山没落の當時退れて神戸横濱間を往來し、種々たる悪事をなせし末、横濱の伊川貿易商會に入り込み伊川俊子の父の信用を得て支配人となりしが、伊

川の後妻露木げんと姦通し其連子ちかど三人共謀して主人伊川を毒殺し、其財産數十万円を奪ひ、僅に一万圓を俊子に送り、三人共に采女ヶ原の化物邸に其身を潜め、猶も飽足らぬ慾心より賤造紙幣を作り、不義の榮華を盡せし末、吉原大文字樓の娼妓即ち天田おゆうの許へ通ひ詰めしを、おげんが覺りて格氣の果は狂人同様になり、悪事を口走るより之をも殺害せんとする時、恰も宜し十二月五日伊川俊子に出逢ひしを幸ひ、之に其罪を被せかけんと俊子を誘ひ、母子諸共に殺害し、又其後化物邸に隠せし賤造紙幣を取出す際、大石と水村刑事の爲に戸棚の秘密を発見されしかば、實兄と知らずに水村を殺害せり、而して其身は牛込に住みて紳士社會に交際を求め、高梨邸の宴會に列席せしが又も大石に咎められしかば、決闘に事よせ大石を殺さんとせしも、確氷の爲に其儘とあり、以來は多く船越村の別荘に居りて、獨り賤造紙幣を作り、時々おゆうの妾宅へ出入りせしが、おゆうの母が俊子に面會せるを聞きし當日、船越村の別荘に引移り、おゆうのみを呼寄せんとしたるに、又も大石に追跡されしを知り斯く嚴密の探偵にては到底逃ぐるに道なしと思ひ、妾を變ずる爲の變も變も劇

落し、湯治場稼の按摩とありしが、繁がる縁の中將が眼力に見顯はされたり。大石刑事今日までの働きは感謝するに詞をなし、此上は采女ヶ原の化物屋に人知れず隠しある伊川家の遺産二十万圓は俊子に還附すべし、其在處は同邸の二重壁の中ありと委細自白したれば、一統も初めて喜びの眉を開き、夫人も改めて貞輝と従弟同士の名乗を命じたるが、おゆうは何思ひけん水村刑事が遺留物の短刀を以て、縁の黒髪を剪り落し、尼法師とあつて俊子の父、水村刑事、露木親子、并に貞輝が所刑後菩提を吊はんと、殊勝ある志母のみやは素より又一同も涙に袖を濡したるが翌日大石は水村貞輝を東京に護送し、遂に公物開廷の晩貞輝は死刑の宣告を受けて、其秋市ヶ谷監獄署にて絞罪壇上の路と消えたり。茲に碓氷辯護士は中將に建議するやう、俊子は既に二十万圓の持主とあり、伊川家相續せんには、其夫をかかへるべからず大石健兒は兄ありて其家は相續せずとも差支へなき由、少しく其門閥に不足の點あれども、今回大石が警部に進したるを期とし、俊子の婚に迎へてはこいふに高梨夫妻も豫て其意ありしより、之を俊子に謀るに素より異存なく、遂に俊子と大石は華燭の典を擧げて、目出

たく其家は榮わたりといふ。

小探偵 血 染 の 手 巾 (大尾)

明治四十二年十二月十三日印刷
 明治四十二年十二月六日發行
 定價金四十錢
 郵税六錢

不許複製

(血染の手印奥冊)

著者 中村 兵衛

發行者 樋口源次郎
大阪府東區中之町二百廿四番屋敷

印刷者 井下幸三郎
大阪府南區末吉橋通四丁目十六番地

發賣所 樋口隆文館
大阪府南區三休橋段谷南入
 振替貯金大阪八七九七番

發賣所 樋口靖輝堂
大阪府千日前通の御北入

御問合せの節は凡て往復はがき又は三錢切手御封入願上候御注文の節は代金郵税共禮て前金御送附相成候然らざれば送本仕らず

特約大賣店

- 大阪府南區心齋橋町東へ入 名介昭文館
- 大阪府南區八幡町四丁目北入 三宅同盟館
- 大阪府東區北久太郎町心齋橋南入 田村熙春堂
- 大阪府東區心齋橋南入 立川文明堂
- 大阪府南區心齋橋北詰 喉々堂
- 大阪府南區四ノ橋東町南入 岡本増進堂
- 久留米市米屋町 菊竹金文堂
- 名古屋市玉屋町三丁目 星野文星堂

浮世亭夢丸講演 余部白楊速記 長谷川小信裝畫

浪花節武勇競

卷中目次

表紙 口給共 匣彩新形
定價一冊廿八錢 郵税四錢

一 猛勇磯畑伴藏

身延山上に於て美人の難を助け山賊退治の件より吉岡又三郎兼房と出會の一條。附 山田眞龍軒と竹内加賀之助の仕合。

二 中條兵庫武勇傳

兵庫之助の少年時代より河内金剛山に於て仙人に出會の一節及柔術の名人關口八郎と仕合の一幕迄

三 佐野武勇傳

仇を探して浮山主從江戸を去て東海道の旅中憐れむ哉民助仇大館の奸計に陥て小島堤にて反討の條迄

四 大久保武藏鏡

矢代家の忠臣山岡覺兵衛の妻お谷に助力を添へ、寛永二年八月田中の狩場に於て將軍家光公に御直訴の條まで……。

五 豪傑自來也

越後黒姫山にて美人に遭遇の一節より光道仙人に就て不思議ある慕の妖術を授かるの一段まで。

六 由井正雪

暗峠に於て金井半兵衛正勝に出會の一巻 附 金井正勝同山中にて父の仇犬上權之助を討取の一節

讀ても面白く、又聞ても面白いのは夢丸一流の浪花節である、もしこれに、高低抑揚の曲節をつけて、美音明々と唸らうものならば、眞に、鬼神をも感せしめ、悪魔をも泣しめ得るであらうと思ふ況や浪花印に隨喜の涙をこぼす我黨の人士にあつては恍として、天上美妙の音樂を聞くに優るの思ひがす

松月堂魯山講演 吉田松茵速記

名法 諸岡大天狗

名法 岩間小天狗

實價參拾五錢 郵稅六錢
表紙口繪共極彩色美本

エ……茲に御披露いたしますは、微塵流劔法の元祖として古來有名なる、諸岡小太郎直家先生……後に諸岡一羽齋と名告られましたる御人、及其高弟にして勇名世に轟くところの、岩間小熊之助との兩劔士の傳記でございますから、勇を尙び武を愛する諸君は一冊購て讀で見玉へ……

神田伯海講演

又新日報社員速記

實説 講談 お俊傳兵衛

實價參拾五錢 郵稅六錢

表紙口繪共極彩色美本

エ……茲に御披露いたしますは、古來演劇戲曲等において人口に膾炙いたして居りますお俊傳兵衛の實譚でございますして前日に神戸又新日報紙上に連載して讀者の大喝采を博したものでございますから、其面白くことは御請合いたしますから、是ッ非一冊は購て見玉へ……

東光啓改メ

松月堂榎林講演 丸山平次郎速記

日本 三拾傳 佐分利左内

日本 三拾傳 大嶋伴六

日本 三拾傳 梅田奎之丞

實價各一冊 參拾五錢

郵稅各一冊 六錢

表紙口繪共

極彩色美本

エ……茲に御披露いたしますは、中古拾術の三名人と云はれましたる、佐分利流の佐分里

左内重可、大島流の大島伴六吉綱、本心鏡智流の梅田奎之丞治忠……以上三名人の一代事蹟をば關西講談界の老雄榎林翁が、得意の雄辯で講演せられたのを、斯術に老練の丸山平次郎氏が、一言半句も洩すこと無く其儘に速記いたされたのでございますから、其面白いことは太鼓のやうな判を押して、隆文館の主人が御請合いたします……

桐野金城講演 天野二郎速記

天下 三傑 幽霊問答

怪談 後日の幽霊

天下 三傑 最後の譽

實價各一冊 參拾五錢

郵稅各一冊 六錢

表紙口繪共

極彩色美本

エ……茲に廣告いたしますは、古來有名なところの大隈妖靈御殿の由來記にございまして、初篇ある幽霊問答……それに續いて怪談後日の幽霊の二冊は、既に出版せられまして、大方諸君の非常なる御愛讀を蒙りましたが、いよいよ第三篇ある天下三傑最後の譽をもちまして當講談も完結を告げます故、さうか前篇同様におきましては、後藤基次塙直之薄田兼相の三家傑が、人の恐るゝ幽霊さにはいよいよ當篇におきましては、後藤基次塙直之薄田兼相の三家傑が、人の恐るゝ幽霊御殿に乗り込んで大々問答をいたす條から、眞田大助幸安が産湯の森の怪物を退治るといふ一讀血湧き肉動く壯快至極の怪談でございまして、讀んで見ずんばあるべからずたと、隆文館の主人が怒を離れて御すゝめいたします……

玉田玉秀齋講演 山田唯夫速記

玉田家十八番の内

浪花の大潮

天保後の大潮

實價各一冊 參拾五錢
郵稅各一冊 六錢
表紙口繪 共
極彩色美本

弓は袋に槍は鞘に、鎧兜は床の間の裝飾物、烏銃は獵夫の商賣道具ぐらゐに心得、大砲の香煙とは恣意のものやらも、夢にも知ら無かつた天下太平の世に、實に意外の大變事、まるで火薬庫の爆發然として、不意に發した天保大變の事變は、青天の霹靂……寝耳に水の思ひで閩國上下の心膽を寒からしめた、講演師玉田玉秀齋翁は斯道に老練の先輩である、殊に本講談の天保事變浪花の大潮の如きは、翁が最得意の讀物として玉田家十八番中に數ふるものであるゆゑ、世に有り故しの大變事とは大に違つて面白どころが有るから、是非一冊は讀で呉玉へと、隆文館の主人が慇懃て白しあげる……

神戸又新日報掲載
同記者中村兵衛著
長谷川小信 畫

探偵小説 血染の手巾

實價四拾錢
郵税六錢
表紙口繪共
極彩色美木

この血染の手巾は神戸又新日報紙上に連載して、大好評を博せし探偵小説である、可憐花の如き妙齡の一人は、可恐殺人の嫌疑者として、囹圄の裡に繋がるゝの身とあつた、吁、實に大疑問である、外面如菩薩妙齡の一處女、什麼に迫つて敢てこの大罪を犯せしものぞ、吁、疑問、實に不可解の大疑問である、此大疑問を解せんが爲に、如何に探偵が慘憺の苦辛をするか、これ一篇の讀みどころである……

中村兵衛著 長谷川小信畫

女 水 月 尼

水月尼は恁麼な女か、淫婦か貞女か、美人か醜婦か、恁麼な女で恁麼な事を爲たのか、此本を購て讀めば分曉……

表紙口繪
極彩色美木
實價四拾錢
郵稅六錢



260
554